
君からのメッセージ

月詠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君からのメッセージ

【Nコード】

N6801X

【作者名】

月詠

【あらすじ】

高瀬蓮は、中学の頃付き合っていた彼女と、とある事情により別れることになる。

高校へ入学したら、新しい恋を始めよう――。

そう思って入学した高校。けれど、近づく女子いつも比べてしまふ。なかなか次の恋へ進めない蓮は、ある日、図書館で一通の手紙を見つける。それが、自分が高校に入って、初めて気になり出していた相手だと知って……？

ープロローグー（前書き）

マザコンのように感じられる、プロローグです。

……………。

……………。

いえ、大丈夫ですよ?! マザコンじゃありません!

ちよっと言葉を間違った結果、マザコンのように感じられるだけです! ちゃんと、自立した男になります! マザコンではない!

大事なことなので、再三言うよ。

マザコンじゃない!

ープロローグー

自分で言うのも変だが、俺のお袋は凄い。そう、幼い頃からずっと
と思い続けていた。

そんなお袋に育てられてきた俺は、お袋の期待に副うほどの、お
袋に恥をかかせないような大人に、なっただろうか？

なっていればいいなと思いながら、でも、お袋から見ればまだま
だ、いやこれからずっと、俺は子供のままだらうって。だって、

紛れもない、お袋の子供なんだから

そんな俺には、幼い頃、すごく不思議だったことがあった。そし
て、無邪気にお袋に尋ねたことがあった。

『どないしてパパはかえってこうへんの？』

あの時は、酷く焦った。

いつも笑顔を絶やさず、どこまでも優しく穏やかなお袋が、あそこまで乱れ喚き、暴れるようにして泣き出したのだから――。

理由は全然分からなかった。でも、ようやく元に戻って笑ったお袋の笑みは、悲しい色に染まっていた。

今でもハッキリと覚えてる。あんな、とても辛くて苦しそうな笑みを見たときに受けた、鋭いくらいの衝撃を。

お袋は笑っていて当然。

お袋は何でもできて当然。

お袋は優しくして当然。

そんな、全然当然じゃないことを、俺は当然のように受け入れていた。

今思うと、あのときの俺はまだ4歳だ。無理もなかったのかもしれない。でも、それでも、あのときの無邪気さには今でも吐き気がする。

それでも今、お袋は当然のように笑っている。だから、俺も決めたんだ。

お袋のような、懐のでかい奴になろうって。

お袋がずっと幸せな笑顔を作っていられるように、何でも頑張ろうって。

お袋が胸を張って、“この子が自分の息子”だって言えるような、そんな子になろうって。

心にずっと誓ってきた。お袋のためになら、他人の為になら、自分の体をはれるような男になろうって。

◇
◇
◇
◇

あゝ、寒い。

俺はズボンのポケットに手をつ込むと、無人の屋上で空を見上げた。どこまでも高く澄んでいる空は、秋特有の色合いがあるような気がした。

「あ、やっぱりいた」

そう言いながら俺の隣に躊躇なく座ったのは、1年のときに知り合った、神崎 馬鹿だ。

「……今、馬鹿って聞こえた気がする」

「気のせいや」

「気のせいじゃない！絶・対に今馬鹿って言われた！」

それからこう言うときばかり勘が冴える奴。

本当に、何でこう………いや、やめておこう。鬼のような形相をした化け物が今にも角を出そうと鼻息荒くして助走をつけてやがる。

「で？菖蒲が何でここにいるんだ？友達と飯、食うんじゃないのか？」

「うーん、そうだったんだけど……」

すると彼女は「アハハ」と乾いた笑みを浮かべながら、俺の隣に座り直した。

「あー、もしかして、“彼氏と食べることになっちゃった、テヘ☆”って言う……」

「お前が☆とかキモイし。やめろや馬鹿」

「馬鹿に馬鹿って言われるのは心外だな」

「馬鹿に馬鹿って言って何が悪いのよ？」

「少なくとも俺はお前よりテストの点数はいいぞ？」

「学力の話しじゃなくて性格の話しよ、大馬鹿野郎」

これが俺と菖蒲のいつもの会話だ。いつから、と言われれば多分、

会ったときからずっとだと思った。

最初にこんなこと言い出したのは、確か、菖蒲だ。

「お前さあ。男だけじゃなく女にまで振られる可哀想な奴だったんだな」

「なっ?! ち、違うし! ってか、男子に振られてないし!」

慌てて体裁を取り繕う菖蒲を見て、俺は「あー、はいはい」と片手をヒラヒラと振った。

そんな俺の態度がもちろん気に食わなかった菖蒲は「ふが——っ! ! ! !」と意味が分からない唸りを上げていた。

そこがまた、可愛かったりする。

神崎 菖蒲。中学1年の夏から付き合い出した、俺の彼女だ。

よく笑ってよく怒ってよく泣く馬鹿で、ちょっとしたことにでもよく怒って泣いてる。さっきみたいな変な声をよく上げる、単純馬鹿だ。

単細胞でできてしまっている頭が痛々しい。

「蓮……? 今君、すごく失礼なこと考えてなあい?」

ニコニコニコニコ。

どこまでも笑顔で、そう、笑顔なんだが、怖い。

背後にあるオーラが赤を通り越して黒になるほどに黒い彼女を見て、俺は内心だっらだらに汗を流していた。

もちろん、冷や汗だ。

「いーえ？ そんなことありませんよぉ？」

「あらあ、蓮君が敬語で話すなんて、珍しいですねえ？」

あー、駄目だ。完全にキレてる。

そう感じた俺は、素直に頭を少し下げた。

「すみません、失礼なこと考えてました」

「フン、よろしい。私に逆らうなんて、200万年早いのよ！」

仰るとおりです。

そんなことを考えて顔を上げると、菖蒲と目が合って、噴出した。

こんな日常も、後少しもすれば終わってしまう。それが分かっているから、とてもやりきれなくて切ない。

「後、少しだな……」

俺の言葉に、菖蒲はピクツと肩を震わせた。そしてそのまま、力なく頷く。

「2ヶ月、だね……」

俺たちはどちらからともなく、手を繋いだ。そして、どこまでも高い澄んだ空を見上げる。

後2ヶ月もすれば、俺たちは中学を卒業する。そして、俺と菖蒲は別れる。

学校でも有名なくらいのバカップルである俺たちが別れるのには、複雑、なのかよく分からない理由があるからだ。

今はそれを思い出すのも、辛い。

そんなこんなで迎えた卒業式は、今までのどんなことよりもずっと、空虚で無意味な、悲しい式だった。



『卒業生が退場します』

その言葉と一緒に聞こえてくる無数の拍手。その中に聞こえてくる、周りの奴らの嗚咽。

ハンカチを握り締めている校長や、涙を必死に堪えている担任。
1・2年でも泣いている後輩がいて、そこには少し驚いた。

それでもやっぱり、俺は泣けなかった。

本当の悲しみは、ここじゃない。ここに、本当に俺が恐れている、
悲しむべき別れはないんだ。

「お前、何で泣かないんだよ！昨日言っただろ？泣けて！」

「なんでやねん！そないゆうなら自分が泣けばええやろ！」

出身が大阪だったと言うこともあり、俺は時々大阪弁になることがある。と言っても、小さな頃に少し喋っていたくらいだから、正しい大阪弁なのかどうかなんて分からない。

多分、間違ってるんだろうけど……。

「俺じゃ駄目なんだよ！お前が泣くからこそ、周りの女子がもっと泣くんだよ！そうすれば俺がその子たちを慰めて……」

「まずはその下心を消せ、ドアホ」

ゲシッ！と尻を蹴り上げると、そいつは「ふぁぎゃ?!」と大きな声を出して講義の声を上げている。それを周りの男子たちもつと大げさにしながら楽しんでるのを見て、ようやく感傷的になれた。

こないじゃれあうんも、これが最後やんな。高校行けば、相手が変わるんやから。

だから思った。今日だけは、今日だけは絶対、最後までずっと笑い続けていようって。

そうすることができれば、きっとこれから、ずっと笑っていられるから。

「そうだ、蓮」

弄られていたはずの親友 高橋 直人が俺の隣に並び、壁に背中をつけて呼吸を落ち着かせていた。そんな直人を見て、俺は「あ？」と声を出す。

「お前、神崎と別れるんだって？」

「っ」

ドクンと、心臓が大きく波打った。

それを知ってか知らずか、直人は続けた。

「理由があるらしいけど、それはお前が俺に教えたいと思ったら、教えろよ？絶対」

その目はどこまでも真剣で、こういうときやっぱり、こいつが親友でよかったと思うんだ。

「ああ」

頷いてそう答えると、満足したように笑った直人が、その笑みの

ままで、

「で」

と続けた。笑顔で言っているはずなのに、その笑顔が少しずつ黒くなっている気がする。

「神崎は女子高らしいじゃねえーか？何でだよ！おい！」

「はあ？」

最後に怒られる意味が分からなくて怪訝そうにしていると、直人は心底悔しそうに拳を握り締めていた。

「神崎がフリーになったんだったら、俺が神崎を手にするつもりだったのにいゝ！！！！」

「……………」

何故だろう。とても哀れに見えてきた。

そんなことを思いながらため息をつく、直人はそんな俺に気づいて不敵に笑った。

「まっ、ぜってえー無理だろうとは思ってるけどな」

「……………直人」

無理だと分かる程度の正気は残ってたのか。

驚いている俺に気づいた直人は、目を半目にした。

「お前今、ぜってえー失礼なこと考えてるよな」

「んなことねえーよ」

シレッとそう返しながらも、俺の目はあいつを追っていた。そのことに気づいて、自嘲してしまう。

今日で終わりだと、そう分かっているからこそ、目で追うのかもしれない。少しでも長く、少しでも多く、彼女のことを覚えておきたいから。彼女を想っていたいから。

「なあ、蓮」

「んー？」

「俺さ、本気で神崎が好きなんだ」

……………。

しばらくの間が空いてから、俺はようやく直人を見ることができた。そしてその目は、やはり予想していた通り、真剣だった。

「……本気、なんだな」

「だから、言っただろ？本気だって」

そう言った直人は、笑いながら菖蒲を見ていた。

その目が、少し前までの俺を思い出させて、酷く切ない。

あんな事情がなければ、俺たちはまだ、付き合い続けることができたのだろうか？それとも、直人の気持ちに気づいて、譲ったのだろうか？

俺はフツと静かに笑うと、後者を消し去った。

譲るも譲らない何も、その前に俺は、絶対に直人の気持ちに気づけなかった。

そして直人も、俺たちが別れなければ絶対に、そんなことは言わない。そういう奴だ。

だから。

「……後で、話すよ。――菖蒲を頼むな」

言われた側の直人と言えば驚いた表情をしたかと思うと、すぐにニヤツと不敵な笑みを浮かべた。

「頼まれなくてもやってやるよ」

何故だか今、無性にこいつが頼もしくて、大きく見えた。

――背は、俺よりかなり低いのに。

「一言余計だ、アホ」

「アホにアホって言われるとかなり傷つくもんなんだな。覚えてお

こう」

「だあゝから！お前はシビアに終わらせられないのかよ！」

勝手に心の中を読んだお前が悪い。

そう思いながら、それでも心の中では本当に感謝している俺は、こいつを弄りながら思っていることがあった。

こいつなら、絶対に菖蒲とうまくやっていけるって。そんな、俺が考えたって意味のないことを、ずっと考えていた。

夕焼けの空を見上げながら、俺たちは歩いている。別れのために、1歩ずつ、噛み締めるようにして歩いている。

卒業式が終わった後、近くのホテルで懇親会を盛大に盛り上がり、気づけばもう夕暮れ時だった。流石にこれ以上は駄目だと言うことで、最後の別れを惜しみながら、俺たちは会場を後にした。

ここからは、俺たちが1番恐れている別れの始まりだ。

「夕日って、こんなに綺麗なんだね」

ポツリと呟く彼女の声が、微かに震えていた。

「せやなあ」

そして俺の声も、同じように震えていた。

繋いだ手をさっきより強く握り締めて、足を止める。目の前にはもう、菖蒲の家の門がある。彼女が門の中に入ってしまったら、もう俺たちは恋人ではない。

ただの、中学のときのクラスメートになる。

それが分かっているから、俺たちはこれ以上進めない。進みたくない。

「……いつまでも、こうはしてられへんで？」

彼女は体を震わせながら、コクンと頷いた。そんな彼女が痛々しくて、でも同時に、とても愛しくて。

だから俺は、ゆっくりと、手を離した。

離れた瞬間の彼女の横顔は、今でも忘れられない。

「……………」

大きく見開かれた目には、涙が溜まっていた。瞬きをして流れ落ちた雫は、頬を伝ってあごに行き、やがては地面に落ちた。

その様子をじっくりと見ているなんてことは、できなかった。

地面に落ちる少し前に、俺の体は動いていた。

「れ、ん……」

グツと力を入れて、菖蒲の体を自分に押し付けた。

どうしようもないくらい、好きだった。気づいたときにはもう、止められないほど大きくなっていた想い。だから俺は、彼女に告白して、付き合っ。それなのに――。

「運命って」

「……うん」

「残酷やんなあ」

「っ！」

息を詰まらせた彼女は、小さく首を振って、無理矢理笑った。

「そんなこと、ない、よ……？だって、運命が残酷だって、言うんなら」

ゴシゴシと目を擦って、精一杯の笑顔を作る。それを見て、俺も熱いものをどうにか堪えて、笑うことができた。

今日は、今日だけはずっと、最後までずっと、笑ってるって決めただろ？

「私は、蓮に……出会えなかったもん」

どんな別れであったとしても、これが最後ではない。死別しない限り、また会える可能性はある。

例え今、ここで彼女と別れなければいけないとしても。それでも、出会ったことを後悔はしない。

「めっちゃ、楽しかったで？ ホンマに楽しかった」

「……うん、私も」

短い間だった。でも今は、短くてよかったって思う。

もし付き合っている時間が長かったら、想っていた時間がもっともっと長かったら。今こんなふうに、別れることなんてできなかったから。

今ならまだ、身を引ける。前に、進める。

「楽しかったから。ホンマに、好きやったから。せやから俺は、また恋するわ」

微かに俯かせていた顔を上げた彼女は、「え？」と不思議がるような表情だった。

「お前に恋して、両思いになって、それで知った気持ちもあって、付き合って楽しいって思えた。こんなに楽しいことはなかった。お前がいたから、だから楽しかった」

恋がどれだけ素晴らしいもので、そして同時に、どれだけ辛いものなのかを知った。

「だから今度もまた、そう思える相手を見つけようって思う。それが1番、手っ取り早い諦め方だろ？」

しばらく呆けていた彼女も、やがて小さく笑って、「うん」と頷いた。

きっと彼女は、思っていたはずだ。

新しい恋なんて、できるわけないって。でもそれは間違いだって思う。それに、こいつには直人がいる。あいつが、こいつのそばにいてくれる。

だから、安心して別れることができる。

「だから今度、お前に彼氏ができて、俺に彼女ができたら、また会おう?」

そうすることで、きっとまた、前に進めるから。

「約束、やで?」

「……うん!」

ニッコリと、花の咲いたかのような笑みを、最後に見れたことが救いだった。

もしこの場で彼女が、悲しい表情をしていたら。きっと俺は、そのまま彼女を連れて、どこかに行ってしまったかもしれない。

だからこのとき、本当にホッとしたんだ。変なことを、しないですんでよかったって。

「約束破ったら、何にする？」

「せやなあゝ……。ほんなら、マジで不味いプロテイン一気飲みとかどや!？」

「ええ!？あんなの飲まないといけないのお?!」

「約束を破ったら、や。破ったら。破らなええねん」

「せやなっ!」

指切りをして、彼女が玄関のドアに手をかけて、ゆっくりと振り返った。

「バイバイ、蓮」

「……またな、菖蒲」

ボタンと閉まったドアの重い音の分だけ、俺たちの間には壁がある。

もう2度と、女として、彼女に接することはないだろう。

そう考えて、胸が痛んで。

「……少しやったら、ええよな？」

流れる涙を無視して、俺は走った。

またもう1度、彼女に会うためにも――。

1、日常生活

高校に入学して、早2週間。高校生活にも慣れて、ようやく周りの顔と名前が1部一致するようになって来た頃だ。

「おはよーさん」

声をかけると、そいつは「おう！」と嫌に元気一杯の声で答えた。

一応親友の高橋 直人だ。ツンツンの髪は茶色で、ピアスが合計3つついている。赤、黄、緑の信号色だ。

「一応って何だよ、一応って！しかも信号色じゃない！」

「だから心読むなって」

そんなことを言い合いながら登校するのが、俺の毎日の始まりだ。教室に入れば何人かの女子が話しかけてくるが、速攻で話を終わらせて教室を出る。もちろん、直人を引っ張って。

「何でお前女子と話さないんだよ！俺が女子と知り合いになれないだろ？！」

「意味分からん。っーか、そない下心ある奴を好きになる戯けがおるんか？」

「タワケって何だよ、タワケって！あれか？畑を耕す、あれか？！」

「それ、鍬やろ？戯けと全然ちゃうがな。アホか」

何で“戯け”が“鍬”になるのかが分からなくて呆れたため息をつく、直人は物凄い驚いた表情で飛び上がった。

「何?! タワケって、畑を別けることじゃないのかよ?!」

どうやら、“田分け”だと思っていたらしい。つーか、それ鍬と関係ないじゃんかよ。

俺は「ハア」と盛大なため息をつく、屋上に出てすぐに壁に“戯け”と言う漢字を書いた。それを見た直人はと言うと……。

「……何だそれ？蛇か？」

何でやねん。

「漢字や、漢字。ふざけること、おどけの意味を持つ漢字や。少しは辞書引きい？」

「何で俺がそんな面倒なことしないといけ——」

「馬鹿だからやろ？」

シレッとそう返すと、直人は「馬鹿だと?!」と怒鳴り声を上げていた。そんな声を聞きながら、何となく、あいつを思い出す。

今頃、何してんのかな……。

そんな俺に気づいたのか、直人はため息をついて俺の隣に腰を下ろした。

「新しい恋、するんじゃないかったのかよ？」

「……まあ、そのつもりだったんだけどな」

気づけばあいつを思い出してる自分がある。あいつを探している自分がある。そして、女子を見て、話して、触れるたびに思う。

あいつじゃない――。

当たり前の事なのに、その事実が胸を切り裂くかのような痛みを伴ってくる。だからどうしても、女子と接したくなくなってくる。

「このままじゃ、いつまで経っても約束守れないってな」

最後に見せた、最高の笑顔を思い出して、思わず苦笑してしまう。わざわざ餓鬼っぽい指きりを律儀にしてまで交わした約束なのに、このままだと果たせなくなってしまう。

「俺から、約束したくせにな」

踏ん切りがつかない。

あいつ以上の奴を、見つけられない。見つけようと思わない。

過去に縛られ続けていたいと、願っている自分がある。

「……色々考えすぎなんだよ、お前は」

そう言うなり立ち上がった直人は、俺の頭を軽く叩いた。

「っ?」

軽い痛みを覚えて頭を押さえると、ケラケラっと笑っている直人の顔が、目に入ってきた。

「周りから完璧って言われてるお前が、恋では不完全な人間になるんだな」

「……完璧な奴なんているわけないだろ? いたら見てみたいよ」

すると直人は、俺の顔を指差して、また笑った。

「俺から見た、完璧な奴だ」

「アホ」

手を払って時間を確かめてから、俺は屋上を出た。もちろん直人もその後続く。

「お前、どうやったら恋できるか、知ってるか?」

後ろからの声に、俺は振り返ることなく「はあ?」と返した。振り返れば見えるはずだ。ニヤニヤと笑っている直人の不気味な顔が。

「不気味って何だよ、不気味って!」

ゲシッ！と背中を蹴られ、かと思ったらバランスを崩して倒れた音が聞こえた。振り返ると案の定、直人が尻と頭をシコタマ階段にぶつけているところだった。

「アホ」

「うるせー！」

顔が赤くなっているのは恥ずかしいからだろう。俺はため息をつくと、直人が立ち上がるのを待つことなく歩き出し、席についた。高瀬と高橋だから、席は近い。と言うか、前後だ。それが何だかムカツク。

「で？ 恋の仕方とやらは？」

何気に気になっていた俺がそう投げかけると、直人はやはり、ニヤニヤと不気味に笑った。

「お前、意外に一目惚れするタイプだろ？」

「は？」

思わず出た声を聞くことなく、直人は更に続けた。

「で、一目惚れしたことに気づかないでドンドン好きになっていくタイプだ。菖蒲のときだってそうだっただろ？」

当時のことを思い出し、俺は苦笑した。

一目惚れした覚えはない。ただ、何とはなしに気になりだして、

よく見ているうちにいいところも悪いところも見つけて、全部見
上で好きになっていた。が、今思うと確かにあれは一目惚れだ。

「なんや、悲しいわ」

「何だよ？」

「お前に恋を教えられる日が来たっちゅーことが」

「何発殴ればいい？」

既に拳を作っている直人を見てケラケラと笑うと、やっぱり直人
もケラケラと笑った。笑い合って実感した。

こいつの隣が、1番居心地がいい。――男の中では。

「だから、お前は待ってればいいんだよ。気になる奴ができるまで」

平然とそんなことを言われてしまっでは、これ以上あまり言えな
い。

「……今日からお前は、俺の恋の師やわ。頼んますわ、師範！」

「何か嫌だな、それ」

そんなこんなで、今日の授業も早々に終わった。

俺はバスケット部に入部した。もちろん直人もだ。

今思うと、直人と俺は小学校のときからずっと一緒にバスケットをしてきていた。1番連帯プレーが上手くいくのもやっぱり直人だ。

「何や、複雑やなあ」

「何でだよ」

少し怒った口調で言われた俺は、ペロッと舌を出すとシュート練習に戻る。

俺と直人はいつも練習後に、ゴール下、フリースロー、3Pの順に打ち、本数の少ないほうが負けと言うゲームをする。

もちろん、負けた奴はプロテイン。

「あ~~~~~!!!!!!」

「いよっしゃ!」

グッ!と高らかに拳を振り上げる俺の横で、直人は自分の手を見つめてブツブツと何だか恐ろしいことを呟いているような気がしないでもないが、この際無視だ。

「今日は特別マズイやつだから、気合入れて飲めよ?」

そう言ってプロテインを差し出すと、恨みがましい目で俺を睨んでくる直人が、ゆっくりと手を伸ばしてそれを飲んだ。

「~~~~~っ?!!」

喉を押さえて吐きそうになっている直人を見て、これからこのプロテインだけはやめようと、密かに心に誓った。

「マネージャー！悪いんですけど、スポドリ貰えますか？」

声を上げると、3人いるマネージャーが我先とスポドリを持って鬼のような形相で競い合っていた。

うーん……。

俺は自分の隣で寝転がって瀕死状態の直人の耳に口を寄せ、ボソツと呟いた。

「怖いな」

「おう」

これは、恋は盲目っていうやつのも1種なのだろうか？というか、本当にそうなのっちゃう奴がいるんだろうか？——彼女ら以外で。

家に帰った俺は、珍しく上機嫌なお袋を見て目を細めた。

「どないしたん？」

するとお袋は、困ったような笑みを浮かべて、「うーん」と言おうかどうか迷っているようだった。

「隠し事はなしやて、前にも約束したやろ」

「……せやね。堪忍」

菖蒲のことを思い出しか、お袋はさっきよりも表情を曇らせてしまった。そんなお袋を見ると、胸が苦しくなる。

「それで？ くないしたん？」

「うん。あんね？ お母さんのお兄さん、覚えてる？」

「ああ、智治さとしの兄貴？」

お袋は「そう」と頷いて、それからとても言いづらそうに口を動かした。

「……実は、お兄さんとお義姉さんが、この家に住むことになったんよ」

「何だよ、そんな………ん？」

今、何て言った？

呆然と頭を上げた俺を見て、お袋はやっぱり困ったように笑った。

「うん。一緒に住むの」

……………。

「智治の兄貴が？」

「お兄さんと、お義姉さんが」

正直に言おう。

俺は智治の兄貴は好きだ。それはもう、めっちゃ可愛がってくれたから。だが、対する姉さんは違う。

……いや、いい人なんだけど、人をからかって遊ぶ人だから気疲れしてしまう。嫌い、と言うわけじゃないが、苦手意識は持っている。

「でも、何で？」

智治の兄貴は俺が小学3年だったかのに、大阪からこちらに引っ越してきた。何でも喫茶店をやりたいからだそうなのだが、詳しい事情は聞いていない。

「お兄さんが喫茶店をやる言い出したんは、お兄さんの親友さんがお亡くなりになって、その親友さんがやってはった喫茶店を誰が継ぐんか問題になったかららしいねん」

「ほおん」

んで？それが何で同居の話になんねん。

俺の顔を見てそれが伝わったのか、お袋は苦笑した。

「その親友さん、3人の子供がおってん。当時はまだ長男が成人する前やったから、お兄さんが継ぐことでその喫茶店続けてられたん

やけどな？」

「その長男さんが成人したお陰で、智治の兄貴は追い出されると？」

「蓮」

窘めるように名を呼ばれ、俺は「堪忍」と呟いた。

確かに、言い方が悪かった。

「お兄さんは自分から言ったらしいねん。自分は手を引くさかい、後は自分たちで切り盛りせえゆうて」

で、住む場所を失ったと。

「アホやん、智治の兄貴」

「まあまあ。

でも本当は、長男が成人してすぐにお兄さんは出るつもりだったらしいねんけど、その長男がまだいてくださいゆうて、ここまで持ったんやで？」

んじゃ、もうとつくのとうに成人になってた、と。

俺は「ふうん」と言いながら茶を飲み、何となく尋ねた。

「今何歳なん？」

するとお袋は、腕を組んで顎に手を添えた。考えるときのいつもの癖ポーズだ。

「確か、25やったなあ」

「25……。なんや、はんばやんなあ」

「蓮」

「堪忍」

お袋は「もう」とため息をつくど、苦笑して「まあ」と続けた。

「去年から決めてたらしくて、来年から同居することになるからね。今は様子を見ないといけないらしいから」

少し曇った表情のお袋を見て、俺はそれ以上追求することはしなかった。ただ、少し気になった。

今は様子を見る、って……事情持ち？

「来年からは正社員として雇うって話になってね？長男がマスター、次男がサポートに回るらしいんよ」

「ふうん……。末っ子は？」

「まだ高校生やて。せやから、アルバイトかな。確か、蓮と同年よ」

「同年？ふうん。」

さほど興味がないと言う顔で食器をキッチンに持って行き、妙に

嬉しそうな顔をしているお袋を見た。

「……どないしたん？さっきから」

「ん〜？ううん♪」

明らかに上機嫌だ。

理由は分からないが、それほどに嬉しいのだろう。何かが。

「お風呂掃除、お願いね？」

「ん」

俺は風呂を沸かしに風呂場に行き、またリビングに戻ってソファに座る。それでもやっぱり、お袋は嬉しそうだ。

何がそんなに楽しいのか、たとえば、やっぱり智治の兄貴と住むことしかないだろう。ないはずなんだが、何だかそれにしては異様に楽しそうだ。

「……………ん？——ああっ！」

カレンダーを目にして、ようやく気づいた。

「結婚記念日か」

「大正解！」

クルッと振り返ったお袋の手には、白い封筒が挟まれている。

「蓮が学校に行っている間に届いたんよ。お父さんからやで♪」

ははぁ。それで上機嫌なわけだ。

俺はようやく納得して頷くと、ソファーに深く腰掛けた。

別に俺は、親父が嫌いとか言う感情はない。

憎んでもいないし、恨んでもいない。中学のときは、月に1度フ
アミレスで会っていたのだが、菖蒲の件があってしばらくは会って
いなかった。

寂しい、と言うわけでもないが、何だか物足りない気分にはなる。

それに、親父を恨んだって仕方がないし、何より今のお袋を見れ
ば、恨みなんか消えるだろう。

「……………ハア」

恋は盲目って、本当だな。



微かに甘い香りだった。

しつこくない甘い香りが、鼻腔をくすぐっていた。独特なのにすんなりと馴染んでしまいそうになるその香りは、例えると菓子みたいだと思った。

そんな香りを、俺は朝、登校中にかいでいた。

……かいでいた、って何だか変態っぽいな。

「あ、あの、高瀬君」

顔を上げると、そこには頬を微かに赤らめている女子がいた。同じクラスの子じゃないように見える。

「ん？」

「あの、これ……」

差し出されたのは、所々が焦げているクッキーだった。それを見て、また今朝の匂いを思い出す。

「くれるの？」

「あ、はい！」

微かに震えている手からヒョイツとその袋を取ると、今朝の匂いとは少し違う匂いがした。でも、どこか似ている。

「……もしかして、わざわざ作ってくれたの？」

「あ、うん。あの、高瀬君に食べてもらいたくて」

モジモジとしている女子を見て、俺はようやく笑った。

「ありがとう」

すると、何人かの女子が後ろからズドドドツと駆け寄ってきたかと思うと、俺の机の上にたくさんの菓子をバンバン置いてキヤーキヤー叫びながら教室を出て行った。

「……………」

山のようになった菓子を見て、周りの男子の恨めしげな視線を見て、物凄い困った。もちろん、誰より先に話しかけてきたのは直人だった。

「なあ蓮」

「ん？」

「殴っていいか？」

拳の準備ができている直人はチラチラと俺の目の前でそれを左右に振っている。俺は苦笑しながら首を振った。

「嫌に決まってるんだろ」

「なら、1つでいいからくれ」

「駄目だよ」

伸びてきている手を全て叩き、カバンから紙袋を取り出して中に入れた。それを見た直人は、「紙袋持ってきてんのかよ」と、半ば呆れたように言っている。

「1つくらいいいだろ?!」

周りにいた男子たちが「そーだそーだ!」と抗議の声を上げている。俺はため息をつく、苦笑しながら言った。

「これは、あの子達が俺につけてくれたやつなんだから、俺が食わなきゃ駄目だろ」

すると、周りにいた女子たちが一気にキャーッ!と騒いだ。それを見て、恨みがましい目がより一層深まる。

「もてる男は一味違うねえ」

「凡人の俺たちと言うことが違う」

「あー、やだやだ。完璧なやつほど嫌な奴はいない」

そう言いながらも人のよさそうな顔をしているから、俺も安心しながら笑った。

2、理由

8月と言えば夏。

夏と言えば夏休み、プール、海。

夏休みと言えば宿題。プールと言えば水。海と言えば――

「ナンパだあ！！！」

と、拳を高らかに振り上げている海パン野郎が俺の隣にいた。目をギラギラさせて周りを――女子を見ている。

「……なあ直人」

「あゝあゝ！！」

「お前、菖蒲はどうしたんだよ？」

ため息混じりにそう尋ねると、直人は動きを止め、それからこつちを振り向いた。その目は真剣と言うより、怒っているような色合いだ。

けれどすぐにその目を逸らしたかと思うと、

「誰のせいで身動き取れないと思ってるんだよ、この大馬鹿野郎」

と、ボソツと呟きやがった。

理由は分らないが、どうやら今は身動きが取れないらしい。俺のせいだ。

好きな子に構ってもらえないから、今は違う女子で気を紛らわそうと。そう言うことだろう。

「お前、呆れるくらい女子好きだよな」

「もちろんだ！」

そう言いながら駆け出した直人を見て、俺は深々とため息をついた。

「高瀬じゃん」

いきなり後ろから声をかけられた俺は、手に持っていたかき氷を落としそうになりながら振り向いた。

茶髪の髪で、前髪がない。というか、前髪が左右上に分けられている。筋肉マッチョのこいつ、笹原 健太は、クラスの友達だ。

「海に男1人って、悲しすぎるだろ」

呆れたような哀れむ視線に、俺は苦笑を浮かべた。

「残念。男1人じゃくて、男2人だ。もう1人は女子をはべらせよ

うと頑張っている最中らしい」

海のほうに指を向けると、健太も納得したらしく頷いた。

「ナンパ、か」

「ナンパ、だ」

俺たちは顔を見合わせると、「ハア」と大きなため息をついた。

「で？お前はどうしたんだ？彼女と、なわけねえーよな」

「なんでないんだよ！彼女とだよ！」

怒ったように声を出した健太は、言ってから「いや」と口ごもった。

何やら、こっちはこっちで色々と複雑のようだ。

「彼女、ではないか。まだ」

「まだ？」

「そのうち、なるかもしれないやつ」

「つまりは、まだお前の片想い」

「るせーよ。いちいち言うな」

そう言うなり俺の隣に座った健太は、重いため息をつくど、俺の

髪をじっと睨んだ。

「ん？」

「……お前、何で髪染めねえーの？」

俺は茶髪にした健太の髪を見て、自分の髪を触って唸る。

「何でって言われても、面倒だからってしか答えらんねえーな」

苦笑している俺を見て、「だよな」と健太も苦笑を返す。何でいきなり髪の話になったのかは知らないが、どうやら悩み事らしいと言うことだけは分かる。

「悩み事なら、相談乗るぞ？」

そう言って健太を見ると、

「お前に言っただうすんだよ」

と、苦笑を返されてしまった。

……む？

「んじゃ、俺はもう行くわ。直人がションボリ肩落として帰って来たしな」

そう言われて海のほうを見ると、確かにナンパに失敗した直人が肩を落としているのが見える。

後ろで「じゃな」と健太が言うのと、俺が直人のほうに歩き出したのはほぼ同時だった。

「おい、直人」

あからさまにいじけている直人の肩を叩き、俺は隣に腰を下ろす。

「ナンパの1回や2回や3回や4回の失敗で落ち込むなよ。たかが15回だろ？」

「もう15回だ。たかが何て言えるのはお前くらいだっけの」

彼氏持ちの女子を狙うお前が悪い。

恨めしげな目を向ける直人を無視して、俺は空を見上げた。

あの頃の空とはまた違って、晴れ晴れとした晴天だ。日差しが暑く、体中が砂の熱で焼けるかもしれない。

「……俺、振られたんだよ」

「さっきの女子たちにか？」

「違う！——菖蒲に、さ」

咄嗟には反応できなかった。ただゆっくりと、直人のほうに目を向けた。そのときの直人の目は、酷く静かだった。

何故彼氏持ちの女子ばかりを狙っているのか。その理由は、最初から分かっていた。

「どうしても、忘れられないからって言われてさ」

「……………」

「あいつ、ずっと苦しんでる。

お前を忘れようと思って、でも、忘れ方が分からないんだって。思い出にできないくらい、想いが膨らんだんだって。だから、辛いって。

——ずっと言ってたよ」

空を見上げている直人が、目に映る。無表情のその顔から分かるのは、彼が悲しいと思っていることだけだ。他の感情は、一切見えない。分からない。

「……………」

俺は、何も言えなかった。言えるはずがなかった。

だって今もまだ、俺は彼女を忘れられていない。彼女以外を、愛せない。同じ気持ちだなんて言えないし、でも嘘だって言えるはずがない。

だから俺は、何も言えない。

「別れなくても、いいんじゃないか？」

この言葉を、実行できたのなら、どんなによかったか。

「互いに想い合ってるなら、無理して別れる必要ないだろ？何で別

れなきやいけなかったんだよ。何で……なんでっ」

それ以上は口にしない直人の目から、涙が滑り落ちていくのを、俺は見た。その涙が、砂の上に落ちるのを見て、あの日の菖蒲を思い出す。

「……俺たち、双子なんだ」

あの日、あいつは必死に笑ってた。涙を流すまいとして、それでも涙が零れ落ちてた。そんな彼女が愛しくて、愛しくて。

「姉弟なんだから、結婚なんて、できないだろ」

どんなに強く想っていても。どんなに心が惹かれていても。

超えてはいけない1線がある。超えられない1線がある。そしてその1線が、これなんだ――。

「どんなに好きになっても、それは姉弟愛なんだよ。それ以上になることもなければ、それ以下になってもいけない。

そう考えると、恋人よりも姉弟のほうが、絶対に繋がり強いって。だから、我慢していける。忘れられるって、――高をくくった」

でも、そんなことなかった。

いくら姉弟だと知らされていても、今まで培ってきた想いに変わりはない。崩れることもない。むしろ、知ってから増した想いのほうが強い。

姉弟じゃ、駄目なんだ。恋人としてじゃなきゃ、駄目なんだ。でも、恋人には、なれないんだ。

「……決めたんだ。2人で」

真実を知った、あの日に。俺たちは自分たちの意思で、別れを決めたんだ。

あのとき、意地を通してでも付き合おうと言い張っていたら、きつとお袋も親父も承諾してくれていただろう。でもそれは、お袋と親父が悲しむことだって知っていたから、できなかった。

育ててくれた、親だから。

俺たち2人の、親だから。

「だからこの約束は、この約束だけは、絶対に果たさないといけないんだよ。」

どれだけ大きな想いを抱えていたとしても。それを、踏みにじることになるとしても」

これだけは、変えられない。

空は晴れ晴れとしている。悔しいくらいの、眩しいくらいの色と一緒に流れ込んでくる景色がある。

あのときの、彼女の涙。そして、笑顔。

「……あいつが忘れられないって言うなら。あいつが自分から、俺のことを忘れられないって言うんなら」

空から海へ、海から直人へと視線を移し、俺は頭を下げた。

そうでもしなければ、真っ直ぐにこいつを見れなかった。

「お前が、俺を忘れさせてやってくれ」

息を呑む音が、微かに聞こえた。波の音と、カモメの鳴き声と、周りの奴らの雑談。そんな音に混じって聞こえてきた音が、1つ。

「……なんで、俺なんだよ？」

直人の、消え入るような小さな声だった。

「何で、振られた俺に言うんだよ……？ そんなに想ってるなら、何でそばにいてやらないんだよ。何で両思いのくせに、他人に預けられんだよ。お前ら、意味わかんねえーよ！」

その目が、涙でそれ以上声が出ない代わりに、雄弁に語っていた。

自分じゃ、俺を忘れさせることなんて出来ないんだって。自分の、1番好きな奴を幸せに出来ないのに、他人にそいつを頼むんじゃないか、えーって。

分かってるんだよ、そんなことくらい。それでも駄目なものは駄目なんだって、お前も知ってるだろ？

こういうときに限って人の心を読まない馬鹿を見て、俺は呆れたように笑ってやった。

「俺じゃ駄目なんだよ。あいつのためにも、俺のためにも、俺たちは離れなきゃいけない。じゃなきゃ、前に進めない」

進まなければいけないって、分かってるから。

「俺は、お前に菖蒲を任せたい。お前だから、任せられるんだ」

お前じゃなかったら、お前がいなかったら、俺は絶対に、あのときにキツパリと別れられなかった。あの日、お前の想いを知らないままだったら、俺は今も付き合っていた。

だからこそ、頼みたいんだ。

「だから、頼む。お前との思い出で、俺との思い出を消していつくれ」

「……嫌だと、言ったら？」

顔を上げると、俯いている直人がいた。きっと今、こいつの心は激しいくらい揺れている。菖蒲が好きだと言う気持ちと、俺じゃ駄目だという気持ちで。

でもさ。お前が“嫌だ”なんて、口が裂けても言えないだろう？

「本気だって、言ったらろ」

あの日、お前は真っ直ぐに俺を見て、言ったじゃないかよ。だから俺は、安心して別れたんだ。

「あれは、嘘だったのかよ？」

違うだろ？マジだったから、あんなこと言っただろ？

「菖蒲のことが本気で好きで、ナンパだと言いながらラブラブな彼氏持ちの女にしか声をかけないお前が」

自嘲するかのような笑みを浮かべた直人を見て、俺はニツカリと笑ってやった。

「嫌だなんて言えるわけないんだよ」

菖蒲が好きで、だから忘れられない。だから、ナンパと言って女子に声をかける。だが、その女の子に答えられても困るから、わざわざ彼氏持ちに声をかけていたんだ。

だから、失敗するんだよ。

だから、お前に頼むんだよ。

そこまで本気で、菖蒲に惚れているお前だからこそ

託すんだよ



夏休みが終わり、登校初日に、またあの香りがした。やっぱり登校中のことで、俺は何故だか、その香りが嫌に印象に残っていた。

「で？」

俺の目の前にいるのは、クラスの半分くらいのやつらだった。

「お前らは俺に何の用なんだ？」

大体察しはついてる。大方、宿題を写させてもらいたいということだろう。

つか、俺の前に並んでいるこの時間を勉強に使えよ。

「何でやってこないんだよ」

そう言いながらも宿題を手渡してしまう俺に、隣の女子が呆れたように笑っていた。

「高瀬君も大変だね」

「そういう瀬川はやって来てんのかよ？」

「もちっ！」

そう言ってパラパラと捲った宿題は、

「白紙じゃん」

「Yes!」

……ハア。

そんなこんなで、俺の宿題はいつの間にかクラス中を回り、ついには他クラスにまで旅に出てしまっていた。

「なあ直人」

「おん？」

俺の宿題を事前に写していた直人は、それはもう涼しい顔で汗水たらして頑張っているクラスメートたちを見てニヤニヤしていた。

「お前、さっきからキモイで。何があったんや」

すると直人は、俺に向き直って俺の肩を叩いた。その顔は、どこまでも嬉しそうだ。

「いいことがあったんだよ」

「ほお？」

何が？と促す前に、直人は立ち上がって拳を振り上げていた。

「ようやく今日会えるんだあ！……!!」

……そこかよ。

俺はまたため息をつきながら、ニヤニヤと気持ち悪い直人を尻目

に、何とはなしに朝の香りを思い出していた。

お菓子に何より近い香りで、甘すぎないあの香り。懐かしいようなその香りは、どこかでかいだことがある気がする。

「……どこ、だったかなあ」

気づけばそればかり考えている俺は、どこかおかしいのかもしれないと、直人を見ながら思った。

……あんなふうにはなりたくないな。

3、喧嘩

「馬鹿やろ」

「るせー……」

そっぽを向いてムクレタ表情の直人の左頬は、赤く腫れている。

それを行った犯人は俺だが、状況が状況だった為に、特に喧嘩になるようなこともなかった。

「何であないなと言うたんや、自分。馬鹿やろ？」

やっぱり“馬鹿”を繰り返す俺を見て、直人はますます目を逸らす。

「だから、うるせーっての」

「このままやと嫌われるで。どないしてくれんねん、この馬鹿」

「……………」

とうとうため息をついた直人は、やっと俺を見た。そして、すぐに目を逸らす。

「…………るせー」

もちろん、今の俺はかなりキレてる。当たり前だ。あんなことになってキレない馬鹿はいない。

多分。

「ハア……。なあ、直人」

「んだよ」

口をへの字に曲げながら睨むように見てくる直人は、ようやく体をこちらに向けた。

だから俺は、直人の右手に思い切り、消毒液が染み込んだ脱脂綿を押し付けた。

「だだだだだだっ?!」

「黙れ馬鹿」

さらに強く押し付けると、流石の直人もキレた。

「だあああああ!!! いてえーんだっつーの! アホか?!」

目に溜まった涙と吊りあがった眉を見れば、確かに痛く怖いかもしれない。ただ、頬の腫れがあるせいでアホ面だ。いつもの俺だったらここで大爆笑しただろう。

「お前ほどやない」

淡々と言葉を返す俺を見て、直人は物凄くバツ悪そうな顔をして

座り直した。

「……悪かったよ」

俺は直人を見て、それからため息をつく、冷えピタを左手に持ち、そのまま直人の左頬を叩いた。

バチッ！

「だあっ?!」

跳ね上がって痛がる直人を見て、俺はようやく爆笑した。

「ばあか！」

そう言いながら直人の手を包帯で巻くと、救急箱を閉じて肩を鳴らした。

今から1時間程前。

夏休みが終わって、衣替えになった今日。どちらかと言うと暑がりの直人は、まだ夏服のまま登校してきた。俺はもう冬服に変えていたが、クラスではちらほらとまだ夏服の奴らがいた。

そして馬鹿な直人は、夏服の奴らを集めて「夏よ戻って来い」やら「冬よ来るな」やると叫んでいた。

そこまではよかった。全然まったく持って問題はなかったんだ。

事件は放課後に起こった。

「それじゃ、HRを終わります」

担任がそう言うのと、クラスの奴らははしゃぎだした。

今日はほとんどの部活が休みで、いつもの倍以上の人数が教室に残っていた。直人はまた夏服談論を始め、俺はそれが終わるまで、少し離れた席で本を読んでいた。

そして、あいつが来たんだ。

ガラッ！

息切れをしている少女が、教室のドアを開けて教室中を見渡していた。もちろん、クラス全員の視線が、そいつに集まった。

白ワンピースの制服は、ここらでは1校しか着ていない。

結構有名な、女学院の制服。

短い茶髪に、大きな瞳。見覚えのあるその姿に、直人が呆然と呟いた。

「菖蒲……？」

直人の声を聞いた菖蒲は、ホッとしたように俺の後ろにいる直人に駆け寄った。

「よ、よかった、まだ……帰ってなかった」

安心したように笑っている菖蒲を見て、もちろん周りの男子は黙っていない。

「何だよ直人！誰だよ、この可愛い子！」

1人の男子がそういう始めると、もちろん周りの男子たちも便乗し始める。

「メチャクチャ可愛いじゃん！名前は？」

「君、直人のなんなの？フリーなら俺にしない？」

「合コンしようよ！」

「マジでタイプだって！」

口々に男子にそう言い募られた菖蒲は、今きつと、困ったような表情で直人を見ているんだろう。それを考えると、本より興味はそちらに引かれた。

そして、次の一言が全ての原因だった。

「何しに来たんだよ」

冷たい一言だった。

「……え？」

怯えたような菖蒲の声を聞いてから、男子たちもハツとしたように口々にまた言い出した。

「何だよ、直人！そんな言い方ないだろ！」

「そうだよ！せっかく来てくれてんのに」

「何言ってるんだよ、らしくないぞ？」

直人はそれに対しては何も言わなかった。俺は何やら様子のおかしい直人が気になって振り向き、怯えた表情の菖蒲を見た。

久しぶりに、間近で見た気がした。

「何でここに来たんだって、聞いてんだよ」

その声を聞いた菖蒲は、酷く怯えた表情をした後、確かにこちらを見た。俺を見て、助けを求めるかのように泣いた菖蒲を見て、次の瞬間には大きな音を聞いた。

ガシャンッ！！！！

驚いて音のするほうに目を向けると、右手で窓を割った直人がいた。怒りのせいなのか肩が震えていて、微かに俯いているせいで表情が見えない。だが、一瞬だけ見えた。

苦しそうに、歯を食いしばっていた表情を。

「……なんで来たんだよ」

右手を下ろした直人は、菖蒲を凝視した。それはもう、かなり怒っている目で。

「お前、女子高だもんな。たまには男子を見たいとか思ってたのか？」

嘲笑うかのような笑みを浮かべる直人を見て、俺はため息をついた。本を机の上に置き、直人の周りにいた男子に少し下がるよう指示を出す。

男子も、遠巻きに見ていた女子たちも、何が起るのかとハラハラしているのが目に見える。

「やめとけて、蓮」

そう呟かれた俺は、ニヘラッと不敵に笑って見せた。そしてその男子の頭を小突いた。

「平気だよ。俺は、な」

その言葉に眉を顰めた周りの男子は、俺が直人を見た瞬間に遠くへと移動した。多分、直人を見る俺の目がかなりやばかったんだろう。

「そん、なんじゃ……」

震える声が、あのを思い起こさせる。

あの時も震えてたよな、お前。

「大方、男子というよりは、蓮を見に来たんだろうけどよ」

嫌味たっぷりの口調に、菖蒲はつい、と言うような感じで言葉を荒げた。

「何なのよ、さっきから！蓮は今関係な――！」

ガンッ！

直人が近くの机を思い切り蹴り、菖蒲の肩がビクッと震えた。そして、直人は怒りが頂点に達したようだった。

「じゃあ、何でさっきから蓮ばかり見てんだよ?! いい加減にしろよ! そんなんだからいつまで経っても忘れら――」

それ以上は言わせなかった。

俺はギリギリのところまで止めようと考えていたのだが、それよりちょっと早く手が出ていた。

妙に乾いた音が、教室中に響き渡り、同時に倒れるような音も聞こえた。

直人は自分が蹴った机に体を乗せると、驚いたように俺を睨み、掴みかかってきた。

「何すんだよっ!」

鬼のような形相の直人を見て、俺はどこまでも低く、冷たい声で言った。

「触んなや」

直人の手を振り払うと、直人は「なっ?!」と声を上げ、固まった。

「自分、俺の前の言葉忘れたん？」

怒りは、どうやら俺にもあったらしい。フツフツと煮えたぎっている怒りを静めるように、俺は努めて低い声で言った。

「本気なんやったら、傷つけるようなこと言うんやないで、ドアホ」

その声でようやく我に戻ったのか、直人はその場に立ち尽くした。それを見てから、菖蒲に視線を移す。

「菖蒲」

俺の声に菖蒲は、ビクッ!と肩を震わせた。そして、ゆっくりと俺を見て怯えるように眉を垂らした。

「……大丈夫か？」

極めて優しい声でそう尋ねると、菖蒲はコクコクと震えながら頷いていた。

そんな彼女を見て、ついつい手が伸びた。

頭をクシャクシャで撫でると、菖蒲はゆっくりと緊張を解いた。

「すまん。こいつにはよおっく言って聞かせるさかい、今日は帰り？」

「でも」

不安げにチラッと直人を見た菖蒲は、訴えるように俺を見た。だが俺は、頑として首を縦には振らなかった。

「今自分が何言うても逆効果や。分かっとるやろ？
それに、こいつがこない怒るんもしゃーないで？——悪いんは、俺らなんや」

菖蒲は目を大きく見開くと、乾きかけていた涙をまた流した。その姿を見て、あの日を思い出す。

俺は震える手をギュッと握り締めると、笑って見せた。精一杯、平気を装って。

「……今日は帰り。どうしてももっちゅーんやったら、送ってくさかい」

するとゆっくりと首を振り、「大丈夫」と震える声で言った。そんな菖蒲を見て、俺は苦笑した。

「そないな顔するなや。」

それから、こいつから謝るまでは、絶対に自分からメールしたらあかんで？電話もや。ええな？」

もう1度笑ってやると、ようやくホッとしたのか、菖蒲は「うん」と頷いた。そして、切なげに小さく笑った。

「ごめんね、約束……破っちゃって」

「ええで、別に。お前が、そろもうゴツツまっずいプロテイン、飲むだけなんやから」

……………。

「ええっ?!」

素っ頓狂な叫び声をあげた菖蒲を見て、俺はメツチャ笑った。

「約束やろ?俺はあないゆうたんになあ……約束破らなかったら、飲む必要ないって」

「待ってよ!これもカウントされるの?!」

「結果的に俺と会ったやろ?せやから、カウントや」

「そんなの聞いてない!卑怯だよ!」

「聞いてなくても約束や。」

明日、直人と一緒にプロテイン持って家に行ったるさかい、楽しみに待っとれな?」

「嫌だ!絶対に嫌!」

「約束やもん、しゃーないわ」

シレッと返すと、菖蒲は「うげえ」と気持ち悪そうな顔をした。

そんな顔を見て、俺は思わず噴出していた。

「そないアホ面しとったら、男が逃げるで？」

「そ、そんなことないもん！」

「あるある」

「ないっ！」

必死になっている菖蒲に、「はいはい」と片手をヒラヒラと振ると、やっぱり前と同じように、「ふが——っ！」と妙な怒り方をする。それを見て、俺は菖蒲の目を自分の手で覆い隠した。

これ以上はもう、そばにいてはいけない。

「もう、大丈夫やんな？」

菖蒲は動きを止めると、しばらくしてから小さく頷いた。震えが止まった手を、また微かに震わせながら。

「せやったら、もう帰り。俺はこれから、馬鹿を治したらなあかさかい」

「……分かった」

ようやくいつも通りに戻った菖蒲は、駆け足で教室を出て行った。それを最後まで見送った後、俺は盛大なため息をついた。そして、振り返ることなく言った。

「あんまあいつ、泣かせるなや？」

あのときの涙と、今の涙と。どちらも辛かったけど、今の涙のほうが切なかった。

あの涙を止められたとしても、拭ってやる手を、俺はもう捨てたから。

「……せやないと、俺が搔っ攫うで？」

振り返って直人を睨むと、あいつはこれ以上ないくらい目を大きく見開き、衝撃を受けていた。

それで十分だった。

「さて。保健室行くぞ、直人。早く怪我の治療しないと、化膿するだろうしな」

そう言って教室を出た俺を、しばらくしてから直人が追ってきた。妙に気まずそうに、目を逸らしながら。

救急箱を元の位置に戻した俺は、息を思い切り吸い込んで肺が空になるまで吐いた。

「帰るか」

時計を見ると、もう5時を過ぎていた。

「今日は早帰れる思うててんけどなあ……」

「それでもいつもよりは格段に早いだろ」

「せやな」

階段を登って教室のドアを開けると、意外なことにクラスのやつらがまだ残っていた。

「「……………」」

驚いた表情の俺たちを見て、クラスのやつらはハッと息を吞んでいた。緊張しているような感じだ。

「何してんだよ？みんなして」

そう言いながら、中に入って直人の鞆を持つと、みんなが何故かホッとしたように、肩の力を抜いていた。

「直人、かえ——る前に職員室だ」

「は？」

声を出した直人に窓を指差すと、物凄いゲッソリした表情を返された。

「また俺まで叱られるのかよ。勘弁しろっての」

「堪忍してゝな、おかん！」

「誰がおかんやねん、アホ。お前のおかんになんてなりとーないわ、馬鹿」

そう言つて頭をバコツと叩くと、「いって！」と声を上げて俺を睨む。そして同時に教室の空気が引き締まった。

妙にみんな気構えしているようだ。

「ハア。ほんま、お前とおると、退屈せんわ。――色んな意味で」

屈託なく笑つた俺を見て、直人は複雑そうに口を尖らせていた。それがまた面白くて、俺は大爆笑しながら職員室に向つた。

4、手紙

あの事件の翌日。

俺たちは予告どおり、プロテイン——前に、直人が俺との勝負に負けて飲んで、ヤッバイ不評だったやつ——を持って、菖蒲の家に行った。

もちろん、菖蒲は物凄い顔をして飲んでいた。

そして何故か、俺も飲んだ。つーか飲まされた。

菖蒲曰く、“今私に会いに来たことになるよね？”らしく、無理矢理飲まされた。

もう2度とあのプロテインは飲まない。絶対につ！

そんなことを考えながら登校し、またあの香りに気づく。

「……このところ、多いな」

そう思いつつ、何気にこの香りがすることが嬉しい俺は、今日も妙に高いテンションで学校へと向った。

「つーわけで」

「おう」

「付き合うことになりました」

ニヤニヤとどこまでも嬉しそうな直人を見て、俺はため息をついた。

あの事件から1ヶ月ほど経った、文化祭の準備期間中の今、俺たちはクラスの出し物である喫茶店の準備をしていた。

「直人と菖蒲に先越されるんは、なんや悔しいなあ」

「だったら誰か好きな奴作れよ」

そう言いながら少し切なげな直人を見て、何となく感じた。

「お前、本当に付き合ってはないだろ？お試し期間中、か？」

動きを止めた直人は、俺を見た。それはそれは、とてもとても恨みがましい目で。

……直人がこの目をするってことは、凶星ってことか。

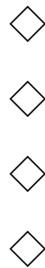
「……お前さ」

「ん？」

「何で普段は鈍いくせに、こーゆーときばかり鋭いんだよ？」

知るか。

そんなこんなで始まった、学園祭だ。



学園祭に菖蒲が来るのかと思ったのだが、今はとても揺れてしまっているらしい。だから俺を見て心が折れてしまわないよう、自分から行かないと直人に言っていたらしい。

学園祭が終わったら、夕方デートがあるのだと、直人は朝から上機嫌だ。

感じていた。少しずつ、少しずつ、菖蒲の心が直人に傾いているのを。

分かった。少しずつ、少しずつ、互いの想いが薄くなっていること。

思っていた。いつもいつも、毎日毎時間、同じことを、繰り返して自分に言い聞かせるように。

いい傾向なのだと。菖蒲が俺を忘れて、直人を好きになって、付き合うことが。それが何よりもいいことだと。だから、だからこん

な感情を持つてはいけない。

「直人？」

立ち入り禁止の階段に座っていた直人は、携帯画面を見て優しげに笑っていた。小さく開かれた口を隠すように、右手で口元を覆っている。

その表情がどこまでも嬉しそうだったからなのか、俺は踵を返して元来た道を歩く。そして、またあの香りがした。

「？」

振り返っても、そこには誰もいない。

「……………」

行くあてがなくなった俺は、何となくというノリでその香りを追った。そして着いた先は――

「図書室？」

呟いてから、ハツとなって周りを見る。文化祭でここらは使われないが、何となく気になった。

甘い香りはする。けれど、その香りの正体が未だに分からない。

「……………」

好奇心。

どうしてこの香りに興味が引かれるのかは分からなかった。

でも、何かに指し示されたかのように、俺は図書室に入って一冊の本を手にとった。

「s e n t i m e n t o ? 何だ、これ」

白い表紙のこの本は普通の文庫本ほどの大きさで、真ん中に黒字でそう書かれていた。パラパラと捲ると、あるページで何かが落ちてきた。

「ん？」

拾い上げてみると、それは紙だった。2つ折りにされたその紙には、“誰か読んで下さい”と書かれている。俺は挟まれていたページを見て、眉を顰めた。

『i n c o n s o l a t o (悲しみのページ)』

そう、ページ数の横に書かれていた。そしてそのページに書かれていた文は、酷く悲しかった。

『伝えたいと思う。けれど、伝えられない。伝えられなかった。伝えてはいけなかった。伝えることは出来ない。』

分かりたいと思う。けれど、理解できない。理解できなかった。理解してはいけなかった。理解してはいけない。

触れたいと思う。けれど、やっぱりそれだって――。

悲しみとは、切なさとは、何だろう。

それを感じて、人間は成長すると言う人がいる。けれど自分は思うんだ。

そんな思いをしなければ成長しないのならば、大人になれないというのならば。

子供のままで、いいよと

それじゃいけないのだということくらい、分かってる。頭では、ちゃんと理解できてる。でも、心だけは、簡単に動かない。動けない。

分かってるよ。分かってるんだよ。でも、それでも――と、その思いが消えない』

俺は試しに次のページを捲ってみた。また文が書かれているが、次のページには堂々とdoicenze（喜びのページ）と書かれていた。

「……………」

わざわざ悲しみのページに手紙を挟めたのは、この手紙が悲しい内容だからなのだろうか？それとも、偶然？

俺は手紙を開き、目を見開いた。

紙から、微かに漂った香り。それは、俺がずっと気になっていた香りだった。

「この手紙を、書いた人が……？」

誰なのか。この香りは何なのか。どうしてこんなにも気になるのか。

俺はドキドキと高鳴っている心臓を抑えながら、ゆっくりと綺麗に整っている字を目で追った。

『名前は明かせません。』

でも、名前がないと不便かもしれないので、n e v eと呼んで下さい。n e v eとは、イタリア語で雪を意味する言葉です。

私がこの手紙を書いた理由は、どうしても、誰かに知ってもらいたいことがあったからです。

私の周りの人たちは優しすぎるから、どうしても伝えられないか

ら。

だからできれば、誰でもいいから知ってもらいたいと思ったからです。

もしこの手紙を読んで、私と文通をしてくださるのなら、この本のどこかのページに返事を書いてはさんでください。文化祭2日目の夕方に取りに来ます。

n e v e

その字を見て、内容を読んで、何故だか無性に悲しくなった。

優しすぎたら、話せない内容。でも、誰かに話したいという思いがある。そしてできれば、知っていて欲しい。気にして欲しい。でも、誰かに心配をかけるのは嫌だ。

そんな思いが、伝わってきたような気がした。

そしてそんな思いを、俺も知っている。

「……………」

俺は手紙をポケットに入れると、本を元の位置に戻した。

伝えられない思いがある。伝えてはいけないのだと言って、自分を自制した。

分かり合いたい思いがある。分かり合ってはいけない関係だと、自分を自制した。

触れたいと思う人がいる。触れてしまったら戻れないからと、自分を自制した。

子供のままでいい。周りに“ままごと”だと言われたっていい。俺たちが本気なら、それでいいんだ。子供のままなら、どんなワガママでも多少は通るんだ。

でももう、餓鬼じゃないから。無知じゃないから。大人に近づいているから。

進まなければいけないから。

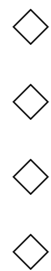
分かるから、分かっているから、だから

辛い

どの言葉も、共感できる。だからこそ、やっぱり辛く苦しい。

できることなら

知りたくなかった



もう日が沈み、文化祭も終わりに近づいていた。明日はもっと盛大に盛り上がるだろう。

キャンプファイアーやらフォークダンスやらがあって、終わる時間もかなり遅くなるからだ。

直人はもういない。

俺は1人で、沈んでいく太陽を見ていた。ガランとした教室には俺以外誰もいなくて、それが逆に心地よかった。

「……………」

俺は手紙を開き、文を見る。綺麗に整っている字は読みやすい大きさで、その人の性格を物語っていた。

誰なんだろう？この香りは、一体何なんだろう？

「neve、か」

ポケットに手紙をしまった俺は、ゆっくりと窓の外へと目を向け

た。見えるのは、山に沈んでいく夕焼けだけ。

「……菖蒲」

ポツリと、無意識のうちに呟いた言葉。

呼びたかった。

あのときに、この名を呼んで。呼び止めて、抱きしめて、キスを
して――。

でもそれは、許されないことだと分かっていた。だから、気持ち
を殺して彼女と離れた。

それがどんなに辛いことであつたとしても、俺たちは、そうする
ことしかできなかったから。

そうしなければいけないと、分かっていたから。

分かつて、いたんだ。ちゃんと。

「……っ」

視界がぼやけた。頬を、何やら生温いものが滑り落ちる。俺はそ
れを拭うことをせず、夕焼けに見入っていた。

分かっている、それに抗おうとする気持ちがある。自分じゃ、
自分だけじゃ、抑えられない思いがある。

溢れる思いは、易々と止められるものではない。

それを知ったのは、つい最近だ。

……忘れるんだ。俺にできるのは、それだけだ。菖蒲への思いを殺して、直人の背中を押す。俺がしてやれることは、それだけだ。

カタッ。

小さな物音だった。でも、誰もいない教室にその音は響く。俺はゆっくりと振り返り、そのまま固まった。

流れるかのような綺麗な茶色の髪。右耳についているピアスは、長さが不揃いの鎖が3本ついている。目はどちらかと言うと細めで、まつげが長い。そんな目から、流れ出ているものを見た。

俺はしばらくその顔を見た後、小さく笑った。

このとき、自然と笑みが浮かんでいた。

作った笑みじゃない。無理した笑みじゃない。ただ何となく、自然と、口元が緩んでいたんだ。

でも、俺が笑った後に先ほどよりも多くの涙を流した彼女を見て、俺はギョッとした。

「え、あ、ちょ……」

アタフタと慌てている俺を見て、彼女も慌てて首を振った。形の整った唇からは、しかし何の言葉も零れ落ちない。

俺はガシガシと頭をかくと、やがてふうとため息をついてから苦笑した。

「ごめん」

すると彼女は、さっきよりもっととたくさん首を振った。このままでは首が痛くなってしまうだろうかと、そう思ってしまうほど。

「……ごめ、さ」

小さな声だった。震えている声が、あのときの菖蒲を思い出させて

酷く、切なかった

1、返事

朝の図書室はシーンと静まり返っていた。それが寂しいようで、居心地よかった。

俺は本に手紙の返事を挟むと、小さく息を吐き出した。

ポケットにまだ入っている手紙に触れ、昨日の帰りを思い出す。

あの後、彼女が泣き止んでから、俺たちはしばらく話をした。

「俺、高瀬 蓮。君は？」

「中山、千沙、です」

聞くと隣のクラスらしくて、俺の評判は聞いているだとか。

……評判？

「今から帰るの？」

「え？あ、はい……」

固い口調の彼女を見て、俺は苦笑する。

「気楽に行こうよ。同い年なんだしさ」

無言で頷いた彼女は、カバンをとり教室に戻った。

そのうちに俺は帰る準備を済ませ、廊下に出た。そして、気づいた。

あの香りが、微かに残っていることに。

大きく目を見張ったときに、彼女は小走りでこちらに駆け寄ってきた。そして、またふんわりと匂ったんだ。

俺の気になっていた、大好きな香り。

この子が――。

そう思った途端、嬉しさがこみ上げてきて。俺は、無意識のうちに満面の笑みを浮かべていた。

「え、あ、あの……」

アタフタと慌てる彼女を見て、俺は「行こうか？」と声をかけた。

彼女はぎこちなく頷くと、俺の歩調に合わせて歩き出した。

この子、普段はどれだけゆっくりなんだろう？このペースだと速いのかな？そう言えば、どうしてあんな手紙を書いたんだろう？この子、いつもこんなに硬いのかな？

この香りは、何なんだろう？

でもそのどれも聞けず、ただ自分の大好きな香りに包まれながら彼女の家まで送り届けたことしか、記憶になかった。

「あれ、蓮じゃん。何してんだ？」

「おん？」

振り向くと、そこにはやっぱり直人がいた。片手には携帯が握り締められている。それを見て、俺は苦笑した。

「んだよ、また喧嘩か？」

「うゝ……」

「馬鹿だな」

そう言いながら図書室を出た俺を追いかけてきた直人は、「お前が言うか」と文句を言っていた。

「どうせ、昨日のデートで菖蒲に言われたんだろ？——馬鹿は好きになれないって」

「誰が馬鹿だ！」

条件反射で返してきた直人に笑いかけながら、俺は教室へと向かった。

——やっぱりこんな気持ちのままじゃ、直人と付き合えない

きっと菖蒲はそう言った。だから直人は落ち込んでいたんだ。無意識のうちに携帯を握り締めて、苦しげに顔を歪めていたんだ。

俺を見て、憎く思ったんだ。

「分かってる」

ポツリと呟いた言葉を、直人がどう感じたのかは分からない。でも俺は、もう1度繰り返した。

「分かってるから、さ」

直人の一言が、それ以外に言えない自分を、酷くちっぽけで無力な、情けない餓鬼だと痛感させる。

「……だろ」

「？」

「本当は、嬉しいんだろ？」

驚いて振り返ると、直人はその場に立ち尽くして俺を見ていた。その目は真剣で、同時にかなり怒っていた。

「今ならまだ間に合うだろ。今ならまだ、互いに想い合ってるんだから、付き合えばいいだろ」

「……………」

「何で、何でっ！何でお前は俺に任せられるんだよ?!」

……直人。

口を開いて、すぐに閉じた。頭をガシガシとかきながら困り果て、俺はゆっくりと言葉を選びながら言った。

「ああ。確かに嬉しいよ」

「っ！」

過剰に反応する直人を見て、俺は「ただ」と続けようとして、一瞬後ろを振り返った。あの香りが、した……気がした。

気のせいか。

そう思い直してもう1度直人を見ると、肩を微かに震わせている直人が目に入った。

「嬉しい、けど……それ以上に悲しい」

「? どういう意味だよ」

訝しむ直人を見て、俺は苦笑した。なんと言えがいいのか、よく分からないから。

「分からないけど、俺は多分、次菖蒲に会っても……もう、好きにはなれない」

そんな予感がする。いや、予感なんて曖昧なものじゃなく、揺らぐことのない確信がある。

理由は、分からないが……。

「自分の姉だから好きだけど、でも女としてはもう見れない。そんな気がするんだ」

「それで、何で悲しいんだよ」

まだ不機嫌そうな直人を見て、俺はニヤリと笑ってやった。

「菖蒲が孤独死しちゃうんだろうと思うと悲しくて」

そうおどけていって見せると、直人は「よく言うよ」と苦笑した。

悲しい理由は、1つだけ。

「あいつはモテるだろーが」

「なら、直人が孤独死するな」

「何でだよ」

「モテないからじゃないか？」

「はあ?!」

ようやくいつもの調子に戻ってきたことに安堵して、俺はハハハッと笑った。

——直人は俺の親友で　菖蒲は俺の双子の姉で

「お前知らないのかよ？俺はお前の次にモテる最きよ——」

「女子たちも地に落ちたな」

「何だよそれ！！！」

——どっちも自分と同じ、いやその何倍も何十倍も大事な奴らだから

「お前みたいな奴を支持するなんて、その女子は周りに男子がいなかったんだろうな」

「それ、言い過ぎじゃないか……？」

——本当に幸せになって欲しいって、いつまでも笑っていて欲しいって思うから

「言い過ぎ？……まだ抑えてるほうだぞ？」

「蓮！お前なあ！」

「ハハハッ！」

——だからお前たちの“別れ”は、自分のことより辛いんだ



俺は昨日、文化祭に参加していた。だが、その大半は図書室で過してしまっただけで、俺はこの学校で何が行われているのかサッパリ分からない。

……困った。

俺は今頃2人で仲直りをしているであろう奴らを思い出し、首を振った。

「流石に、邪魔しちや悪いしなあ」

だからといって、一緒にいる奴がいるかと言われると、いない。

そう唸り続けている俺を、クラスの奴が呼んだ。

「隣のクラスの奴が呼んでるぞ？」

その言葉ですぐに思い出すのは、中山だった。

あれから、どうしたんだろう。家でも泣いたのかな？ 今日学校に来てるのは分かったけど、元気にしてるかな？

考えながらふと顔を上げて廊下を見ると、彼女がいた。

「……え」

思考がまとまらない。

脳が働かない。

驚きすぎで、思考が停止した。ついでに動きも停止した。

「あ……」

俺に気づいた彼女が声を上げて、その声によりやく体が動く。

何でここにいるんだ？つか、わざわざ俺を呼んでくれた？え、何で、何で俺、こんなに嬉しいんだ？

早足で近づいた俺は、けれどそれ以上何も出来ずにただ「あー」と困ったように唸るだけだった。彼女も困ったようにオドオドと顔を上げたり下げたりという動作を繰り返していた。

すると突然、俯いたままの彼女が「あの！」と声を出した。

「えっと、あの、あのね？」

そう言って少ししてから、勢いよく両手を差し出した彼女を見て、俺はさらに混乱する。

「……？手が、どうかした？」

すると彼女は顔を上げて、呆然と自分の両手を見つめていた。そして「あれ？」と声を出し、それきり動かなくなった。

「……………」

もしかして。

俺は彼女の足元に落ちている紙袋を見て、苦笑した。

ああ、この子ドジなんだ。

「中山」

そっと呼びかけると、彼女は俺を見上げて首を微かに傾げた。小動物のような動きが妙に可愛らしくて、俺は思わず微笑んだ。

「?」

俺は笑いながら足元を指差し、次の彼女の言葉に爆笑した。

「誰の?」

「ブッ! アツハハハハハハッハハ!!! ま、マジ腹いてええええ
!!!!」

やっべーよこいつ! マジで天然だ! ドジでアホだ!!!! つかマジ
可愛い!

俺は失礼なくらい大声で、しかも腹を抱えて笑ってしまった。

そして後から聞いたのだが、あのときの俺たちは注目されていたらしく(当たり前だが)、後夜祭では格好のネタとなってしまうていた。

顔を真っ赤にして紙袋を拾い上げた彼女は、まだヒーヒーと笑っている俺をよそに中身を確認し、安心したようにホッと息をついていた。

そしてそのまま首を傾げ、何かを懸命に考えていた。

だが、やがてその紙袋を、涙を拭っている俺に差し出した。

「俺に？」

彼女は無言で頷くと、両手をギュッと強く握り締めた。

それからゆっくりと顔を上げて、俺を見上げた。上目遣いに見える彼女に、俺はドキッ!とする。

か、可愛い……。

「昨日の、お礼……なんだけど……」

さらに手に力を加えた彼女は、言いづらそうに切り出した。

「多分、って言うより絶対、硬い……よ。さっき落としたのに形崩れてないし」

俺はキョトンとその言葉を聞き、それから勢いよく紙袋を開いて中身を見た。確かにスコーンは壊れていない。

……粉々どころか、キッチリと形が残っている。

なるほど。だから考えてたのか。俺に渡すか、渡さないか。

「まあ。俺の腹も頑丈だから、大丈夫だろ」

とか言いながら笑うが、その笑みは引きつっていただろう。自覚がある。その証拠に彼女は「やっぱり」と言いながら、俺の手の中にある紙袋に手を伸ばした。

その先に続けられる言葉は、もう分かりきっていた。

俺は右手で彼女の手を遮ると、彼女が取り上げられないように左手で強く握り締める。

「返して、はなしな？これはもう俺のもんやさかい」

そう意地悪く笑って見せると、彼女は目に浮かべていた涙を堪えながら、俺に遮られていた手を胸に当てて、ニッコリと笑った。

「ありがとう」

でもその笑みは、無理して作ったような笑みだった。痛みを孕んだその笑顔を見て、ようやく分かったんだ。

好きだ

彼女の痛みを消してあげたい。彼女の苦しみを、辛さを、悲しみを消し去ってしまいたい。彼女の為に、何かをしてあげたい。

彼女を守りたい――。

いつしかその思いが、俺の中では芽生えていた。

「……中山」

そっと彼女を呼びかけると、彼女は「？」と首を微かに傾げた。
そしてゆっくりと、笑みを浮かべていった。

「どうしたの？ 高瀬君」

俺は下唇を噛むと、意を決して言った。

「これから、一緒に回らないか？……文化祭」

俺はじっと彼女を見ていたのだが、やがて彼女の顔に浮かんだ満面の笑みを見て、思わず目を逸らした。

好きだと自覚してしまったから、物凄く恥ずかしくて堪らない。

困った。菖蒲のときはもっとすんなりスマート且つ完璧に男らしかったはずなのに。

「えっと、じゃあ、行こうか？」

「あ、う、うん」

彼女もかなり緊張しているのか、先ほどから落ち着きがなかった。
隣を歩きながら、香ってくるあの甘い香りに頬を緩めながら、どう

やって彼女と打ち解けあうかを考え、考え、考え、考え――。

 $\vdots$

どうすればいいんだよー！ー！ー！ー！ー！ー！！！！

心の叫びが彼女に聞こえるはずも無ければ、その声を聞きつけて助けがくるわけでもなく。

俺たちは妙によそよそしい雰囲気のまま、文化祭を回る事になった。

2、文化祭

ううん……。何か、なんだかなあ。

俺は青空の下にある（当たり前だけど）ベンチに座り、目の前でカキ氷を買っている彼女を見ながらボンヤリとしていた。

流れるかのような綺麗な茶色の髪は腰までの長さ。右耳についているピアスは、長さが不揃いの鎖が3本ついている。目はどちらかというと言うと細めで、まつげが長い。背は160くらいだろう。

そんな彼女を見てみると、周りの男子の視線が意外なことに結構集まっていることに気づく。

……………。

何となく分かっていたが、目の当たりにして不機嫌にならない奴なんていないだろう。

「たっかーせくうくん！」

「え？」

顔を上げると、そこには瀬川が立っていた。

夏休み後少しまで隣の席だった女子で、ショートのを髪を揺らしながら俺を見ていた。ニコニコ、と言うよりは、ニヤニヤ、という表

現が正しいような笑みを浮かべて。

「ジャジャジャジャーンッ！」

「？」

差し出された紙切れを見つめ、俺は胡乱げな表情で、瀬川を見上げた。

「で？」

「……しらけるなあ、もう」

そう言っって不機嫌になった瀬川は、無理矢理その手紙を俺の手に押し付け、ニッコリと笑った。

「ラブレターV」

「お前から？」

「ナワケナイデシヨッ」

だよな。

目の前にいるこいつは、一応彼氏がいて、第一告白するなら直で言うような、ストレートな性格なのだ。ありえない。

「あなたもよくく知ってる人からだよ♪」

「はあ？」

よく知ってるって、直人？

……………。

お前、菖蒲はどうしたんだ！直人おおおおおおお！！！！

「……………一応言っておくけど、直人じゃないからね」

「だよなあ…………」

じゃあ誰だよ。

「でも、直人に近いね。今はあんたよりも、直人に近い。でも、彼女の心にはあんたしかいない。そう言えば分かる——みたいね」

険しい表情になった俺を見て、瀬川は面白そうに笑いながら、手を振って去っていった。

俺とは言えば、手紙を見つめたまま、どうすればいいのか分からず、ただ黙って、あいつのことを思い出す。

菖蒲。

「…………高瀬、君」

後ろから聞こえた声に振り返ると、カキ氷を持った中山が立っていて、俺は慌てて受け取った。ポケットに手紙を突っ込んで。

「悪いな、待たせちゃって」

すると彼女は首を振り、「大丈夫」と言いながら、ベンチに座った。その顔はどこか、寂しげに見えた。

「……………悪い」

隣に腰を下ろして、ストローをいじっている彼女の目を見ることなく、俺は少し反省しながら言った。声が硬かったんだろう。彼女は、慌てたように声を上げていた。

「そっ、そんだっ?! んん……そんなにやこほ、にゃい」

変な言葉を言うからいぶかしんで彼女を見ると、舌を口から出して顔を顰めていた。

もしかして。

「……舌、噛んだ?」

彼女は無言で頷くと、少し涙目になりながら顔を顰めている。そんな彼女を、俺は穏やかで温かな気持ちで見やる。

笑いを堪えるのはなかなか難しい。口元が緩んで、それを目敏く見つけた彼女が、先ほどよりも険しい表情となった。

「高瀬君で、意外に酷いんだね」

「ん?」

「見逃してくれればいいのに……」

「いやいや。あんな派手に舌嚙んでおきながら、それを言っちゃ駄目だろ」

苦笑しながらそう言うと、彼女は「むう」と唸った。そしてその顔が、菖蒲と重なった。

『何さ何さ、蓮のばあか！
これくらい見逃してよ！』

確か、初デートの日だ。

足を捻って近くの電信柱に寄りかかった、までは良かった。だが、ヒールがはまって抜けなくなっていることに気づかずに、歩き出そうとして前のめりに転んだのだ。

そして、顔面を強打して鼻血を出し、結局その日のデートは延長。

あの時、起き上がってすぐの言葉が、それだったのだ。そして、俺が返した言葉は、やっぱり彼女に言った言葉と同じだった。

……あいつの場合は本当に、“これくらい”、なんてもんじゃなかったしな。

思い出し笑いしてしまいそうになった俺は、彼女が座っている場所と逆のほうに顔を向け、小さく笑った。

「……ばあか」

ドキッ。

思わず彼女に目を向けて、俺は微笑んだ。

ああ、そっか。何で俺、こいつのこと好きになったのか、分かったわ。

「高瀬君なんか、大ッ嫌い」

口を尖らせて、カキ氷の氷を懸命に溶かしている彼女の頭を、俺は笑いながら軽く叩いた。

「悪かったって！」

「絶対に思っただけじゃん！」

「あ、ばれた？」

「もう……!!」

クスクスと笑ってやると、彼女は頬を膨らませてそっぽを向いた。そんな彼女が愛らしくて、俺は爆笑した。

「やっぱりお前面白いな！」

「絶対に褒めてないでしょ！」

「そりゃな？」

「もう!!!」

「ハハハッ！」

腹を抱えて笑ってやると、彼女は立ち上がって歩き出した。それ
を追いかけてながら、俺は笑い続けていた。

「悪かったってば」

「思っていないのに言われても、嬉しくないもん」

「いやいや、思ってるって!.....少し」

「少ない?!」

振り向いた彼女は、鬼のような形相をした化け物に変わっていた。
今にも角を出そうと、鼻息荒くして、助走をつけてやがる化け物に
見えて、俺は笑った。

いつだったかな。菖蒲もこんな風に見えたんだよな。今となつた
ら、懐かしいだけだ。

「ほらほら、カキ氷がこぼれるぞ？」

慌てて手を持ち上げた彼女は、1点を見つめたまま、黙り込んで
いた。その視線を向けると、俺のポケットらしい。

さっき菖蒲からの手紙を入れたポケットだ。

「……気になるか？」

ハッと顔を上げた彼女は、すぐに目を逸らして首を振った。俯き加減だったため、髪がさらりと落ちる。

「ごめん」

「いや」

俺はカキ氷にさしているストローから手を離し、ポケットに突っ込んで手紙を取り出した。そして彼女を見る。

「読んでもいいか？一応、気になってさ」

すると彼女はゆっくりと頷き、階段まで移動してくれた。1階の踊り場付近に座り込むと、窓から中庭の様子がよく見えた。何かのイベントの準備をしている。

本当なら、彼女のすぐそばで読んではいけないだろう。そんな無神経なことをしちゃいけないって事くらい知ってる。ならどうしてそんなことをするのか。

決まってる。

「……………」

寂しそうな悲しそうな表情で俯いている彼女は、切なげに目を伏せていた。そんな表情を見て、確信したかった。

彼女が、俺に好意を寄せてくれていると言う事を。

自意識過剰だ。

でも、それでもこんな態度をとられたら、思わずにはいられない。
そして、俺の気持ちは浮上していくのだ。

——手紙を見る前までは。

『蓮へ。 3時に中庭に来てください。 菖蒲より』

いつもなら“アヤメ”と書くのに、今日に限って漢字で書いている。それを見て確信した。何を言うつもりなのかを。

「……今、何時か分かる？」

「え？ えっと……1時、だけど」

どうして？ という表情を向けた彼女に文面を見せる。それを見た彼女は、開けていた口を閉じて俯いた。

「確か3時って、中庭でイベントがあるんだったよな」

「うん」

「どんなだっけ？」

そう意地悪く笑いながら問うと、彼女は泣きそうな顔で俺を睨む。

「……告白タイム」

「まんまのネーミングだよなあ」

クックックと笑って見せると、彼女は怒ったように立ち上がって、階段を登っていく。それを追うことなく、俺は1言だけ、

「行かないよ」

と言った。

足音が止まり、彼女が立ち止まっていることを、知らせてくれる。

「俺は中庭に行かない。菖蒲に会いに行かない」

「……どうして？」

震える声が耳に届き、泣いているのだろうと思った。いや、もしかしたら泣くのを堪えているのかもしれない。

「どうして、行かないの？」

何故。

そんなの、決まってるだろ。

行っちゃいけないからだ。

「何で、答えてあげないの？」

お前が、好きだから。

「どうして……彼女を選ばないの？」

お前を、選びたいから。

階段前にある窓える中庭では、せっせと準備が行われている。

「行けば、あいつは俺に、告白するんだろうな。でも、もし俺が行かなければ、あいつは諦める。」

そういう奴だ」

いつもそうだ。あいつは大切な何かをする時、いつも勇気が出なかった。だから賭けに出ていた。もしこうなったら実行して、ならなかったら諦めよう、と。

それを知っているから、行けない。俺たちは、もう別々に歩き出さなきゃいけないから。

「……そういう奴だって、分かっているのに、行かないの？」

「ああ」

「どうして、告白されないようにしてるの？ 答えてあげればいいじゃない。その答えがいい答えでも、悪い答えでも、それでも言うてあげればいいじゃない！ そうしなきゃ、菖蒲さんは……っ！」

振り返ると、溢れ出た涙を拭っている彼女が目飛び込んできた。そして、泣きながら俺を睨む。

「高瀬君の馬鹿！」

走り去る彼女の背を見送りながら、俺は深いため息をついた。

3、追いたくて

時計の針は、3時を差していた。それを見ながら、俺はため息を吐く。教室の机に腰をかけ、今頃グラウンドで準備をしている直人を思い浮かべた。

後2時間もすれば、他の奴らも一旦、教室に戻ってくることになる。そして、LHRをしてから、グラウンドでまた騒ぐ。

だからそれまでは、ここで1人きりになれるのだ。

あいつは、知ってるのかな。

「……………」

外に目を向けた俺は、沈んでいく夕日を見たまま小さく笑う。あの日を、彼女と初めて話した日を、思い出す。

結局、俺は行かなかった。

あの後しばらくしてから学校中を走り回ったのだが、彼女を見つけることは出来なかった。

探していないのは、屋上と図書室。きっと今、彼女は図書室にいるだろう。だが、今はいけない。

ポケットに入っている別の手紙を取り出して、俺は自嘲気味の笑

みを浮かべた。

『文化祭2日目の夕方に取りに来ます』

だから彼女は今、図書室にいるだろう。忘れていないのであれば。

外を見たまま、俺は手紙をポケットに仕舞って、ため息をつく。

何度思い返しても、悪いのは俺だ。だが、それでも嬉しかったんだ。

菖蒲の為に、泣いてくれた。俺の為に、怒ってくれた。

他人の為に。それが出来る彼女を、本当に尊敬して、そして嬉しく思った。感謝した。

そんなことが出来る人は、本当に少ないものだ。損得関係なく、無意識のうちにしてしまえる人というのは。

『私の周りの人たちは優しすぎるから、どうしても伝えられないから』

その言葉に俺も共感した。

同じような思いをしてきたから分かるものもあるだろう。でも、彼女と俺の境遇がまったく同じと言うことは決してない。

そう考えると、あの言葉でよかったのか、不安になる。

手紙の内容を思い出して、またため息をついた。

「……どうすつか」

きっと彼女は、あの手紙をもう持っている。書き直そうと思ってペンを持っても、また同じような内容になる。だから仕方がなく、そのまま出した。

出した、んだが。

「……………はあ」

ため息はなくならない。

手紙の内容を思い出して、またため息をついた。

『n e v eさんへ』

俺も似たような思いをしたことがあります。そして今も、俺は苦しんでいます。だ

から君に苦しんでほしくはない。俺が話を聞くことで、君の重みが消えるなら、俺が君の文通相手になります。

俺の名前は高瀬 蓮。

もし、俺と文通して、心が少しでも軽くなったなら、いつか、君から会いに来てください。

それから、俺の悩みも、聞いてほしい。

会いにきてくれたときに、俺は、俺の悩みを、君に打ち明けます。

だからどうか、会いに来てください。 蓮』

……………。

ものすっごいクサイ台詞のような気がする。

言っちゃいけないような気がする。

つか、恥ずかしすぎて、もう中山の顔、見れないかもしれない。

「——あああああ！」

悶えている俺は頭を抱え、ため息をつきながら、窓の外に目を向けた。そして、無意識のうちに、呟いていた。

「……………菖蒲」

俺は、お前の気持ちにはもう、答えてやれない。俺は、お前から離れると決め、お前も、俺から離れることを決めた。

それは一方的なわけでもなく、押し付けられたことでもない。俺たち2人が考えて決めたことだ。

それを、今更“やめよう”なんて、言うような奴じゃない。1度決めたことは、決してたがえることなく、貫き通す。

それが、俺の知ってる――菖蒲だ。

「でも、なあ……」

手紙が、俺宛だったことも、また事実。

またため息をついた俺は、時計の長針が6を指していることに気づき、自嘲する。あれから30分もの間、俺はここで、1人悩み続けていたらしい。

立ち上がって、教室を出ようとドアを見たところで、俺の足は止まった。目の前にいたのは、俺が今、1番会いたくないと思っていた奴だった。

「直人……」

「……………」

直人は無言のまま俺を見て、俺が座っていた机の、後ろの机に座った。それを見た俺は、直人が座った机の近くの、窓側の壁に寄りかかった。

「……悪いな」

ポツリと呟かれた言葉に、一瞬驚く。

「んで、お前が謝るんだよ？」

「……約束しただろ？ “菖蒲から、お前を忘れさせてやる”、って。俺だから、菖蒲を任せたい。俺だから、任せられる”。

そう、言ってくれたのに……、さ。結局、無理だったから」

そう言った直人の目は、悲しみと切なさ、悔しさと苦しさが混じっていた。

どれだけ直人が、菖蒲のことを好きだったのか。それは、痛いほど、よく分かっているつもりだ。だから、任せなかった。

重荷だったんだな。

好きだからこそ、任せた。でもそれは、直人にとったら、とても重いことだったのかもしれない。だから、こいつは今、こんなにも苦しい表情で、ここにいるんだ。

「俺との思い出で、お前との思い出を消していつてくれ、って……言われたはずなのにな」

もういい。

俺は目を伏せ、直人から目を逸らした。だが、すぐに頬に痛みが走り、気づけばその場に座りこんでいた。

直人が、俺を殴ったのだ。

「……俺は、お前が憎い」

「なお——」

「黙って聞いてくれ」

俺は開いていた口を閉じ、黙って直人を見つめた。苦しい表情は、けれど静かな目をしている。

まるで、俺に全てを託そうという目に見えて、嫌な汗をかく。

「俺はお前が菖蒲が好きになる前から、菖蒲が好きだった」

「！」

「だから、俺は菖蒲の相談役になった。お前のことが好きだ、って、教えられたときからずっと、あいつのそばで、お前らの恋を取り持ってた。」

菖蒲が、好きだったから」

直人の目が、どんどん静かになっていく。それを見ながら、俺はまた目を伏せて、直人に殴られる。

「逃げるなよ。目を逸らして、逃げるな」

同じところに、躊躇も戸惑いもなく殴りやがった直人を、真っ直ぐに見て、俺は立ち上がった。血の味がするのは、絶対に気のせいじゃないだろう。

「でもあいつは、どう頑張っても、足搔いても、お前を忘れられなかった。」

これは本当に、姉弟愛なのか？違うんじゃないのかよ？

あいつはお前を、1人の男として、見てるんじゃないのかよ？だから今も、あんなに苦しんでる」

「……………」

「あいつはお前を、好きなんじゃない。もう、愛してるんだよ。だから引き返せない。俺に乗り換えることも、思い出を消す事もお前への思いを、無くすことも。」

……俺は、あいつの1番近くで、あいつがどれだけ頑張ったのかを、知ってる。だから、言える」

直人は目を逸らすことなく、俺を見ている。俺も、もう逃げられないと腹を括って、直人を見つめた。

分かっていたんだ、本当は。

菖蒲は俺を、忘れられないだろう、って事くらい。菖蒲が学校に来た時から、分かっていた。

でも、気づきたくなかったんだ。だから、気づかないフリをして、俺は中山に逃げた。そうしなければ、前に進めないと思ったから。

菖蒲と、真っ直ぐ対峙するのが、恐かったから。

「――無理だ」

「！」

目を見開いて、直人を見た。あいつは俺を見たまま、黙っていた。

「……無理なんだよ。あいつが、自分から忘れるなんて事。できるわけがないんだ」

「……………」

「お前が、直接伝えなきゃ。そうしなきゃ、あいつは忘れられない。諦めきれないんだ。だから俺は、お前に聞きたい」

気づけば廊下に、菖蒲がいた。制服姿で、真っ直ぐに俺を見て、泣いていた。その隣には瀬川がいて、不安げな表情で、俺たちを見ていた。

「……………」

「お前は、菖蒲と中山。どっちを取るんだ？」

中山の痛みを孕んだが笑みが浮かんできて、俺は思う。

——護ってやりたい。

そして、泣く菖蒲を見て、思うんだ。

——笑っていてほしい。

答えなんて、決まってる。

「……菖蒲」

呼ぶと彼女は1歩に下がり、けれど俺が近づいていくと、自分からも近づいてきた。

自分よりも、背が低い菖蒲を見下ろして、俺は頭を下げる。

「ごめん」

誠心誠意を尽くして。ただ頭を下げたまま、それ以上何も言わない。

「……好きな人が、できたの？」

震える声に、俺はゆっくりと起き上がって、静かに頷いた。

「私じゃ……駄目なの？」

涙で揺れる瞳や、震える声、肩。そのどれもが愛しいと思えるのに、そばにいてほしいと願っているはずなのに、それなのに。

なにかが違う。

彼女に笑っていてほしいと、本当にそう思うのに。

「どう、して……。私じゃ、駄目なの？」

中山じゃないと、駄目な理由。菖蒲では、いけない理由。

それは常に、俺の心の最奥にあった。

「俺は、お前に笑っていてほしい。泣いてほしくない。できるなら俺が笑わせて、その笑顔を護りたい。笑顔でいさせてやりたい。そう思う。」

——でも、違うんだ」

「何、が？」

必死に震えるのを堪えている菖蒲を見て、俺は逸らしそうになった目を、必死に菖蒲に向けた。真っ直ぐに、彼女だけを見る。

「あいつは、俺が護りたい、って思うんだ。俺がそばにいて、護ってやりたい、支えてやりたい、力になりたい。笑わせてやりたいし、涙を拭ってやりたい。そのどれも、俺じゃなきゃ嫌なんだ！

でも、お前は違う。お前には、笑っていてほしいと思う。

でも、その対象が、俺じゃなくても構わない、って思ってるんだ。俺じゃなきゃ嫌だとは、……思えないんだ」

その違いだ。それだけだ。でも、それはとても大きな違いだ。

それが彼女と中山の、最も大きな違い。そして、彼女じゃなければいけない理由。

「だから、ごめん」

「……嫌だ、よ」

俯いた彼女は、カタカタと震える手で、俺の手を掴む。涙が俺の手に落ちてきて、でも、それを拭おうとは思わなかった。

「嫌だ。私は、私は蓮じゃなきゃイヤだもん！！！！」

叫ぶように言った菖蒲を見て、俺は首を振った。そしてチラッと廊下を見て、そこに中山がいるのを見て、思わず叫んでしまった。

「中山！」

すると彼女はビクッと震え、そのまま走り去ってしまう。

「中山！待て！」

「行っちゃヤダ！」

そう言っつて、俺の手を掴む手に、より一層力を込めた菖蒲は、子供のように首を振っていた。

「ヤダ！嫌だよ！私は蓮じゃなきゃ嫌なの！」

「菖蒲」

「イヤだもん！！！！私は、私は蓮が！」

「菖蒲！」

叫んだ声に、菖蒲はビクツと肩を震わせる。視線を合わせるように、しゃがみこんだ俺は、目を手で覆って言い聞かせた。

「俺たちは双子だ。それを忘れるな。」

……俺は、お前を好きにはなれない。お前を、女として見ることは、もうできない。これから、どれだけ時間が経っても、俺から見たらお前は、いつまでも姉だ。

だから、お前ももう忘れろ」

「れ——」

「忘れてくれ。頼むから……ッ！」

俺は、好きな奴の元に行きたいんだ。あいつの後を、中山の後を

追いたい。あいつを、1人にしたくない。そばにいてやりたい！

「追わせてくれ」

のろのろと、手が開く。

俺は立ち上がると、菖蒲の頭を叩いて「ありがとう」と礼を言い、そのまま教室を走り出た。

その後のことは全て、直人に任せて。

4、告白

「中山！」

廊下を走る中山を追いながら、俺は必死に考えていた。

教室を飛び出してすぐ、廊下にうずくまっている中山を見つけた。そして、近づいてすぐに走り出した彼女の表情は、真っ青だった。

もしかして、病気とか……？

嫌な予感がして、けれどそれを打ち消す。

今日の前にいるやつは、全力疾走してやがるわけで？ バスケ部なのに、追いつけないわけで？

……………。

「オイコラ中山ッ！」

何でそんなに速いんだ……！！

とか何とか、色々考えつつ喋りつつ、着いた先は、意外なことに保健室前だった。

……何故ここに？

そんなことを思いながら、俺は隅にうずくまっている彼女を見つけた。そして、静かに近寄る。

「――中山」

「ッ！！！」

怯えたように肩を震わせ、ゆっくりと顔を上げた。その目には、涙が溜まっている。あまりにも痛々しいその姿を見て、思い切り抱きしめてやりたくなる。

だが、まだその権利は俺にない。

代わりにグッと手を握り締め、俺は彼女の目線に合わせるように、片膝を立ててしゃがむ。

「何で、逃げたんだ？」

「……………」

彼女は答えることなく、目を逸らしていた。

俺はどうしようか迷ってすぐ、彼女が持っている紙切れを見た。

「それ」

すると、彼女はハッと手を引っ込め、両手でそれを膝と腹の間に隠した。俺は、それ以上そこに触れることなく、息をついて彼女の頭を撫でる。

ビクッ!

思い切り震えた彼女を、なだめるかのように、優しく、ゆっくりと。

すると、彼女の涙は徐々に消えてゆき、深呼吸をして、呼吸を整えていた。

「……もう、大丈夫か？」

コクンと頷いた彼女は、上目遣いにこちらを見て、すぐに目を逸らした。

「いつから、聞いてたんだ？」

「……菖蒲さんに、謝ってるところから」

つーことは、最初からってことか。

俺はため息をつき、またも怯えるように体を震わせた彼女の頭を、ポンポンと叩いた。

「んじゃ、何でお前は逃げたんだ？」

呆れているのが丸分かりの声に、彼女はバツの悪そうな顔で呟いた。

「怖かった、から……」

……は？

俺は最初キョトンとした後、そう言えば直人に殴られていたことを思い出す。

傷が怖かったから、か？

俺は自分の頬に触れ、顔を歪めた。血もまだ微かに流れている上に、赤く腫れているのかもしれない。

……こんな顔の男に追いかけられれば、というか目が合ってしまったら逃げても当然、か？

彼女を見てため息をつく、俺はその場にドツカリと座り込んだ。そして上を見上げ、「うゝん」と唸る。

どうすればいいのか、分からない。

追いかけた。そして追いついた。今彼女のそばにいる。じゃあ、次は？

「……高瀬君、ホッペ」

そう言って近づいてきた彼女の目は、とても不安そうな、心配そうな色合いだった。

「だい、じょーぶ？」

震える声音に、俺は小さく笑って見せ、すぐに顔を歪める。意外に痛い。

直人め、後で覚えてヤガレッ！

そう思っていると、スッと、何やら冷たいけれど柔らかかなものが、頬に触れた。少し痛いのが、我慢できないほどでもない。見ると、彼女の細く長い、綺麗な指だった。

「保健室、行こう？」

その言葉を聞いてようやく分かった。

「それでここだったのか」

「え？」

不思議そうな顔をする彼女を見て、俺はニッと笑った。――と思う。

痛いから、あまり口角が上がらなかった気もするが。

「何で保健室前だったのかなって思っさ。傷の手当てしてくれるつもりだったのか」

「……………」

彼女はポカンとした表情で俺の後ろを見つめ、それから俺の頬を見て瞬きした。

……………うん？

「気づかなかった……」

……は？

見れば、彼女も驚いた表情で保健室を見ていて、俺は思わず噴出してしまった。

「アッハハハハハッ！つつう~~~~~~~~！！！！」

そして、痛みに顔を歪める。

「た、高瀬君？！」

驚いて声を上げる彼女を手で制し、俺は痛みに悶えつつ耐える。

「へーき、だって」

「でも！」

「大丈夫だよ」

そう言って頭を撫でると、彼女是不承不承頷き、俺の手を引っ張る。

「とにかく、早く手当てしないとっ！」

小動物のような彼女を見て、俺は苦笑した。今にも泣き出しそうな彼女は、うさぎのように思えた。

真っ白い毛のように純粋な心、あまりに泣きすぎて赤くなってしまった目と頬。潤んだ目に、寂しそうに垂らされている眉。不安そ

うな、その表情。

本当、うさぎみたいに可愛い奴。

フツと笑って見せると、冷えピタと絆創膏を持ってきた彼女は、「へ?」とマヌケな声を漏らした。

「いや、うさぎみたいだよなあって思ってたさ」

「……うさぎ?」

「そつ。何か、もう、色々」

そう言って笑うと、彼女は首を傾げ、濡れたハンカチで頬の血をふき取ってから、絆創膏と冷えピタを恐る恐る貼る。

「痛くない?」

わけがない。が、俺はニツと笑って頷いた。

「ごめんな」

「え?」

「ハンカチ」

そう言っていると彼女はブンブンと首を振って小さく笑った。

「大丈夫、役に立って嬉しいし」

「そっか。 ありがとな、さっきより痛くなくなってる。中山のお陰だ」

すると彼女は頬を赤らめ俯き、小さく首を振った。

「……ごめんなさい」

「何が？」

「話、聞いちゃったから」

そういった彼女の手は握り締められており、微かに震えていた。俺は先ほどの彼女を思い出し、小さく息を吐く。

「悪いって思うなら、俺の質問に答えてくれるか？」

「……うん」

消え入りそうな声に苦笑しつつ、俺はやはり、可愛い彼女を見つめた。

抱きしめてやりたい。

そんな衝動に駆られるが、ギリギリのところで必死に理性を保つ。

「怖かったって、何がだ？」

ピクッと肩が動き、けれど顔を上げようとはしない。ただ黙って、下唇を噛んでいる。言い辛そうな表情を見ていると、俺の意地悪な心が顔を出す。

しばらく黙ってその様子を見てみると、手をノロノロと開いた彼女が、ポツリと呟いた。

「また、いなくなっちゃうんじゃないかって、思ってた」

「……は？」

意外な言葉に、俺はそんなマヌケな声しか出せなかった。

いなくなる？ 何でそんなこと思ったんだ？

「ここにいるのか？」

「……うん」

意味が分からない。

俺は色々と考えた挙句、分からないまま「そっか」と呟いた。彼女はまたも頷き、黙り込んでいた。

時計を見ると既に5時を指している。あれからかなり時間が経っているらしい。

そーいや、LHRの時間だよな。ヤツベ、叱られるかも。

「戻るか、教室に」

そう言って立ち上がり、彼女を振り返ることなく、保健室のドアに手を掛けようとする。と、後ろになにやら違和感を覚え、振り返

った。そこには、彼女の頭があった。

「中山？」

そう呼びかけると、彼女は俺のブレザーを握り締めたまま、頭をくっつけてきた。まるで、それ以上行くな、と言っているかのよう
に、少しずつ後ろに引っ張られている。

「……中山」

ピクッと動いた彼女は、離そうとした手に更に力を加え、震える
声で呟いた。

「……で」

「ん？」

「行かないで……」

「……へ？」

行かないで？——いやいや、行かないと。教室にはもう、生徒が
集まっているだろう。

「中山、どうしたんだよ？」

振り向いて彼女の肩を掴むと、彼女は涙を流しているのか、嗚咽
が聞こえる。

「中山？」

顔を覗きこむと、彼女は俺を見るなり抱きついてくる。

「おわっ?!」

ガッツンッ!!!

「~~~~~っ!!!」

あまりの驚きに後ろに足を引いてしまい、見事に頭を扉にぶつけてしまう。いつもなら顔を上げて、必死に謝るはずの彼女は、けれど、俺に引っ付いて離れようとしなかった。

可笑しい。

俺はそう思って彼女を離そうとするが、彼女は首を振って嫌がる。

「中山、本当にどうしたんだ？ 具合でも悪いのか？ なあ」

そう言いながら彼女の様子を伺うが、反応はない。ただ嗚咽が聞こえ、俺を掴む手の力は緩まない。

……困った。

理性は強いほうだろう。鉄のように。が、この状況で、彼女と2人きり。そして、ここにはベッドというものもある。――何が言いたいかって？

我慢しづれえんだよ~~~~~!!!!!!

そう叫びながら我慢する俺は、本当に健気な気がする。うん、本当に。

「ごめん、なさい」

そう言いながらも、手を離さない彼女を見て、俺はため息をつきながら背を撫でる。

「いいよ、別に。惚れちまった女にこんなことされて、嫌がる男はいないだろ」

言ってから気づく。

……俺、今なんて言った？

顔を上げている彼女と目が合い、熱が上がってくるのを感じながら、俺は彼女の頭を自分に押し付けた。心臓がやばいくらい高鳴り、頬が熱くて熱くて仕方がない。

「たか、せく……。今、なんて」

……………。

……………。

……………。

あああああああああ！！！！！

「……………っ！だから！」

どうにでもなれだ、畜生ッ！

「中山が好きだって言ったんだよっ！！！」

ああ、本当に……。俺、なさけねえ……。頬、喋れば喋るほど
いてえーし……。

「……………」

無言の時間がかかり長く感じられ、俺は恐る恐る、彼女の頭から
手を離し、覗いてみる。すると彼女は、泣いていた。

「?!」

驚いて、アタフタとする俺を見て、彼女は華のような笑顔を浮か
べた。それを見た俺は、頭が真っ白になっていた。

もう何も考えられず、何もできない。ただ黙って、彼女を見つめ
ることしかできなかった。

「……………私、も」

ワタシモ？

「……………私も、高瀬君が好きだよ」

気づけば、俺の目からは一筋の涙が流れていた。

「ほ、んと……に」

「うん。本当に、高瀬君が好きです」

そう言って真っ赤になりながら、けれど俯くことなく微笑み続けてくれる彼女を見て、俺は思い切り抱きしめた。

痛いくらいの力で抱きしめて、それでも何も言わずに抱きしめ返してくれる彼女の腕が、先ほどの言葉が現実なのだと教えてくれた。

「……………っ！」

ああ、本当に。こんなにも幸せになれていいのだろうか。

そう思ってしまうほどの幸せに、俺は止められない涙を流し続けた。



「でも、いつから？」

保健室から教室に戻り、小言を喰らった後、後夜祭の最中に俺たちは抜け出した。後夜祭では俺たちの話でもちきりらしく、丁度いいから俺たちが付き合い出したことを報告した。

女子の間では悲鳴が、男子たちの間ではヤジが飛んだ。

「ええっと……」

困ったような、照れた表情で笑っている彼女の隣で、俺は答えを待ち続ける。

屋上には、俺たち以外にも、カップルが何組かいた。グラウンドが見える隅に座り、フォークダンスをしている奴らを眺める。

「高瀬君、泣いてたでしょ？ 菖蒲さんの名前を呼んで」

「……ああ、初めて会ったときか」

そう言うとき小さく頷きながら、「その時」と呟いた。

「……は？」

「だ、だから！ 高瀬君が泣いちゃってたとき！」

……………。

泣き顔見たから惚れたって、どーよ？

そんなことを考えて落ち込んでいると、今度は彼女が、恐る恐る問いかけてくる。

「た、高瀬君は、その……えっと、いつ、から？」

「俺？」

素っ頓狂な声を上げた俺は、そう言えぱいっだろうと思いを馳せる。

好きだと気づいた、自覚したのは、スコーンを貰ったときだ。あのときの無理な笑顔を見て、護りたいと思って、特別なんだって思っ

ても、もしかするともっと前から、この気持ちを抱えていたのかもしれない。

例えば、登校中の香り。

あの香りに気づいた日は、妙に気持ちが高ぶっていた。多分気づかないうちにその香りに、その香りを漂わせている人に、好意を寄せていたのかもしれない。

人とも限らないのになあ……。しかも冷静に考えてみると、もの凄く変態っぽいしなあ……。

「……………」

あ、ヤバイ。俺今、自分で自分を傷つけて凹んでる……。

「た、高瀬君？」

ドヨンとした空気を背負った俺を見て、彼女は心配そうに声を掛ける。こんなにも優しい彼女に、俺はちょっと、疲れた笑みを返すことしか出来なかった。

「そうだなあ……。——自覚したのは今日」

「じ、自覚？」

頷いて、そう言えば今日は、色々ありすぎたよなあと思い起こす。

「……中山の作ったスコーン、まだ食ってねえーなあー……」

本当に、色々とありすぎて。

「あ、あれは……。食べないほうがいいと思うけど……」

そうもごもごと言う彼女が可愛らしくて、俺は小さく笑いながら言ってる。

「何言ってるんだよ。俺の為にわざわざ作ってくれたのに、食わないわけにはいかないだろ？」

「そ、そんな無理しなくていいって！また作ってくるから！」

「いや。俺は好きな奴が作ったヤツは1つ残らず絶対に食べきつてやる。どんなに不味くてもどんなに苦しくてもどんなに食いたくなくとも！」

「……それ、すごく酷い言葉だね」

大慌てで手を振っていた先ほどとは打って変わって、殺意と呆れが2割ずつ、落ち込みが6割を占めるなんとも微妙な表情をしている彼女を見て、俺はやっぱり笑う。

「でも、中山が作ったんだから、絶対上手いに決ってるよ」

——多少硬いだろうが。

そう言ってやれば、彼女は頬を赤らめて小さく俯き、

「ありが、とう……」

と呟いてくれる。そんな些細なことが、こんなにも嬉しくて。

「ん」

そう返して、彼女の頭を撫でる。ビクツと身構えたのは、一瞬。髪を梳いていけば、気持ちいいのか、目を細め、俺に体を預けてくる。

——ああ、彼女なんだ。

たったこれっぽっちのことで、こんなにも嬉しくなってしまう俺は、とても単純なんだろう。でも、たったこれっぽっちのことだからこそ、何よりも愛おしい。

「なあ、中山」

「……ん？」

うつとりとしたような声が返ってきて、幸せ気分浸っているのが自分だけじゃないって思えて、くすぐったい気持ちになる。

「俺のこと、好きになってくれて、ありがとうな」

「……………うん」

そう呟いて、目を閉じた彼女は、ゆっくりと確かめるかのような口ぶりで、

「高瀬君も。私のこと、見つけてくれて、好きになってくれて、受け入れてくれて。本当に、ありがとう」

ああ、何でお前はそうやって。

苦笑して、彼女の頬に触れて。微かに震えた彼女は、反対の俺の手を、きゅっと握り締める。それを合図に、俺は彼女の唇へと、自分のそれを寄せた。

俺の気持ちを上回るほどの気持ちを、そんなにも上手に、言葉に乗せることが出来るんだよ。俺はあれで十分恥ずかしくて、十分過ぎるくらい伝えられるって、思ったのに。

彼女には敵わない。

こうして俺たちはめでたく結ばれ、全てが解決した。

——なんてことはなくて。

俺はこれから、彼女の過去を知ることになる。

1、新しい自分

ある火曜の放課後。

久々に部活がないから彼女と一緒に帰っていた俺は、ふんわりと香ってきた大好きな香りをかいで、ふと思ひ出す。

「あ、そうだ」

ずっと聞こうと思って忘れてた。

「どうしたの？高瀬君」

俺は、自分の隣を歩く彼女を見て、小さく苦笑した。

「なあ、俺一応彼氏なんだしさ。苗字じゃなくて、名前で、呼んでくれないか？」

「え……」

ピタッと動きを止めた彼女は、俺を見たまま、どんどん頬を赤く染めていく。それが可愛らしくて、つい意地悪をしてしまう。

「なあ？千沙」

耳元に唇を寄せてそう囁けば、ビクッと肩が跳ね上がり、耳まで赤くなる。そっと離れると、彼女は俺が唇を寄せた方の耳を手で覆

い隠し、目尻に涙を溜めて見上げてきた。

「れ、れ……ん、くん」

……………。

……………。

「だ、駄目……？」

「うん、駄目」

アツサリと頷けば、彼女は真っ赤な顔を更に赤く染め、俯いてボソボソと呟いた。

「れ、……………れん」

「何？千沙」

ふっと耳に息を吹きかけると、「ひゃっ!？」と声を上げて距離をとる。思わず、くすくすと笑みを零せば、彼女は「むう」と頬を膨らませた。

「あっはは!」

「……高瀬君って、案外酷いよね。悪戯っ子って言うか、いじめっ子って言うか……」

「蓮」

「え？」

「高瀬じゃなく蓮」

「……………蓮」

そっぽを向いて、口を尖らせながらボソツと呟いた彼女の手を取って、俺はまた歩き出す。とてとてと後を追ってくる彼女の影を見ながら、嬉しくて頬を緩ませる。

「それで、どうしたの？ た——れ、ん」

頑張って名前を呼んでくれるのが嬉しくて、俺は「ん？」と鼻歌交じりに尋ね返した。

やっぱり、彼女は可愛い。

「最初に話し出したのはたか——蓮じゃない」

「……ああ、そうだった」

あまりにも、可愛い反応をされてしまったので忘れていた俺は、苦笑しながら彼女を見る。俺より低い位置にある頭が、微かに傾げられた。

「自分じゃ気づかないかもしれないけどさ。お前から、何か甘い香りがするんだよ」

「甘い、香り？」

あごに手を添えて、考える彼女を見ると、お袋を思い出す。彼女もまた、同じ癖があるらしい。

「菓子が一番近いんだけど……。クッキーじゃ、なかったんだよねあ」

彼女は何か思い当たるところがあるのか、苦笑しながら「ええ」と言葉を探している。

「……今週の日曜に、家、来る？」

「……………は？」

「いや、誘いは嬉しいけど……。何でいきなり？」

香りの話をしていたはずだ。それなのに、彼女はいきなり家の話をする。ってことは……。

「もしかして、千沙の家に行けば理由が分かる、とか？」

「うん……、多分」

どんな家なのかを考え、思いつかないため俺はその提案を受け入れることにした。



金曜の昼休みに図書室に行けば、何人かちらほら人がいたが、無視。

そのままある本を手に取り、パラパラとめくる。そして何か挟まっ
っているのが見え、それを引き抜いた。

よく見ると、ページは前と同じ場所。

「……………」

俺はため息を吐くと、その手紙を開く。

『蓮さんへ。』

優しい言葉を、ありがとうございます。

あなたのような優しい方に見つけてもらえて、私はとても幸せ者
だと思います。グチのような話になってしまいかもしれませんが、
無理をなさらない程度でいいので読んでください。

もし私なんかでいいのでしたら、会いに行かせていただきます。
これから、よろしく願います。

n e v e
『

そう書かれている手紙を、ポケットに突っ込んだ俺は、時計を見
て教室へと戻る。そして、ポケットの中でその手紙をいじりながら、

彼女を思い出す。

いつも優しく穏やかに笑っている彼女は、度々寂しそうな顔をす
る。俺を見てハッとした表情になったり、驚いたり。まるで、俺と
別の誰かを重ね合わせているかのようで、少し胸が苦しい。

もうすぐ11月も終わる。この1年で、俺の環境は一変した。

直人は菖蒲を溺愛しているため、今もずっとそばで支え続けてい
る。

支えられている菖蒲は、流石に1ヶ月ではまだ忘れられないらし
く、泣きながら日々を過ごしているらしい。

それを思い出して罪悪感に捕らわれたが、すぐに振り払う。俺は
もう過去の人間とならなければいけないのだ、と言い聞かせて。

仲のいい“姉弟”に、ならなければいけない。だから、今は何も
考えずにいなければいけない。

菖蒲のために、直人のために。俺は俺で、幸せにならなければい
けない。

じゃなきゃ、菖蒲はいつまで経っても俺の面影を追い続けるだろ
う。それではいけないのだ。前に進むと2人で決めたのだから。

「あ、蓮！」

声をかけられて振り返れば、彼女が友達らしき奴と一緒に俺のと
ころに駆け寄ってくる。

「よう、千沙。……こいつは？」

「あ、始めまして！千沙の親友の三上 春奈でっす！」

スチャッ！という表現が正しいだろう。敬礼……否、ピースを額に当てた彼女を見て、俺は完全にしらけていた。

「……………で？」

「しらけるなあ、もう」

デジャビュ？——ああ、瀬川だ。こいつ瀬川のヤローに似てやがるんだ。んで、つい最近（と言っても一ヶ月ほど前だが）言われたんだ。この台詞。

「ねえ千沙。本当にコイツでいいわけ？」

「え？うん。何で？」

いたって普通に、当たり前だと言わんばかりの口調で返された三上は、ガクツと肩を落とした。

「あ、そ」

「……………？うん」

ニツコリと笑ってそう言われると、俺が照れるんスけど……。

そんなことを思っていると、三上は顔を上げて「じゃなくて」と

声を上げる。本当に、この騒がし——賑やかなところとか、無駄に元気なところが瀬川に似てる。

……ああ、嫌なこと思い出しちゃった。

そう言えば瀬川に見られていたのだ。菖蒲をフルところを。

「チッ。後で話とかなきゃな……」

小声でボソツと呟くと、不安そうな表情で首を傾げてる彼女が視界に入り、俺は笑う。

「何でもないから、気にするなって」

そう言っって頭を撫でてやれば、彼女は嬉しそうに笑って頷く。それが嬉しくて俺も笑みを深くした。

「ウオッホン！」

ものすごくわざとらしくて、ものすごく苛立たしくて、ものすごく空気の読めた咳払いが聞こえ、俺はどうするべきか迷う。

面白いと笑えばいいのやら、スルーして彼女を甘やかすか。

どっちを選ぶ？ そりゃもちろん。

ナデナデナデナデ。

……………。

.....。

ナデナデナデナ――

「ちよおおおおおおおと!!!!少しは構ってくれてもいいじゃない!」

「知るかボケ」

「あああああ!!!コイツ今暴言吐いた!吐きやがった!」

「え?あ、うん。蓮は意外に口悪いよ」

のほほんと、本当にのんびりとした口調で返す彼女を見て、三上は「えええええ!!!」と声を張り上げる。

……なんだかんだで、バランスが取れてるんだな、こいつら。

と言うより、千沙さん。この1ヶ月で、俺の本性見抜いてたんスね。鈍いと思ってたのに。

「ああああああああ……。あたしの、あたしの千沙があああああああああ!!!」

「ウザイ黙れボケ」

「口悪ッ!これのどこが爽やかboyじゃ!あたしの千沙を返せ!」

そう言って、彼女の腕を引っ張るから、俺の負けず嫌いな心に火が点く。

「い・や・だ・ね」

ぐいっと肩を抱き寄せて、腕の中に閉じ込めれば、「ちょ、ちょっと!」と抗議の声が上がる。それでもお構いなしに、俺は三上に言う。

「こいつはもう俺のものなんでね。ダチだろーがなんだろーが、俺からこいつを奪うなら受けて立つ」

「なんですってえー?! 望むところよ!?!」

そうやって噛み付いてくる三上を見ると、すごく楽しかった。なんか、前にこういう馬鹿なことを、あのアホとやってた気がして、そう言えばあれからまともに話してないことに気づく。

菖蒲と、上手くいってるといいんだけどな。

「お前に心配されるほど、俺は女慣れしてないわけじゃ、ねえーってのっ」

パコツと何かで頭を叩かれ、俺は肩越しに振り返る。そこにいたのは、茶髪の信号ピアスをつけた男。

「だあーから! 信号じゃねえって言ってんだろ!?!」

「相変わらずだな、お前。つか、だったら俺の心を読むな」

「るせー!」

思わず笑った俺を見て、三上が「直人じゃん!」と声を上げる。

「おん? お前ら、知り合いなのか?」

「あ? ん……まあ、な」

……………?

言葉を濁した直人を見て眉を顰めると、「気にすんな」と言っ
て話を逸らす。それくらいで、騙されたり、流されたりする俺ではな
い。

——ないのだが。

「んー! んんんんー! ! !」

「おん? ああ、千沙。どうした?」

いつの間にか、思い切り抱きしめていたらしく、ドンドンと胸を
叩かれた。解放してやれば、かなり苦しかったらしく、ゼーハア
ーと荒い呼吸を繰り返していた。

「れ、蓮、の、馬鹿ッ!」

「ああ、悪い悪い（笑）」

悪気がなかった分、罪悪感が生まれるものの、そんな彼女も可愛
らしくて思わず笑ってしまう。

そうすれば、いつも通り「絶対思って無いじゃん!」と拗ねる。

だから、ついつい「あ、バレた？」と返す。そうすればいつも通り、彼女は言うのだ。

「もう!!!」

と。

そんな些細なことが嬉しくて、俺はもつと笑ってしまふ。前に「高瀬君は笑い上戸だ」と、涙目で睨まれたことがあったが、そんな彼女もやっぱり、可愛いのだ。

「それで？」

直人がそう尋ね、俺は「おん？」と聞き返す。直人は呆れた顔で俺を見ていたが、やがて諦めたかのような表情で言った。

「なんか用事があってここにたむろってたんじゃないのかよ？」

「「あ」」

俺たち3人は顔を合わせ、4人同時に噴出した。そしてチャイムが鳴る。

「またね、蓮」

「ああ。じゃあな」

そう言って手を振って去ろうとすると、三上が俺の手を掴んで

「今日の放課後、教室にいて」

と耳元で囁いた。真剣なその表情は、どこか怒っているようにも見える。だから俺は、チラッと彼女を見てから、頷いた。

彼女は彼女で、直人に声をかけられていて、同じように俺を見てから頷いていた。

「……さて。直人」

「あ？」

「お前、いつ三上と会ってたんだ？」

歩きながらそう尋ねれば、直人は案の定、バツの悪そうな表情で頭をかいていた。

「話せば長くなるから、次の休み時間でいいか？」

「お前がそれでいいなら、俺は全然かまわねえーよ」

残念なことに席が離れた俺たちは、授業中に話すことはできず、かといってサボるわけにもいかないので、真面目に授業を受けることになった。

その間、俺は今までの自分と今の自分が変わっていることに気づいた。

『少しは構ってくれてもいいじゃない!』

『知るかボケ』

『蓮は意外に口悪いよ』

俺は演じてきた。演じさせられてきた。俺のイメージに。

だから俺は、俺の変化に、驚く。

女子に、あんなことを言われたことは、ただの1度もない。近寄ってくる女子に優しく接し、できるだけ、平等に構うようにしていたから。

そうしなければ、女子の間で喧嘩が起きてしまうことを、中学の頃に学んだから。

会ったばかりの、しかも女子に、あんな暴言を吐いたこともなかった。できるだけ言葉を選んで、できるだけ丁寧に。“爽やか”を演じて。

直人は別だったとしても、他の女子にも、男子にも、それを心がけてきた。

他人に、あんなことを言われたのは、人生初（直人は別）。菖蒲にだって、そんなところを見せたことはない。ずっとイメージを壊

すことなく、演じていたのだ。

それなのに、さっきの俺はまるで真逆だ。

天使のよう？ いやいや、悪魔。

爽やか？ いやいや、冷風。

カッコいい？ いやいや、怖い。

だから分かった。彼女がどれだけ俺に変化を与え、変わっていったのかを。

「少し前までは、全然だったのになあ……」

確か、入学したての頃は、女子からの差し入れのクッキーをもらって、

『なら、1つでいいからくれ』

『駄目だよ』

『これは、あの子達が
俺につけてくれたやつなんだから、
俺が食わなきゃ駄目だろ』

なんて言っていた気がする。

『もてる男は一味違うねえ』

『凡人の俺たちと言うことが違う』

『完璧なやつほど嫌な奴はいない』

なんか、遠い昔のような気がする。でも、つい数ヶ月前のことなんだ。そう思うと、なんだかおかしかった。

そして思うのだ。

こんな自分も悪くはない——と

2、他者の思い

「そうだったのか……。盲点だったな、それは」

「そーかよ」

呆れたような表情の直人を見て、欠伸をしてからうなる。

直人の前の席の奴から椅子を借り、直人の机に二人揃って、頬杖をつく。

鏡のような合わせ絵に、女子は嬉しそうに頬を赤らめている、……らしい。

「つとに……。ねみい」

そう言いながら目をこすり、周りを見る。

女子はいつも通り相変わらずだが、俺の態度が冷たくなったことに、気づいていないはずはないだろう。それでも、黄色い声援とやらが聞こえる。

……正直、ウザく感じるよな……。今は。

彼女ができたのだから、そろそろ別の奴を見ればいいものを。

「……それができるなら、菖蒲だって泣かねえよ」

キョトンとした視線だけを直人に寄越し、小さく笑った。

自嘲を表す笑みで。

「……そうだな」

真っ直ぐに、俺を見ずに女子たちを見ていたあいつの目は、敵意が少なからず含まれていた。それが、俺には嬉しい。

菖蒲を本気で愛してくれている。——その証拠だと、分かるから。

「なあ、直人」

「あ？」

間拔けな声を出して、俺の席の前に座っていた直人は、頬杖をしながら俺を見る。

「人生ってのは、残酷だって思うか……？」

「はあ？」

素っ頓狂な声を上げた直人は、顔ごと俺の方を振り返る。頬杖をついていた手から顔が離れ、怪訝そうな表情で、俺を真っ直ぐに見ていた。

——それを見ることなく、俺は黙って同じ言葉を繰り返した。

「人生ってのは、残酷だって思うか？」

「……………」

無言のまま俺を見ていた直人は、その後、「さあな」と言っ
て、机から教科書を取り出した。

「少なくとも俺は、残酷だとは思わねえよ」

「……………」

意外な言葉に顔を上げれば、俺を見ずに、また女子たちがいる
ほうに視線を向けた。

「残酷だって言うなら、俺は、……菖蒲に出会えなかったはずだ」

「……お前」

『そんなこと、ない、よ……?』

別れの間際に聞いた、菖蒲の声。泣きそうなのを必死に我慢して、
俺に伝えてくれた言葉。

『だって、運命が残酷だって、言うんなら』

『私は、蓮に……出会えなかったもん』

……そうだったよな。そうだ。

「……？何笑ってんだよ」

クックツと笑っている俺を見て、直人は心底不思議そうな、怪訝そうな表情で俺に声をかける。

だが、そんなことを気にすることなく、俺は笑う。

「お前、ぜってえ菖蒲と上手くやってけるわ」

「はあ？」

キンコンカンコンコン。

予鈴が鳴り、俺は笑ったまま席を立つ。

「ま、頑張れよ」

「るせーよ」

自分の席へと向かおうと一歩出したとき、

「――でも」

「？」

直人の声が聞こえ、肩越しに振り返る。

俺を見ずに、前を見たままのあいつの表情は、複雑な表情だった。

「……ありがとよ。お前にそう言われると、自信つく」

「……………ああ」

複雑な表情。

嬉しいけれど、悔しい。照れくさいのに、苛立つ。

負の感情と隣り合わせの感情でできたあの表情は、今まで見たことがないくらい情けなくて、それと同じくらい、いい顔だと思った。

俺は、できていただろうか？

菖蒲を思い、菖蒲のことを考え、菖蒲のために、そんなにも余裕が無く情けの無いくらい、あいつが好きだと言う表情を――。

「……………」

きっと、できてなかったんだろうな。

自嘲しながら席に座った俺は、空を見ようと視線を寄せた。

晴れ渡ったその空に写ったのは、一つ浮かぶ小さい雲。

「――」

あの雲は、今、どんな気持ちなんだろうな……。



今日は自主練が主だから、サボってもバレはしない。というより、サボってる奴のほうが多かったりする。

……まあ、普段ならちゃんと、練習してるけど。

今日は、三上に教室にいるよう言われていたため、仕方なく着替えてから教室に待機していた。そして、しばらくしてから姿を現した奴を見て、俺は小さくため息を吐いた。

「とりあえず、その殺気をしまってくれないか……？」

「い・や・だ」

昼間の俺の真似か？

苦笑しつつ、壁に背をよりかからせながら、俺は「で？」と話を振った。

「話って、なんだよ？」

「……………千沙のこと」

ああ、やっぱり。

そう思いながら目を伏せ、次の言葉を待った。

「千沙の過去を、知ってる……？」

「……………いや」

まったく、これっぽっちも知らない。

分かっていることといえば、彼女がこんな騒がしい奴と親友だつてことくらいだ。

「じゃあさ。私たちの学校で、1人だけ、卒業式前に死んじゃった人がいるって、知ってる？」

「……………ああ。入学当時、ちょっとした話題になってたな。それ」

「その人の名前、知ってる？」

「いや？　つか、何でそんな奴の話になるんだ？」

確か俺は、三上の話を聞くためにここに居た。が、最初に“彼女のこと”と言っていたはずだ。

もしかして、関係ある、とか……

「……………真山　榛馬って言って、私の元彼氏で、千沙の——初恋

の相手だよ」

「！ 初恋……」

「死んじゃった上に、私の彼氏だったから、千沙の恋は叶わなかったけど」

「それで……お前は、俺にその話を聞かせるために、わざわざ呼び出したのか？」

あまり、気分のいい話ではない。自分の彼女の初恋の奴が、死んでしまっているということは。

彼女はまだ、好きなのだろうか。俺のように、完全には思いを消すことも、無くすこともできずに、持て余しているのだろうか。

だとしたら、俺はあいつに何を言えがいい？何をしてやればいい？

「うん。でも1番伝えたかったのは、本題は、ここから」

「本題？」

なんだか、嫌な予感がする。

こういうときに限って、その予感と言うのは当たるのだ。

「マウ……榛馬は、高瀬君にすごくよく似てるの」

——ドクン。

違う意味で、嫌な予感がした。さっき感じていた予感は、千沙のことについて、聞きたくないことを、教えられるような気がしたから。

でも、今感じた予感は、それとはまるっきり別だった。

——ドクン。

もしかして……。

「似てる……？仕草とか、口調とか？」

微かに動揺しながらそう言えば、三上は「口調は正反対！」と、それはもう、見事に言い切りやがった。

「マウはもっと、丁寧な言葉遣いだったもん！あんな嫌味は言わないしっ！」

そう言って、どこか懐かしそうに目を細めて、——悲しげに笑った。その瞳から微かに除く、“愛しさ”。

そして、“切なさ”。

——ドクン。

……ああ、そうか……。

既にもう、確信にも近い思いを、俺は抱えた。

「ぱっと見ると、顔も似てる。仕草は分からないけど、表情とか、

雰囲気とか。そこらへんは、すごくよく似てる。……だから、気になってたんだよ」

“だから、気になってたんだよ”。

主語のないそのフレーズで、ハッキリと確信する。

——そうなのか。

気づいてしまったことに後悔しながら、でも、気づかないフリを努める。

「まあ、千沙も、そうだったんだろうな」

そう言うってから、もう1つ、あることに気づく。

“すごくよく似てる”。それも、パツと見だと、見間違えてしま
うほどに。

——ドクン。

……もしかしてあいつも、“マヤマ”って奴に似てるから、俺を
好きになったのか？俺自身じゃなく、俺を通して、“マヤマ”を見
ているのか？

「……………」

違うと、そんなことないと、否定したいのに、——できない。

寂しそうな顔をしたり、俺を見てハツとした表情になって驚いた

り。まるで、俺と別の誰かを重ね合わせているかのようだ、付き合いだしてから度々思っていた。

だから、否定の言葉が出てこなかった。“もしかしたら”、という可能性のほうが、上回っているように思えるから。

「結局、私が言いたいのは……。千沙が、高瀬君と付き合うのは反対だ、ってこと」

真っ直ぐ俺を見て放った言葉は、俺の心を抉った。

まあ、そうだろうな……。お前の心は、そう、叫ぶんだろうな。

「千沙はきつと、高瀬君のことが好きだと思う。

でも、千沙にとっては、過去は……マウとの思い出は、思い出したくないことだと、思うから。千沙の心をかき乱して、狂わせて、苦しませるだけだと思う」

俺は、こいつに何を言えがいい？彼女の過去も、もちろん、こいつの過去も何も知らない。そんな俺が、何を言える？

「……………」

何も言えない。ただ、1つだけ、ハッキリとしていることがある。

「俺と付き合うことで、あいつは苦しむかもしれない。悲しむかもしれない。悩んで、迷って、泣くかもしれない。

けど俺は、あいつの口から事情を聞いて、あいつの意思を聞いてからでなきゃ、答えられない」

三上は驚いた表情をし、

「高瀬君は、それでいいの？本当に、千沙でいいんだね？

何があっても、どんなことがあっても、千沙を見捨てない？千沙の心がどれだけ沈んでいても、どれだけ傷ついていても、どれだけ……どれだけ荒んでいても……絶対、絶対手放さない？」

そう念を押すように、何度も尋ねてくる。

涙で濡れた瞳に、悔しそうな切なそうな表情を浮かべて。その悔しさや切なさには、少なからず、“彼女以外への想い”も、含まれていると分かって。

「――俺は、千沙が好きだ」

ハッキリと、そう言い切った。

「だから、手放したりはしない。見捨てたりもしない」

手放せるわけがない。見捨てられるはずがない。

こんなにも好きなのに、離してやれるはずがない。そこまで俺は、大人じゃなければ心が広いわけでもない。

そして、彼女以外を見ようとは思わない。彼女以外に、手を差し伸べようとは思えない。

――俺は、お袋たちとは違う。

彼女がどんな姿を隠していようと、過去の姿がどんなものであつ

ても、きつと俺の気持ちは、1つも変わらない。

千沙が好きだと言うこの気持ちだけは、変わるはずがないんだよ……やっぱさ。

「だから、お前も泣くなよ。俺が健太に、殺されちまうだろ？」

「うん……うん……っ！」

嬉しそうに、どこか切なそうに、悲しそうに……。

何度も頷く彼女を見て、胸が痛む。親友の為に泣き、同時に自分の抱える“オモイ”で泣く彼女を見ていると、直人の顔が浮かんできた。

唯一、あいつにだけ託すことができた。それだけ信頼してるし、頼りにしてる。あいつじゃなければ、あいつがいなければ、俺は絶対に、菖蒲から手を離すことができなかった。

彼女に会って、彼女に恋をしたとしても。その想いを隠して生きていこうとしたはずだ。それくらい、俺にとって菖蒲という存在は大きい。

女として見ることはできない。けれど、既に大きく膨れ上がってしまったその想いを、沈める術も、消す術も知らない。どう対処して、処理すればいいのか。

どれだけ大きくても、膨れ上がっていても、これは“姉弟愛”だ。そう分かっても、押さえが利かない。

それをギリギリで保っていられるのは、直人と言う存在があるからだ。

「ごめんね、時間割いてもらって」

「いや、別に。千沙のことだったら、いくらでも時間を作るさ」

「……そっか」

小さく笑んだ三上は、最後に思い出したかのように「あ」と声を上げた。

「千沙ね、きっと高瀬君に話せない過去の話が、1つあると思うの。その過去の話は、私も知らない。

そしてもちろん！これとマウは全く関係ないの」

「は？」

「……千沙は、3つ、人に隠しておきたい過去があるの。1つがマウ。2つが家族。3つは」

「3つは？」

「言ったでしょ？ “私も知らない過去” だって。聞かれても分からないの！ じゃあね」

笑って、今度こそ出て行ったあいつの後姿を見ながら、俺はため息を吐く以外に何もできなかった。

1つ目が、“マヤマ”。2つ目が、“家族”。3つ目は、誰も知

らない。

手紙にしてまでも“知ってほしかったこと”って言うのは、過去の話なのだろうか？それとも、もっと別のことなのか。

「……………」

なあ、千沙。何だか今、無性にお前に会いたいよ。

隣のクラスに行けば、お前はいるのかもしれない。直人に呼び出されていたらしいから。でも、会いたいくせに会いたくないんだ。

お前は、俺を好きになってくれたのか？それとも、“マヤマ”が好きなのか？

お前は、俺に3つ目の過去を覚えてくれるか？それとも、俺じゃ役不足か？

「はあ……………」

なあ、隼人。

お前なら、どうする？

3、試練

とうとうやってきた、日曜日。彼女の家を訪問する予定の日だ。

「……でも、本当によかったのか……？」

俺は、荷物も何も持っていない手を見て、ため息を吐いた。

昨日の夜、“お菓子を持って行くから、何が食べたい？”と聞いたら、“お菓子は絶対に持って来ないで”と言われたのだ。だから、何を持っていけば良いのか聞いたのだが。

『大丈夫だよ、家に色々あるから！』

と言われ、結局手ぶら。

「……………」

俺、本当に大丈夫か？失礼じゃないだろうか……。いや、絶対に失礼だ！

そう思いながら待ち合わせの駅に行けば、既に彼女がいた。白いコートを着ていて、上品で清楚感が溢れているように見える。

「千沙」

「あ、蓮！」

声をかけて気づいたのか、千沙は嬉しそうに笑顔向け、俺を見て頬を少し赤らめてくれた。

それだけで嬉しかった。

「あ、あの、ね……」

「うん？」

「……………か、かっこ、いい……」

「サンキュ♪」

チュツ。

「ひゃ?!」

「アツハハ!」

額に軽くキスしただけなのに、千沙は過剰反応で悲鳴を上げる。それがまた可愛らしくて、思わず笑ってしまった。

「もう、蓮!」

怒って俺の後を追う千沙を見て、きゅっと手を繋ぐ。少し冷たい手先に、眉が自然とひそめられた。

「悪い、待たせてた……?」

「ううん。私がちょっと早く、来過ぎちゃっただけだから」

笑いながら、手を引っ張って誘導してくれる彼女は、目的地へと行く途中何度も、「先に謝っておくね」とそわそわしながら言っていた。

……謝るって、何に？

そう思いながら歩き、辿り付いたのは――

「喫茶店？」

「……………うん」

そう言えば、前にも喫茶店の話が出たよなあ。確か、お袋とだっけ？……………ああ、俺、来年から智治の兄貴と住むんだっけ。

半年くらい前に、お袋から聞かされていた話だ。住むところがなくなるから、俺たちの家に転がり込むって話。

んで、その末っ子は俺と同年で、事情持ち。

「……………」

……………ん？

「なあ、千沙。俺、千沙の家に来たんだよな？」

「……………うん」

「ここ、家？」

「……………」

無言のまま、喫茶店の右隣にある建物を指差す千沙。表札には“中山”の字が刻まれていた。だが、俺たちがいるのは、お隣さんの喫茶店の入り口前。

「？」

「蓮、言ってたでしょ？香りの正体が知りたいって……」

「ん？ああ、言ったな……」

確かにそう言った。だが、これじゃまだ分からない。

もしかして、とは思ったが、確証があるわけではない。だから、違うと思うのだが。

「覚悟、しておいてね……」

「は？」

真剣な表情のまま扉を開けた彼女は、最初はホッと安堵の息をつき、中に入った。それにつられるようにして入り、彼女が身体を硬くしていることに気づく。少し青ざめたような、怒ったような表情。

「？」

と、疑問に思ったのは一瞬だった。

「くらえええええええええええ!!」

なるほど、嫌というくらいよく分かった。

「ハッ！」

ベシッ！ズツテーーーーーン☆…………ガンツ！

[illegible]

⋮

「^?」

目を開けた彼女は、俺の後ろに倒れ、見事に入り口の扉に顔面をぶつけている男を見て、

「浩兄？」！

と、驚いた声を上げていた。

「え、あれ、れ、蓮？ 何したの……？」

「何って……」

猛ダッシュで黒い塊が来たから、彼女とは反対のほうに体をひねって、そのまま足崩しをした、というだけ。特別に殴ったり蹴ったりはしていない。

それを伝えると、彼女はポカーンとした後、

「すごい！」

と、拍手喝采してくれた。

いや、嬉しくないわけじゃない。ただ、

「お前、助けようとしなかっただろう」

「うゝ……」

言葉に詰まった彼女は、「だって」と口を尖らせた。

「浩兄の蹴りは痛いから……」

「……やめての一言くらい、言ってくれても良いだろ？」

呆れ口調で言えば、彼女は「ごめんなさい」と謝り、それが可愛らしくて思わず頭を撫でた。と、その手を振り払われた。

「きーさーまああああ！……！」

「ちょっと浩兄！」

俺と彼女の間に立ちはだかった男 多分彼女の兄が、俺を睨んだまま口を開く。

「……お前が、千沙の彼氏か？」

「お兄ちゃん！いいから早く――」

「そうですよ」

キッパリと言ってやれば、彼女は頬を赤らめながら兄の手を引いている。

「……まあ……顔は悪くない……。だがしか――」

ガツン☆

……。

……。

「えーっと……」

とりあえず状況説明をすると、俺の顔をまじまじと見た男が、「だがしかーし！」と言おうとして、上半身を起こそうとしたところ、後ろから来ていた男が持っていたフライパンに頭を直撃。

そして、涙目になりながら後ろの男を睨んでいた。

「兄さん、不躰だろ？あんまり失礼なことをしていると、千沙が本気で怒っちゃうけど、いいの？」

「うゝっ……！」

ちらっと隣に視線を向けた男――もとい、兄を見て、彼女は口を尖らせた。

「……お兄ちゃんなんか知らない」

プイッ。

「なっ……………!」

ガガガガーーーーーッ!

……………。

……………。

「…………まるで漫画だな」

そんな俺の突込みを無視して、フライパンを持っていた男（多分彼女の兄）が、近づいてきた。そして、俺の隣で、彼女と彼女の兄の言い争いを、面白そうに見ていた。

「騒がしくて悪いね」

「あ、いえ……。千沙のお兄さん、ですよね？」

ちらっと視線を向けると、穏やかで和やかな雰囲気を持った男が、こちらを向いた。

色の薄い髪は、どちらかと言うと長い。女みたいに綺麗に整った顔つきで、それでも男だと分かる。

軟弱そうにも見えるが、腕まくりをしているところから見える肌

を見れば、それなりに鍛えられているのだと知らされる。

……ん？この顔、どっかで見たことあるような……。

「ああ、名前、まだ言っていなかったね。中山 弘晃、23歳。千沙の兄で、中山家の次男だよ」

「高瀬 蓮です。一応、双子の姉がいます」

「へえ！……確か、千沙と同じ年だね？」

「はい」

少し緊張気味に頷けば、ヒロアキさんは柔らかく笑った。

「緊張しなくてもいいさ。僕より、兄さんとの会話に気をつけたほうがいいかな」

「兄さん……って、あの人、ですよね？」

既に言い合いは終わっており、彼女は兄を連れて、厨房の方へと行ってしまっていた。俺はヒロアキさんに促され、近くにイスに座った。

「中山 浩輔、25歳。中山家の長男で、この店のオーナーみたいなもんかな。そろそろ、結婚するんじゃないかなあ……」

そう言って笑った彼の目は、嬉しそうなのに、少し虚ろにも見えた。

……？

「僕と同じ年の彼女がいるんだよ、兄さん。僕はまだいないけどね」

「……まだいない、って……本当ですか？」

気づけば、そう尋ねていた。

ヒロアキさんも驚いたように俺を見て、キョトンとした表情をした後、苦笑した。

あ……。

その表情が彼女と重なって見えて、今すごく納得した。兄妹なんだって。

「彼女はいないよ」

「じゃあ、好きな人が……？」

「うん、まあいる。ただ、今は少し、迷ってる」

そう言ったヒロアキさんは、厨房にいる彼女を呼び出し、ジュースを持ってくるように頼む。

「蓮は何がいい？」

ホクホクした表情で尋ねる彼女を見ると、本当に今すぐ抱きしめてしまいたくなる。

それをぐつと我慢して、紅茶を頼んでみる。今は冬で寒いから、冷たいジュースはごめんだ。

「紅茶……ミルクティーとストレート、どっちがいい？」

「んー……千沙のおすすめは？」

「え？私？……私は、ミルクティーかな……」

少し恥ずかしそうにはにかんだ彼女を見て、俺は笑う。

「じゃあ、それで」

「うん。弘兄は？」

「僕はコーヒー。……今度は、間違わずに入れてくれると嬉しいけどな」

「も、もう間違いません！」

顔を赤くして厨房に戻っていく彼女を見て、俺は首を傾げた。

「どんな間違いしたんですか？」

「はは、すごい間違え。」

カフェラテを頼んだのに、コーヒーが来てね。しかも、コーヒー豆が多くて……。いつもは一杯なのに、何故か三杯も。それなのに砂糖もミルクも入ってなくてさ……。

死ぬかと思ったね、あれは」

そう言って苦笑を漏らすヒロアキさんを見て、少し意外に思う。

「苦いの駄目なんすか？」

「うん。僕は甘いほうが好きだな。蓮君はどう？」

「あー……俺はどっちかって言うと、苦いほう……っすね」

「へえ。何か、甘いものってイメージあるけど」

「そうすか？　そう言われるのは、初めてですけど。

でも……まあ、差し入れて大分、甘い物も食べれるようにはなり
ましたけど……」

そのおかげで、大分訓練された気がする。まあ、訓練のおかげで、
千沙が作ったスコーンも食べれたから、よしとする。

……そう言えば、千沙が気にするほど硬くはなかったな……。た
だ、甘かったけど。

「やっぱりモテるんだね。そんな感じだ」

「あーっと……まあ、多分。でも、千沙もモテるんすよ」

「千沙が？」

意外そうに驚くヒロアキさんを見て、俺は苦笑を漏らした。

文化祭のときは、危うく焼きもち焼いて彼女を困らせるところだ
った。……と言っても、その後色々あって、結果的に困らせたけど。

「それより、今日はなんでここに？千沙の部屋に上がればよかったのに」

笑いながら言うヒロアキさんを見て、俺は苦々しく笑った。

「俺の理性を試さないでくれますか」

「ハハッ！まあ、蓮君なら、僕は大歓迎だね」

「ヒロアキさん！」

思わず声を少し荒げて呼ぶと、ちょうど飲み物を持ってきた千沙が、驚いて固まっていた。

「あ……と……えっと……」

どうしようか迷っている様子の千沙を見て、ヒロアキさんが苦笑を漏らした。

「大丈夫、ただちょっと、彼をからかっただけだから」

するとホッと安堵の息をつき、俺の前にミルクティーを、ヒロアキさんの前にコーヒーを置いた。

「もう……、浩兄みたいなことしないでよ、弘兄」

「ひどいなあ。兄さんはからかったりしないって。どちらかと言えば、兄さんは脅すんじゃないかな」

面白そうに笑うヒロアキさんを見て、千沙は頬を膨らませる。

そんな子供っぽい反応も新鮮で、すぐく抱きしめたくて仕方がない。必死に手を握り締めて我慢するものの、辛い。

「蓮に変なこと吹き込まないでね！絶対だからね！」

「はいはい」

クスクスと笑うヒロアキさんを見て、彼女はむうっと膨れている。そして、俺を見て笑った。

ドキン。

「今アップルパイ作ってるんだけど、もう少し待ってね」

「ああ、サンキュ。楽しみにしてる」

「うん！」

パタパタと戻っていくその背を見て、ため息。

可愛すぎるだろ……さっきの笑顔とか。笑顔とか。笑顔とか！

もう一度ため息をつきながら、前髪をかき上げて上半身を沈ませていく。ゴンっとテーブルに額がぶつかり、中途半端な姿勢となった。

「……我慢できるなんて、偉いね」

からかうような口調で言われ、俺は顔を少し横に向けた。腕の隙間から見えるヒロアキさんは、目だけは笑っていない。

……最初から試してたのか。

「合格だよ。君になら、本当に千沙を任せられるね」

「……………アリガトウゴザイマス」

正直、今は我慢するので精一杯だ。部屋に行ったら、無理矢理やつちまいそうで、ちよつと厳しい。

……耐えろ、俺！

「そんなに好きか」

ヒロアキさんより低い声が聞こえ、俺は顔を上げた。そこにいたのは、エプロンを外している男 コウスケさんだった。

短い黒髪に、がっちりした体つき。暑苦しい、とまではいかないが、……やっぱりちよつと暑苦しい。

「千沙のことが、そんなに好きか……？」

「……………好きっすよ。マジで惚れてます」

真っ直ぐに浩輔さんを見て言えば、彼は腕組をして、ため息をついた。そして、俺を真っ直ぐに見下ろした。

威厳がある、父親のような彼を見て、結婚の申し込みをしている

わけではないのに、物凄く緊張した。

それだけ、あいつを大事にしてるってことだよな……。

そう思うと、こっちもそれなりの覚悟をしなきゃいけないと、そう感じさせられた。腹を括って見上げていると、パタパタと軽い足音が聞こえてきた。

「弘兄、オーブンに違うお菓子が入ってて使えな、い……って、何してるの？」

キョトンとした表情で俺たちの状況を見ていた千沙は、ヒロアキさんに引っ張られるようにして厨房へ入って行った。それを見届けたコウスケさんは、またため息をつく。

「……俺が言うことじゃないと思うんだけどな」

「？」

「あいつは、やめたほうがいいと思うぞ」

……。

……。

「え？」

意味が分からず聞き返すと、コウスケさんは真面目な表情で俺の隣に座った。

「見かけによらずズバズバ言うし、からかうと返って来るのは鉄拳。
……意外に強暴だぞ？」

……。

……。

「それがあいつなら、俺は受け入れるだけっすよ」

……。

……。

「……………はあ」

ため息をついたコウスケさんは、「そーかい」と疲れたように頷いた。

「しかたねえ……。弘晃の了承得ちまってるから、な。認めてやるよ」

そう言って席を立ったコウスケさんに、

「ありがとうございます」

頭を下げれば、苦笑いを返されてしまった。

とにかく、これで兄2人の許可は得ることができた。今日は、それで良いと思う。

……ん？何か、当初の目的を忘れてる気がする。

そう思いながら、俺は彼女が作ったアップルパイを食べたのだった。

4、疑問

そうだ、匂いだ。

それを思い出したのは、喫茶店を出てすぐ。辺りは既に日が暮れており、夕日の色が空を覆っていた。

「なあ、千沙」

「うん？」

小首を傾げて微笑む彼女を見ると、本当に抱きしめたくなる。ただ、今ここでは駄目だろう。

人通りが多い、とは言えない。だが、まったくないわけでもない。

ちらほらと人影が見える以上、恥ずかしがり屋の彼女の為にも、……と言うよりむしろ俺のために、下手なことをしないほうがいい。

窓を見れば、ホールから俺を睨んでいるコウさんと、ほわほわとした笑顔を浮かべながら見守っているヒロさんがいた。

アップルパイを食べ終わってから、コウさん、ヒロさんと呼ぶよう言われたのだ。

「お前、いつも手伝ってんのか？ 喫茶店」

「あ……うん。だから多分、蓮が言ってた匂いも」

「ああ。今出て、ようやく気づいた」

「そういや、入るときは大変だったもんな。一気に飛んじまうくらい。」

「だが、ずっと温かい気持ちでいられた。外に出て寂しく思ってたくらい、あの香りが好きになっていたらいい。」

「……若干、情けないし恥ずかしいけど……。」

「——あ、そうだ。聞いたかなきゃいけないことがあったんだ」

「入るとき、で思い出した。確か、智治の兄貴が仕事してた店も、喫茶店で。状況が似ていたような気がしたんだ。だから、後で確かめようと思っていた。」

「だが、何だか少し落ち込んだような表情をしている彼女を見て、思わず首を傾げてしまった。」

「どうした？」

「え？」

「なんか……落ち込んでないか？」

「すると彼女は少し考えた後、「うーん……」と声を洩らす。」

「うん、えっと、まあ、自分の不甲斐なさに……。」

「は？」

思わず返事を返した。すると彼女は、小さく声を洩らして笑う。そんなときの仕草まで、本当に可愛くて。

……あー……ほんと、何でこんなにかわいいんだか……。

「何でもないよ」

そういう彼女に、本当か尋ね返せば、笑って頷かれた。だから、「そっか」と呟きながら、微笑み返す。

「……………ん？あれ、どこまで話したっけ？ってか、何の話して…
…あー、そうだ」

兄貴のことだ。聞かなきゃいけなかったんだった。

「なあ、ここにもう2人、従業員っているだろ？」

「え？あ、うん。……あれ？教えたっけ？」

やっぱり。

不思議がる彼女を見たまま、俺は「いや」と声を洩らす。

「多分、聞いてない。聞いてたとしても、聞き流してたと思う」

「…………じゃあ、どうして？」

「その人の名前、高瀬 智治って言うだろ？」

「何で知ってるの!？」

思い切り驚いた声を上げる彼女を見て、俺は笑う。

彼女の顔が可愛かったから、というのもあるが、何より気づかなかった彼女の鈍さに敬服しそうだ。

「なあ、千沙。俺の苗字、覚えてるか？」

「蓮の?……高瀬でしょ?」

「智治って人の苗字は?」

「……えーっと……確か、たか………あ」

思い当たったらしく、彼女は「もしかして」と声を上げる。

可愛くて、愛しくて、何だかもう、本当にたまらない。

こんな瞬間に幸せを感じる俺は、どうかしている。

別に、彼女が俺を褒めているわけでも、愛を語ってくれているわけでもない。ただの世間話で、彼女は普通にリアクションを返して、返答して、それだけだ。

それが、こんなにも嬉しく思うのは、どうしてなのか。

「俺の母親の兄なんだよ、智治の兄貴は。俺の伯父ってわけ」

「ええええっ?!」

素っ頓狂な声を上げて驚く彼女を見ると、もう本当に我慢できず。

「ブッ!!!」

思い切り噴出してしまった。

「あっはははははははは!!!!その顔!マジ面白ッ!」

「……なんか、すっごく複雑なんですけど……?」

「ああ、悪い悪い(笑)」

「絶対思っただけじゃん!」

「あ、バレた?」

「もう!!!」

いつも通りのやり取り。それが楽しくて、彼女と目があって、自然と笑い合った。

「じゃあ、もしかして家の事情も知ってる……?」

少し寂しそうに笑う彼女を見て、

「……まあ、少しは」

と答える。

すると彼女は、「そっか」と小さく笑う。

それがすごく寂しそうに見えて、けれど、どうすれば笑ってくれるのか。今、彼女が何を求めているのか。俺にはそれが分からない。

ただ、今はそばを離れたくなくて、もう少し、彼女の話聞きたくて。

「……なあ。この近くに、公園ってある？」

「え？……少し遠いけど、あるよ。どうし——」

最後まで言い切らない彼女の腕をそっと引っ張り、俺は笑う。

「じゃ、行こうぜ」

「え？……あ、ちょ、蓮？！」

彼女の腕から手に、自分の手を移動させて、俗に言う“恋人繋ぎ”にする。そして道を歩きながら、考える。

公園に言って、何を聞けばいい？何を言えばいい？どうすれば、彼女は笑ってくれるのか。どうすれば、あんな顔をしなくなるのか。

時々、思う。

俺は、彼女の役に立っていないんじゃないか、と。彼女に相応しくないのではないか、と。もっと大人で、包容力のある人間がそば

にいるべきなんじゃないか、と。

——だけど、この気持ちに嘘偽りはない。

だからこそ、やっぱり思う。

彼女が今求めているのは、誰なのか

「……って、ちょっと蓮！方向逆！逆だから！」



辿り着いた公園は、人気がない。日が暮れているのだから仕方がないだろう。

「すげえ……結構広いな……」

「うん。ここの近くに幼稚園と小学校があるから、その帰りに寄る子も多いんだよ。たまに、散歩してるおじいさんやおばあさんが、そのベンチに座って休んだりするけど」

「へえ……。んじゃ、そのベンチにでも座るか？それともブランコ

……滑り台のほうがいいのか……？……うーん……」

話を聞くななら、妥当にベンチ？いや、ブランコ？……もしくは砂場。

「……………蓮？」

「いや、何でもない。ベンチに座ってろよ。俺、ジュース買ってくる。何がいい？」

「あ…………えっと、じゃあ…………ミルクティー」

「オッケー」

自動販売機でミルクティーとコーヒーを買って、思わずため息をついた。

今になって、三上の言葉が脳裏に過ぎる。

『…………榛馬は、高瀬君にすごくよく似てるの』

『表情とか、雰囲気とか。』

そこらへんは、すごくよく似てる』

『結局、私が言いたいの……………』

千沙が高瀬君と付き合うのは反対だってこと』

『…………マウとの思い出は、』

思い出にしたいくないことだと思うから』

『千沙の心をかき乱して、
狂わせて、苦しませるだけだと思う』

「……………」

持っていたコーヒーの缶を握り締め、熱くて慌てて反対の手に持ち帰る。無意識にやったことであっても、感覚があれば当たり前のもので、反応だと思う。

「はあああああ………」

ため息をついて、彼女の元へと向かう。俺が今したいのは、悩むことじゃない。彼女の話をも、聞くことだ。

彼女の口から真実を聞くまでは。それまでは、悩むべきじゃない。

「ほら」

「あ、ありがとう………」

そっと手を伸ばして受け取った彼女は、嬉しそうに微笑む。その笑みを見て、ホッと安堵した。

黙って隣に腰掛けて、どうやって切り出そうか考える。いきなり尋ねるのは不躰だし、だからと言って遠回しに聞いても、あまりいい印象は与えないだろう。

さて、どうするか。

「……ごめんね」

ポツリと呟かれた言葉に、俺はちらつと彼女を見る。申し訳無さそうにしながら、太ももの上で缶をコロコロと転がしているのが目に入って、俺は無言で缶コーヒーの栓を開ける。

カチャ……。

音がして、湯気が空へ向かって伸びる。それを見ながら一口飲み、

「……別に」

と、ぶっきらぼうに返した。

緊張して、あまり言葉が出てこない。いつもなら何て言っていたのかすら、もう思い出せない。

多分、前の俺なら……“気にしなくても大丈夫だって”とか何とかいうだろうけど。なら、今の俺なら？昨日までの俺なら、何て言ってた？

……いつも通りってのは、案外難しい。意識すると、とんと難しく感じる。

「「……………」」

痛いほど静かな沈黙が、俺たちの間にある。

俺が強引に連れて来たのに、何も言わない。これほど最低なことも……………なくはないが、今の彼女の心境から考えても、あまり歓迎されるものじゃない。

せめて、どうしてここに連れて来たのか、くらいは話すべきだ。

そう思うのに。

「……………」

言葉が出てきてくれなかった。

俺の知らない、彼女の過去を聞きたくないから？ マヤマって言う男の話を、聞きたくないから？ 聞いてしまった後の俺を、見られたくないから？

——いや、全部違う。本当は、本当は聞きたくないんじゃない。知りたくないんだ。

俺を好きになったのは、マヤマって奴に似てたからだ、なんてことを知りたくないから。それを知ってしまうのが、何より怖いから。だから俺は、今、こんなにも緊張して。こんなにも、——怖いんだ。

「……………な、なあ、千沙」

「……………え？ あ、何？」

ボーツとしていたらしい彼女に声をかけ、必死に言葉を探す。彼女の負担にならないような、彼女の心を刺激しないような、そんな言葉。

なのに、出て来たのは

「直人と三上の関係知ってるか?!」

.....。

.....。

馬鹿か、俺は。

思わずため息をつきたくなった俺は、「2人の?」と首を傾げる彼女を見て、小さく苦笑した。

「そ、2人の。幼馴染なんだとさ」

「嘘?!」

「ホント、ホント。直人から聞いたから」

もう一度コーヒーを飲み、「へえ...:そうだったんだ」と呟く彼女を横目で見ながら、いつの間にか開けられた缶を見る。ふちが茶色に染まっているのを見ると、既に何度か口になっているようだ。

「で、一時期付き合ってたんだってさ」

「ええ?!」

本当に初耳らしく、彼女は飛び上がるように驚いていた。それを見て、ホッと息をつく。

「でもでも、中学のとき、直人君は別の学校で……」

「ああ、まあな。……いつだったかなあ……中1か？いや、小6の夏……？まあ、それくらいの頃に、直人がこっちの学校に転校してきたんだよ」

「へえ……あれ？別に転校する必要はない？電車で通えば……多分、大丈夫なんじゃ……」

「ん？ああ、知らないのか。九州のほうに一回行ったらしんだよ。で、こっちの学校に越してきたらしい。借りたアパートから一番近かったらしい」

「そうだったんだ……」

結局自然消滅だったらしいと言えば、彼女は少し寂しげに笑った。

「……私、初めて聞いたよ、そんな話。ハル、一度も教えてくれなかった……」

「……………俺もだ」

何を考えて言わなかったのかは、何となく分かる。あの時のあいつの苦渋な表情を見れば、なんとなく。

でも、それを千沙に言うのも違う気がして、俺は小さく笑った。

あいつが、今まで俺に言わなかったのは。三上が、彼女に言おうとしなかった理由は。

「直人から聞いたよ。あいつが菖蒲を好きになったのは、俺よりずっと前だって」

「……………」

「詳しいことは分からないけど、直人が転校する前から、三上はマヤまって奴が好きだったんじゃないかな……」

カラン、カラン……。

音に少し驚いて彼女を見れば、手に持っていた缶が地に落ちて、まだ入っていた液体がこぼれた。それを見ながら、彼女は固まっていた。

「……………どうして」

「？」

「なんで、蓮が……真山君を、知ってるの……？」

絶対に俺を見る事無く、彼女は微かに震える声でその名を紡ぐ。微かに震えている手を見て、俺は空を仰ぎ見た。

結局、遠回りして聞くことになっちまったな……。俺、本当に情けない。

「……………三上から、聞いたよ」

「ハル、が……？」

頷いて、星を眺める。今が何時なのかは分からないが、風がさつきよりも冷たくなっていった。星が見えると言うことは、それなりに遅い時間なのではないか。

そう思うのに帰ろうとしないのは、彼女の過去を知りたいから。

彼女の想いを、知りたいから。

——ああ。吐く息が、白い……。

「卒業前に死んじまった、ってさ。三上の元彼氏で……お前の初恋の相手だって」

「……っ」

目を伏せて唇を噛む彼女を盗み見ながら、俺は更に言葉を続けた。

「ママは俺によく似てる、だってさ。ぱっと見の顔とか、雰囲気とか、表情とか。だから、俺と千沙が付き合うのは反対だって、そう言われたよ」

既に冷たくなった缶コーヒーを握り締めたまま、次の言葉をどうやって紡ぎだそうか考える。

けれど結局何も言えずに、俺は缶を煽る。中身を飲み干してから、彼女が下ろした缶を拾い上げ、呟いた。

「捨ててくる。ちょっと、待っててくれるか？」

彼女は小さく頷くと、俺の目を見る事無く、ずっと俯いていた。

4, 5-1 弘晃視点

「行った、か……」

兄さんの声を聞いて、僕は立ち上がった。

「コーヒー入れるよ。……ブラックでいいよね」

「ん？ ああ、悪い」

どこか上の空の兄さんを見て、僕は何も言わず、厨房に引込む。

コーヒーくらい、カウンターで作れる。と言うより、コーヒーの材料は全て、カウンターに置いている。

それなのに、わざわざ厨房に来たのは、兄さんの傍にいたくなかったから。

「……………」

千沙が店を出て直ぐに、兄さんはポツリと、呟いた。

『弘晃。』

——すまなかった』

何が、“すまなかった”、だよ……。

そう思いながら、でもどこかで分かっていた言葉に、僕はやっぱり、何も言えなかった。

「……ふう」

千沙を見ていると、いつも思う。

幸せになってほしいと。

でも、兄さんを見ると、いつも思ってしまう。

不幸せを、願いたいと。

「……はい」

「ああ、ありがとな。……………って！」

1口飲んだ兄さんは、眉を顰め、洗面を浮かべる。

「……やけに苦いな……」

「目覚めには良いかと思って。…………徹夜した日は、最高級に苦いブラック、だろ？」

「……それは、よく気の利くことで」

「それに、今日もまた、徹夜みたいだしね」

「……………」

苦虫を噛み潰したかのような表情を浮かべる兄を見て、僕は静かに、微笑を浮かべた。

兄さんは、徹夜していたことや、自分が努力しているところを、あまり見せようとしない。見られてしまうのを、何故か嫌がる。

今苦い顔をしたのは、“気づいていたのか”と、自嘲するかのような、嫌がるような、そんな意味を持っている。

千沙が僕に持ってきた、失敗コーヒー。あれは、兄さんの為に作ったものだったのだ。僕と兄さんに渡すとき、逆に渡してしまったらしい。

……いや、もしちゃんと渡してても、兄さん、飲み干せなかっただろうな……。

「弘晃」

考え事をしているときに名前を呼ばれて、でも、返事を返すことはしなかった。視線を向けることもしない。

「――すまない」

その一言に、どれだけのオモイが込められているのだろう。

どれだけこの人は、罪悪感を覚えているのだろうか。どれほど深

い愛情を、彼女に注いでいるのだろうか。

「……………」

気にしてないよ、なんて、言えなかった。

思い出すのは、彼の言葉。

『…………まだいない、って……』

本当ですか？』

的を射たその言葉に、俺は思わず、苦笑を浮かべていたと思う。

“ ああ、これが千沙の好きになった男なんだ” って、素直に思った。……千沙なら、好きになるのだろうか、と。

「……僕は、兄さんに謝って欲しいわけじゃないよ。それは、兄さんもよく、理解してるはずだけど」

「……………ああ」

神秘的な表情のまま、床を見つめて動かない兄さんは、あの時と同じ。

「…………だが、——すまない」

その“すまない”に、一体、どれだけのオモイを込めたのだろう。いつも、言われるたびに思う、自分の素直な疑問。……否、断定。なんとなく、分かってる。兄さんが、どれだけの思いを込めているのか。どれほどの想いを、込めてしまっているのか。

分かるから、僕はきつと、兄さんの不幸せを願うしかないんだ。

「真由美は、兄さんを選んだんだ。なら僕は、——それでいい」

「……………」

何か言いたそうな、思い詰めた表情の兄さんを見た。何も言わないその表情は、昔よく見た、“父”の表情で。

——僕はきつと、2択のうち、最も辛い選択を選ぶ。そして、辛いままなのだろう。

何故かそう、思い知らされた気がした。

「それで、いいんだよ……僕は」

それでいい。それだけで、もう十分だ。

「……まるで、あいつと同じだな、お前は」

……え……？

意味が分からなくて、初めて兄さんの方をまともに見れば、そこ

にはもう、背を向ける兄さんしかいなかった。

「俺はそろそろ、仕事をする。お前はさっさと休んで、さっさと仕事に行け。」

……明日は、朝、早いんだろ」

「……………」

「千沙のことなら、俺が後で、頃合を見て迎えに行くからよ」

そう言って、厨房に姿を消した兄さんの背を、やっぱり僕は、見つめるだけで。

「……………やっぱり」

僕は、それだけでいいと、思ってしまうんだ――。

4, 5-2 浩輔視点

パタン。

扉を閉めて、ズルズルとその場に座り込む。

『真由美は、
兄さんを選んだんだ』

『なら僕は、
——それでいい』

「嘔吐けよ……」

“それでいい”？んなわけねえだろ。

「……どんだけ、一緒にいると思ってんだ、あの馬鹿……」

弘晃は弟だ。ずっとそばで、あいつと妹を見続けてきた。

だからこそ分かるのは、あいつが優し過ぎて、他人を思いやり過ぎて、“自分”が消えているということ。

千沙もそうだった。あいつもまた、“自分”が消えていた。でも、あいつを救うのは俺じゃない。今日来た、あいつが、それをするべきなんだ。

「……まあ、笑うようになったか……」

まだ完璧とは言えないが、それでも、以前より格段に良くなった妹を見て、蓮という男を認めることにした。——いや、認めていた。

弘晃が1番に気づいて、そして、1番に認めていた。

他人を受け入れ、ちょっとした変化に気づき、対応できるのが、あいつのいいところだ。臨機応変に、そして着々と仕事をこなす。

ただ、そこに“自分”というものがいない、と言うだけなのだ。

『それで、いいんだよ

……僕は』

それを聞いて、直ぐに思い出した、懐かしい言葉。

『目を覚ましてくれなくても、いい』

『そばにいられるのなら、

彼がどうであつても、私は構わない』

『私が彼から離れることは、
——絶対にないから』

『だから、いいの』

『私はもう、それでいい』

諦めた表情を浮かべて、どこか晴れやかさにも似た声音で言った
彼女と、弟はとてもよく似ていた。

“それでいい”——。

自分に言い聞かせるその言葉は、更に奥深くまで突き刺さっているはずなのに。

抜くこともなく、もっと深く、深く深く刻もうとする。

だから俺は、“あいつら”を放っておけないんだ。

例えそれが

俺のエゴであつたとしても

5、過去の欠片？

「……真山君は、生まれつき心臓が悪くて、小学6年生になって、よく入退院を繰り返すようになったの」

缶を捨てて、戻って来た俺は、上に羽織っていたコートを彼女にかける。礼を言って、すぐに俯いた彼女の隣に腰を下ろし、しばらくの間が空いた。

10分、経っただろうか？……その頃になって、彼女がポツリと呟いた。

俺は、何も言えない。

「私はずっと、彼が好きだった」

「……ッ」

ズキンと、胸が痛む。

分かっていたことだったとしても、それでも、痛む胸は隠せない。

彼女の口から聞いた言葉だからこそ、彼女が語る真実だからこそ、痛みは鋭い。

もう話を切り上げて、帰ってしまおうか？そう思ってしまうくらいに、膿んだかのように、ズキズキと痛む。

だというのに、彼女は口を開かない。ただ黙って、自分の手を見つめていた。

俺からの反応を待っているのか、それとも、次に何ていえばいいのか迷っているのか。

そんな彼女の隣で、俺は、どうすればいいのか。

「――私のお父さんと、お母さんがね。小学3年生のときに、交通事故で亡くなってるの」

「!？」

初めて聞く事実には、俺は驚いて彼女を見る。でも、その目は俺を映すことなかった。

三上が言っていた。

『……千沙には、3つ、

人に隠しておきたい過去があるの』

『1つがマウ。2つが家族。3つは』

結局、3つ目は分からなかったが、それでも、彼女は人に隠しておきたいうちの2つの過去を、俺に話してくれているのだろう。

それが今の俺には、救いだった。頼りにされているのだと、俺を信頼しているのだと、そう思えたから。

「凄い、バカップルだね。いつもラブラブで、記念日の日は、いつも2人でお出かけしてて。

——でも……現実には、残酷で。

居眠り運転してたトラックと正面衝突して、即死だった」

「……………」

「私、まだ小学生で……お金も手間もかかって大変だから、親戚の人は、私を引き取れなかったの。兄弟をバラバラにするのも可哀想だ、って……でも、3人を引き取れるほどのお家は、親戚になくて……」

「……………それで？」

「お父さんの、お母さんが引き取ってくれたの。でもお婆ちゃんも、去年亡くなって」

「……………そっか」

「……………うん」

頷いた彼女は、微かに震えていた。

寒くて震えているのか、怖くて震えているのか、泣きたくて震えているのか、悲しくて震えているのか。

……俺には、彼女の思いが、考えが、気持ち、分からなかった。

「身近な人の……死を、間近で見えてきたから。だから、思わず、真山君に言っちゃったの。“どうせいつかは死んじゃうんだ” 真山君は私より早く、逝っちゃうかもしれないじゃない”——って。

最低、だよ……。真山君自身が、1番辛くて、怖いのに……それなのに」

体が、勝手に動いた。

必死に我慢しようとしている彼女を、言葉を紡ごうとしている口を、どうにかしたくて。

気づけば、彼女を抱き寄せていた。そして、軽くキスしていた。

すぐに離れた唇は、吹いた風にさらされて、冷たく感じた。

彼女の頭を俺の肩に押し付けて、耳元で、囁く。

「我慢、するなよ。……俺の前で、我慢なんかすんな」

「……も……でも……！」

「何のためにいるんだよ、俺は。……お前が思ってるほど、俺は弱くないよ。好きな奴の涙くらい、悲しみくらい、受け止められるさ」

ポンポンと背中をたたくように撫でながら、「だから」と、祈るように言葉を紡いだ。

——彼女の全てを、俺は知りたい。

「泣いてくれ」

——彼女の全てを、受け入れたい。

「……………俺の腕の中で、泣いててくれ。——頼むから」

泣くことを強要したのは、初めてのことだ。でも、彼女を泣かせる方法を、彼女が甘えてくれる方法を、俺は知らない。

俺はまだ、彼女を知らない。

だから、頼むしかなかった。彼女を“促す”んじゃなくて、“頼む”しかできなかった。

情けない……。

彼氏であるはずなのに、彼女の彼氏であるはずなのに。それなのに、彼女の心を軽くさせる言葉の1つも浮かばない。

彼女を喜ばせる言葉も、悲しませる言葉も、怒らせる言葉も、分かってる。でも、今ここで、何を言えば彼女は泣いてくれるのか。

——それだけは、全く分からなかった。

情けない。

腕の中で、ただ静かに泣く彼女を力いっぱい抱きしめながら、そう思う。

情けない……情け、無さ過ぎる……。

守りたいと思った、彼女を。だから、強くなりたいとも思った。それなのに、俺は、彼女の泣かせ方を知らない。彼女を甘えさせる方法を知らない。

彼女自身を、知らない

それがこんなにも辛いことで、苦しいことで、歯がゆいことなのだ、今初めて知った。

彼女のことを知りたいのだと、そう強く思った。

「ごめん……」

抱きしめながら、呟く。

「ごめん……ごめん……！」

情けなくて、悔しくて、歯がゆくて……俺が、泣きそうだった。

こんなにも強く彼女を想っていて、それなのに、その想いを抱けば抱くほど、彼女自身が遠ざかっていく感覚がある。

走っても走っても、彼女に追いつかない。彼女に手が届かない。あの時のように、彼女が行き止まりに着くことも無く、空のように続く道を、ただひたすら駆けている。

——行かないでくれ。

走り行くその後姿を見ながら、願う。

——そばに、いてくれ……！

俺は、一体、どうしたいんだ。

彼女が好きだ。それだけは変わらない。でも、じゃあ、俺は彼女に何を求めているんだ？ 彼女は俺に、何を求める？

——俺は——

「……ないよ……」

「……………？」

「蓮の、せいじゃないよ……！」

腕の力が緩み、俺の頬を、彼女の両手が包む。見えたのは、瞳一杯に涙を浮かべた君。

——ああ、そっか。

「蓮のせいじゃない！ 蓮は、蓮は何も悪くなんか無いの！」

ボロボロと、次々涙を流す彼女を見ながら、俺は微笑んだ。

泣いた。泣いてくれた。――俺のために、彼女は泣く。

「れ、の……せいじゃ……っ！」

「……ああ」

そっと手を伸ばして、彼女の頬に触れた。すると、まるで堰を切ったように彼女は泣き出した。

俺の胸にすがり付いて、涙を流し続ける彼女を抱きしめながら、俺は空を見上げた。

星が見える。綺麗に輝く、たくさんの星が。

「……なあ、千沙」

ヒックヒックと、声を上げながら、まだ微かに泣いている彼女に呼びかける。

「俺、千沙に1つだけ、約束するよ」

「……や、く、そく……?」

子供のように、尋ね返してくる彼女の頭を撫でながら、俺は微笑みながら頷いた。

「俺は、お前より長く生きる。お前より先に、死んだりしない」

「……！」

「千沙が死んで、1秒しか生きられないかもしれない。でも、それでも、絶対に約束してやる。」

——俺は、お前より先には、絶対に死なない」

この言葉が、どれだけのものなのか。俺は分からない。でも、彼女は身近で死を十分すぎるほど体験してきた。

なら、少しでも大切な奴が死んでいくを見なくていいように。1人でも多く、見取る必要が無いように。

俺だけは、お前より先に死なないと、誓ってやる。

「……ほん、とー……？」

首を傾げた彼女の目は、真っ赤になっていて。

俺の服を握る手は、震えていて。

「……本当だ」

その手を握りながら、俺は頷く。

「絶対に……絶対に……？」

「絶対に絶対。……誓うよ」

ふわりと、羽根のような口付けをすれば、彼女は涙を流しながら、

綺麗に笑った。

その笑顔が眩しくて、俺は思わず、一筋だけ、涙を流した。

1、先輩

あれからまた、何度か彼女の家（正確には喫茶店）に遊びに行った。

そしてその度に、コウさんとは拳やら足やらを交え、たまにヒロさんと腹黒対決。

……良い婿修行（？）だ……本当に、帰る頃には疲れ果てて頭痛がするくらい……。

そんな日が続いた俺の冬休みは、すぐに終わりを迎えた。学校が始まったのは、2週間前。

「……………」

冬休み中も交換し合っていたため、n e v eからの手紙は増え、今では20くらいになる。

内容はいつも通り、日常に関することばかり。でも最近は、少しずつ過去の話が入っている。

『蓮さんへ。』

今日は友達のノロケ話を聞いていました。正直、憎らしいです（

笑)

その友達は、昔私が好きだった人と付き合っていて、けれど別れてしまったから、ずっと気にしていました。最近は楽しそうなので、とても嬉しいです。

実を言えば、私もまだ完全に吹っ切れてはいません。でも、優しい彼氏がいてくれるから、毎日落ち込まずに済みます。少しずつになると思うけど、話せば良くなって思ってます。

これは、私のわがままでしょうか？

n e v e

俺がいることに意味がある。そう思える内容に、思わず笑みを浮かべてしまう。

手紙をポケットにした俺は、空を仰ぎ見て、ため息を吐いた。

「あー……ねみい……」

そのまま後ろに倒れ、視界一杯に広がる空を見て、目を細めた。
と、

「じゃあ、一緒に寝る？」

そんな声が聞こえてきて、俺は「は？」と声を返した。

振り向けば、そこには見知らぬ女が立っていて、俺を見ながら笑っている。

長い茶髪に、黒い瞳は切れ目。大人びた印象を与える顔つきは、美人と言っていていいだろう。着崩した制服が、よく似合っている。

が、こんな女と知り合いになった記憶はない。

「……誰だ？」

「さあ、一体私は誰でしょう？」

「……はあ？」

楽しげに微笑む女を見て、俺は思い切り胡乱げな声を出してしまふ。すると相手は更に楽しげに声を出して笑い、俺は冷めた目を向ける。

「……しらけるなあ、もう」

俺の周りには同じような反応をする女子しかいないのだろうか。

瀬川といい、三上といい、こいつといい……。

「君が、高瀬君……だよね？」

「……そう言うあんたは」

冷たく、突き放すように睨めば、彼女は肩を竦ませた。

「そう睨まないでよ。私の名前は、美嘉。佐々木 美嘉だよ。これでも3年」

「あつそ。……で？お前は、俺に用があるのか？」

「冷たいなあ。彼女さんの前とは大違い」

そう言って笑う佐々木を更に睨めば、ため息をつきながら俺の隣に座った。

「まったく……、今の一年坊は、皆こんなに愛想ないのかねえ」

「知るかよ」

ぶつきら棒に返す俺に、けれど気にした様子もなく、ケラケラと笑っていた。

……何だか調子が狂う奴。

「……で？」

「ん？」

「用があつたんじゃねえのかよ……」

呆れたようにそういえば、佐々木は笑って、「だから」と口を開く。

「私は3年だって、言ってる……だろーがつー！！！」

「だっ?!」

思い切り頭を殴られ、俺はわけも分からず目を見張る。

目の前には、頬にキレマークを浮かばせている、ささ……、佐々木先輩がいて、思わず冷や汗が背中を伝う。

……こ、こいつ……こえええ！

「……さ、サーセン……した……」

「ふん、分かればよろしい。……って、ああ、そんなことよりも」

……………。

……何なんだよ、こいつ……。

半ば呆れながら、「はい？」と面倒そうに聞き返せば、先輩はにっこりと笑ったのだった。

「私、君のことが好きなんだ」

……………。

……………。

……………。

「は？」

「……本当に、白ける反応してくれるよね、君って」

呆れた表情を浮かべる先輩を見て、「いやいや」と手を振った。

「そりゃこっちの台詞だって」

“だって”？」

「……です」

「よろしい」

逆らえばきつと、また手が出るのだろう。流石に勘弁だ。

「……で、佐々木先輩、さっきの冗談ツスよね？」

「どうしてそう思うの？本気だよ」

「……俺、彼女居ますけど……」

「関係なし！」

……………。

「……はあ」

思い切りため息をつけば、彼女は更に楽しげに笑った。

「障害があればあるだけ、楽しいと思わない？」

「思わないですね。俺は、あいつ以外を好きになるつもり、毛頭ないですし」

「ベタ惚れね。……でも、絶対に振り向かせてあげる。楽しみに待っててね」

そう言った先輩は、ヒラヒラ手を振って出て行った。その背を見ながら、俺は先輩の目を思い出す。

黒目のあの瞳は、どこか切なさを内包していたような気がした。それが少し、気になっていた。

「……………」

まあ、俺には関係ないか。

そう思った俺は、ため息をつきながら、教室に戻ったのだった。



情報とは怖い。

「高瀬君が告白されたって聞いた？」

「聞いた聞いた！3年の先輩でしょ？」

「美嘉先輩だって」

「ああ、あの人！」

「誰々？」

「陸上部の……」

「ああ！」

どうやら佐々木先輩という人は、結構な人気者らしい。女子たちが「応援する？」とか言っている。

……ふざけんな。

「私は応援しよ——」

「オイ」

うざいくらい騒ぐ女子に近づき、見下ろしてそう言えば、一斉に青ざめた顔をする。それに構わず、苛々をぶつけるかのように睨む。

「……黙れよ」

「「あ……」」

「応援だ？ ふざけんじゃねえよ。……人のことに首突っ込むな」

吐き捨てるように言って、俺はその場を離れる。不愉快この上ない。

……千沙に会いたい。

あいつに会えば、すぐに癒される。あの笑顔に、あの優しさに、心がほぐれる。穏やかな気持ちになれるのに。

「……はあ」

ため息をつくど、いつの間に隣に來たのか、直人が笑っていた。

「聞いたぜ？」

「……何を」

「先輩の話だよ」

「……ああ」

ウザったそうに呟けば、「お前も大変だな」と呟く。

「そう言うお前は、どうなんだよ」

「俺？……俺は……まあ、気にすんな」

……？

妙に齒切れの悪い直人を見て、俺は目を細める。よく見れば、いつもつけているリングが一つない。

「……直人。お前、リングはどうした？菖蒲からもらったって、嬉しそうにしてただろ」

そう言うと、直人は諦めたかのような苦笑を浮かべ、ポケットから取り出した。

何故つけないのか尋ねれば、――強い表情で、笑った。

「けじめだよ」

「……………」

「あいつが俺を望んでくれるまで、これはつけない。そう言って、あいつの前ではずしたんだ」

強い、表情だった。

どこまでも強く、しっかりとした意思に、俺は何も言えなかった。

「……強いな、お前」

ポツリと呟けば、直人は苦笑を洩らす。

「強いなら、けじめなんてつけねーよ」

「は？強いから、けじめをつけられるんだろ？」

そう言うと、直人は「いや」と呟いた。

「……弱いから、けじめをつけるんだ。」

弱いから、あいつの前でけじめをつけて、守ろうって意識を高めたんだよ。不安で不安でしかたねえ弱い気持ちを、強くするために。あいつとの未来を、夢見るために」

ぐっと握り締めた手を見て、直人は、笑ったんだ。

笑顔でいられた直人が、眩しくて。

「……そっか」

でも俺は、そんなお前が、……強いと思うよ。

心の中だけで、そう呟いた。



ブブツ、ブブブツ……。

部活後になったバイブに、汗を拭きながら携帯を見れば、千沙からだった。

『話がしたい』

それだけのメールが、何だか妙に気になって、俺は『前に話をした公園にいて』と送る。

「蓮、先輩が“自主練しねえか”、だってよ」

「悪い、直人。俺、先帰るわ」

「は？——って、おい、蓮！」

止めるように聞こえる直人の声を振り切って、俺は学校を飛び出した。

2、1つの影が、割れる時

公園に行けば、千沙がベンチに座ってボンヤリと宙を仰いでいた。それを見て、少し安堵する。

「……千沙」

呼べば、彼女はすぐにこちらを見て、肩の力を抜いた。でも、その顔に笑みはない。

何だか気になりながらも、彼女の隣へと移動する。彼女の視線は、下に向いていた。

「「……………」」

何も話さない彼女を見て、俺は財布を確認した。中に入っていたのは、177円。近くにあるのは、販売機。つまり、ジュースは一本しか買えないということだ。

「……千沙、ミルクティーでいいか？」

「え？あ……いいよ、大丈夫」

遠慮してそう言った彼女の手を、俺は少し強引にとった。その手はもちろん、冷え切って赤くなっていた。

「これのどこが、大丈夫なんだ？」

「……………」

「いいから、少し待ってろ。な？」

確認するように言えば、彼女はコクンと頷く。それを見てから、カバンを地面に置き、急いで販売機に向かう。

……ミルクティー……ミルクティー……って。

「……………あちゃー」

ちょうど売り切れになっているそれを見て、俺はどうしたもんか考える。彼女の好きな飲み物は、ミルクティー以外分らない。

……俺、本当に千沙のこと、何も知らないんだな……。

そう思ったら、胸が微かに痛んだ気がした。

俺たちは、他の恋人と比べたら、何も知らないのかもしれない。相手の誕生日も、血液型も、好きな食べ物、飲み物、スポーツに興味。

「……………」

とりあえずココアを買った俺は、ベンチに俯きながら座っている彼女を見て、今更気づく。彼女が、制服のままだということに。

「千沙」

「え?……あ」

ココアを渡してから、上着に触れば、それは雪のように冷たい。ジャージじゃあまり温かくはないかもしれないが、ないよりはましだと考え、上を脱いで彼女に着せた。

部活後、着替える間もなく走ってきたため、下は半袖。寒くないはずがない。だが、彼女に風邪を引かせるくらいなら、自分が寒いほうが断然いい。

「駄目だよ!これじゃ連が――」

「いいから、黙って着てろ」

無理矢理チャックも閉めれば、彼女はダボダボのジャージに腕を通し、申し訳なさそうに俯いた。

「……汗臭かったら、悪い」

「……大丈夫……」

呟いた彼女の表情は晴れない。俺はとりあえずカバンをよせて、彼女の隣に座った。

前と同じように、缶をコロコロと動かす彼女を横目に見ながら、俺は白い息を吐き出した。

「……どうした?って、聞いてもいいか」

「……………」

無言で頷いた彼女を見て、そっと手に触れた。ピクツと動いた彼女は、でも、抵抗することはない。

震えるその手が、何かあったということを知らせてくれた。

「……どうした？もしかして、先輩の話、聞いたのか？」

「……………」

「もしそうなら、悪かった。早くお前に、言いに行けばよかったよな」

そう言つて、もう一度「悪かった」と言えば、彼女の手が更に震える。それに驚いて彼女を見れば、目には涙が溜まっていた。

「え、あ、ちょ……千沙？！」

驚いて声を上げれば、彼女は更に俯き、ボソツと呟いた。

「……て」

「え？」

聞こえなくて問い返せば、

「――別れて……」

そう、確かに聞こえた。

意味が分からなくて、言葉が返せなくて、

「……今、なんて……？」

信じたくなくて、問い返したその声は、情けないことに震えていた。

……別れる……？

それは一体、どういう意味だ……？

「別れて、下さい……」

俺のほうを向いて、頭を下げる彼女を見て。その場を去ろうとする彼女の腕を掴んだ。

引き止めたくて、待つてほしくて、話が聞きたくて、聞いて欲しくて。

「――行くな」

腕の中に閉じ込めて、そう呟いた。

「……頼む。行くな」

ぎゅっと抱きしめれば、彼女から甘い香りがする。俺の大好きな、癒されるあの香りに、涙が溢れそうだった。

今度は微かに抵抗する彼女を、俺は力の限り抱きしめた。

「……なして……。離して、蓮」

「……………」

「お願い……。もう、離して……」

「離したら、逃げるんだろ？俺のところから、居なくなるんだろ？……だったら、意地でも離さない」

離せるはずがない。

こんなにも好きで、こんなにも愛しいのに。

別れたいから、離れてくれ……。？

納得できるはずがない。

納得なんてしない。

……頼むから……。

「理由くらい、教えてくれ……。じゃなきゃ俺は、どうやったってこの手を、——お前を、離してやれない」

彼女の幸せを望む。

だからこそ、彼女の幸せが、俺の隣にあれば良いと思った。

でももし、彼女の幸せが、他の男の隣にあるのなら。

「……お前にもし、他に好きなヤツができたって言うなら、……この手を離す。俺のことが嫌いになったなら、ちゃんと離してやるから。」

だから頼む。理由を、教えてくれ」

何も言わずに別れることは、したくない。

もしかすればただの勘違いかもしれない。

『私、君のことが好きなんだ』

昼間の先輩の言葉を思い出して、俺は強く思う。

もし、先輩との間を誤解しているのなら、それを解きたい。だから、理由が知りたい。不安にさせたなら、ちゃんと、安心させてやりたい。

——別れたくない——

「……………」

それでも何も言わず、俺の腕を掴んで黙り込む彼女を、本当に愛しく思う。

これは子供の恋かもしれない。恋愛“ごっこ”かもしれない。でも、それでもいい。今は絶対に、彼女を離したくないんだ。

初めてだった。

自分のことを、人に知って欲しいと、願ったのは。相手の重荷を、背負ってやりたいと思ったのも、護りたいと願ったのも、自分の隣に幸せがあるよう、……祈ったのも。

夜眠れなくなるほどに、愛しい人を見つけたのだった。

学校に行けば、彼女に会いたい気持ちで一杯で。授業には真面目に出るけど、始まってすぐは彼女のことを考えてるし、もう少しで終わるって頃になれば、会いたくて会いたくてウズウズする。

メールが来れば嬉しいし、彼女に名前を呼ばれるだけで、今でもまだ胸が高鳴る。

それほどに愛しいのに……。理由も知らないまま離すことだけは、絶対に、——絶対にできない。

「……もし、お前が先輩の告白を気にしてるなら、気にする必要なんてない。俺は、千沙が好きだ。お前以外のヤツを好きになれないくらい、本当に、お前が好きなんだ」

「……………」

「だからもし、先輩が原因なら……。頼むから、別れないでくれ……」

もしかしたら、ウザいかもしれない。

女々しいと、思われたらどうか。

でも、そう思われてもいいくらい、彼女が好きだ。

彼女がそばにいてくれるなら、どんな印象を持たれても構わない。
いいから、だから、そばにいて欲しい。

そう思っていると、彼女が俺の腕から逃れようともがく。それを見
て、俺は腕の力を緩めた。

——ああ、駄目なのか……。

俺じゃ、駄目なのか。

ツキン、と。胸が痛んだ気がした。でもそれを無視して、俺は苦
笑を浮かべた。

「悪い……女々しい、よな……。本当に、ごめん」

今でもまだ、彼女を離したくないと思う俺は……。

今まで、どれだけ彼女を思ってきたのか。

「……別れるなら、最後に、名前を呼んでくれないか？ そうすれば、
けじめがつく」

真正面に立つ彼女を見てそう言えば、その瞳から、涙が流れる。

……どうして、泣くんだよ……？

別れたいなら、別れるよ。……どれだけお前を思っている、お前が嫌がるのなら、俺は別れるから。

だから、泣くなよ……。

「泣くなよ。……お前がどうやって笑うかなんて、俺は知らないんだ」

そう、知らない。

俺は何も、彼女のことを何も知らないんだ――。

そう思ったら、胸が抉られるように痛んだ。

「……蓮」

――トクン。

……ああ……もう、十分だ。

そう思えた。素直に、そう思った。

だから、

「別れたく、ないよ……」

「……へ？」

続いた言葉に、思わずマヌケな声を出してしまった。

「……あ、は、え？」

「私が、別れたいって言ったのは……先輩じゃない……」

「あ、ああ……そう」

じゃあ、何だ？

俺は一体、何故別れなければならなかったんだ？

意味が分からず、俺は少し混乱する。

「……でも、別れたいの……」

……………。

……………。

「千沙、頼む。分かるように、説明してくれないか？」

どれだけ学力で主席を取っていても、流石に恋愛で主席はとれない。というより、取れるなら取りたい。彼女の気持ち分かるのなら、と思う。

——が、今の俺に、それだけの免疫はない。

これが2人目の彼女で、実質的に言えば、初めてと同じ感覚だ。菖蒲とは、恋人らしいことはあまりしていないから。

「……私、蓮のこと、何も……知らない」

「……………」

「でも、私も……まだ、蓮に何も教えてないから……」

だから、教えて欲しいとは、言えない……？

「だから、別れたいの……」

「……………」

……………。

……………。

……………。

今ので分かる人、手を上げてくれ。

俺は分かん。

「……………なあ、千沙。1つ、確認させてくれ。……………お前は、俺が嫌いか……………」

首を、それはもう、凄い勢いで横に振る彼女を見て、俺は凄い安堵する。でも、それだと尚更意味が分からない。

好きなのに別れなきゃいけないのは、何故？

「俺も、お前が好きだ。……………なら、別れなくてもいいんじゃないか

「？」

「……………」

無言で、小さく首を振った彼女を見て、俺は頭を掻く。

どーすりゃいいんだ……？

「お昼……美嘉先輩に、言われたの……」

ドクン。

佐々木に……？あいつ、何を言いやがったんだ。

フツフツと湧き上がる怒りは、彼女の言葉によって流された。

「ラブラブだね、って……」

……………。

……………。

……………。

「……で？」

いやもう、それ以外返せないですよ、はい。

本当に呆れた声で返した俺を、チラッと見て、彼女はポツリポツリと、言葉を搾り出した。

「……私、最初はその言葉に、何も言えなかったの。……でも、1人で色々と考えて……気づいたの。私、蓮のこと……何も知らないんだなあって」

「……………」

「美嘉先輩は、たくさん知ってたの。

流石に、過去のことは知らないって言ってたけど、誕生日も、血液型も……全部。好きな食べ物とか、ジュースとか……たくさん、たくさん」

それは今、俺も思っていたことだ。だから別に、疑問はない。

でも、それがどうして、“別れる”という選択肢になるのか。

「……それは、これから知っていけばいいだろう？ 知りたいことなら、何でも教える。だから――」

その言葉に、でも彼女は首を振る。

「駄目、なの……」

「は？」

「今の私じゃ……駄目なの……」

“今の彼女”じゃ、駄目……？

意味が分からず眉を顰めると、彼女は泣き出しそうになりながら、

眩いた。

「私はね……。過去に、たくさんたくさんあって……。でもまだ、蓮にそれを教えられてない」

「……………」

「それだけじゃない。

……私はもしかしたら、蓮を……真山君に重ねてるのかもしれないって、先輩と話してて思ったの」

「!？」

その一言に、何も言えなかった。

前兆はあった。俺を見ているのに、俺を見ていない時が、ないとは言いい切れなかった。その度に、俺は確かに、不安を感じていた。

「先輩の話を聞いて、“違う”って思った。それは、“蓮”じゃないって。……でも、でもそれは、私が真山君と重ねてるからじゃないかって、そう思って……」

思ったら、止まらなくなって……!」

「……………」

「分からなくなって、私が好きなのは誰なのか、全然分からなくなつて……!こんな思いのままじゃ、蓮と一緒にいられない。傷つけるだけで、終わらせてしまうかもしれない……」

それくらいなら、いっそのこと、別れたほうがいいって……そう思ったの」

傷つけるくらいなら。

こんな思いのままでは。

そのどれもが、俺を思っの言葉だった。

それが嬉しくて、切なくて、——悲しくて。

「……千沙」

そっと、彼女を抱きしめた。

長い髪に指を滑らせながら、俺は彼女に囁いた。

「——別れよう」

3、直人という存在

彼女に別れを告げて、一週間が経つ。

そんな今日、俺は直人と一緒に、マックに入っていた。

「……で？」

「おん？」

いつもはあまり飲まないコーラを飲みながら、俺は妙に上の空の
声で返した。

「何で別れたんだ？」

「……………」

「その様子じゃ、嫌いだから、ってわけじゃねえんだろ？」

鋭い一言に、俺は思わず苦笑した。

コイツとの付き合いは長い。

でも、俺はどこかで、“まだ、菖蒲のことが忘れられないか？”
と、聞かれるのかと思っていた。

意外なことに聞かないこいつを見て、付き合いが長いんだなと、

今更思った。

「菖蒲が原因か、って……聞かれると思ったけどな」

「何年つるんできてると思ってんだよ？……普段のお前を見てりゃ、ど
んだけ中山が好きかなんて、嫌つつうほど分かるよ」

それこそ、菖蒲が見ていたら泣くくらいに、と。妙に分かり易く
て、分かりづらい言葉に、俺は曖昧に笑うしかなかった。

「……お前は本当に、態度に出るからな」

「いいことなのか？それは」

「いいんじゃないか？……まあ、言葉は足りねえけどさ」

確かにそうだ。

今回彼女と別れたのも、俺の言葉が足りないから、というのが、
入っていないわけじゃない。もっと話し合っていれば、少し距離を
置く、というだけで終わったかもしれない。

でも今は、それじゃ足りない。完全に距離を置いて、互いに見つ
め直す必要があると、そう思った。

彼女の言葉が、俺にそう思わせた。

「……言われたんだよ、千沙に」

「何を？」

「……俺のことが好きなのは、マヤマって言う初恋のヤツと重ねてるからじゃねえか、ってさ……」

意外と鋭く胸に刺さったその言葉は、呟くたびに胸を刺す。思うだけで、思い出すだけで、胸がズキズキと痛んだ。

「……きちーな……それ」

「だろ？」

苦笑してコーラを飲めば、「だからか」と直人が笑った。

「おん？」

「お前がコーラを飲むときは、荒れてるときだからな」

「……………」

鋭いヤツ。

ため息をついた俺は、頬杖をして、彼女の香りがするジャージを顔にくつつける。

休日挟んで3日後に、彼女は律儀に洗って返してくれたのだ。彼女に別れを切り出して、6日目の出来事だ。つまり、昨日の話。

どこか余所余所しい態度に、胸が痛んだのは、記憶新しい。

『これ……、ありがとう。高瀬君』

彼女を、抱きしめたかった。

彼女に、触れたかった。

彼女の名前を、呼びたかった。

「俺さ」

「ん？」

ポテトを食べる直人を見ず、外を眺めながら、俺は呟くように愚痴を漏らした。

「……あいつから、“好きだ”って……言われたことないんだよな」

「……でも、付き合ってたんだろ？」

「その日以来、一度もねえよ。」

——不安が、なかったわけじゃ……ねえんだよ。でも、あいつの態度が、目に見えて変わらないから……無理言わせなくてもいいか、って……思ってたんだけどな」

もう少し早く、気づけばよかったのだろうか？

そんなことを考えて、俺は自重するかのように笑った。

「んなこと言ってるけど、俺だって……あいつ自身を好きになったかなんて、分かんねえけどな」

「……どういう意味だよ？」

問い返す直人の目は、微かに厳しい。そんな直人の指に、菖蒲からのリングはまだない。でも、順調だという話を、少し前に聞いた気がした。

「菖蒲と別れて……高校で初めて好きになったって、言っただろ？でもさ、あいつのどこを好きになったって聞かれたら、……答えられないんだよな」

「……………」

「菖蒲と重ねてたんじゃないか、って言われたら……絶対に違う、なんて、断言できないんだよ。俺もたまに、あいつの行動を見て、菖蒲を思い出してたから」

いい例が、文化祭の日だ。

何かを喋ろうとした彼女は、舌を噛んで、言葉を上手く出せなかった。それを俺が指摘して、彼女が批判して。その時に、菖蒲との初デートの日を思い出していた。

そして、俺は彼女を好きになった理由を知ったんだ。

——菖蒲のように、ドジな子だからだろうな、って。

「……俺も、千沙のことばっか言ってるんねーよな……」

菖蒲と、重ねていたのだから。

そう言った俺を見て、直人は笑い出した。

いきなりすることに驚いて、飲んでいたコーラをとりあえず置く。
それでも笑い終えない直人を見て、俺は「何だよ」と厳しく言葉を返した。

そして、直人の一言は、あまりにも的に射ていた。

「お前、馬鹿だよな！……お前が中山を好きになったのは、性格を見てからなのかよ？」

「……………」

……性格を見てから……？

「どういう意味だよ？」

「菖蒲みたいにドジなところを見て、お前は、中山を好きになったのか、って聞いてんだよ。確かにお前は、“菖蒲みたいにドジだ”って思ったかも知れねえけど……」

……惹かれたのは、そこじゃなかったんだろ？」

……そうだ。

俺が彼女を好きになったのは、気になりだしたのは、とりあえず匂いだ。

「……変態じゃね？俺……」

「まあ、否定はできねえわな」

グサツ。

意外と刺さった棘を抜きながら、俺は思い出す。

neveとして手紙を出した彼女の文を見て、俺は微かな好意を寄せていたんだと思う。あの文面を見て、護りたいと思った。そこまではもしかすると、“同情”だったかもしれない。

けど。

泣いている俺を見て、彼女もまた、泣いた。

あの涙が、まるで宝石のように綺麗で、泣く彼女がどこまでも綺麗で。

——泣き顔に、惚れていた——

「あ……」

「な？」

ニヤリと笑った直人は、ポテトを口に放り投げた。

「お前は考えすぎなんだよ。……お前は頭で考えるより先に、体で好きになるほうなんだよ。理屈じゃなくて、身体でな。」

「……前にも言っただろ？」

もちろん、後からちゃんと、性格も見るけどさ。

そう言った直人は、のんびりとコーラを飲んでいた。そんなこいつを見て、俺も、ようやく笑えた。

「——そうだな」

neveの文面を見て、彼女の泣き顔を見て、同一人物だと知って。——俺は、嬉しいと思った。そして、胸が苦しくなった。

——護りたい。

強く、そう思っていた。

あの時気づかなかっただけで、俺は、あの時からずっと、彼女に惹かれていたのだ。

「思えば、……そうだな。」

確かに、菖蒲みたいだって思う前に、千沙を見る男に嫉妬しそうになってたしな」

「だから言っただろ？……お前は、考えないほうが、恋愛上手なんだよ」

「……馬鹿みたいじゃねえか？」

「いんじゃないね？勉強では主席なんだしよ」

まあ、そうか。

そこで納得した俺は、親友がコイツでよかったと、本当に思った。

だからこそ、願う。

コイツが、菖蒲と上手くいくように。

コイツの想いが、報われるようにと。



次の日、俺は図書室に向かった。今日は金曜日で、手紙交換の日。

そんなことを思って、いつもの場所に向かおうとすると――。

「あの」

声をかけられ、振り返った。そこにいたのは、図書室の係りの先輩だった。確か、今日の当番は2年のはず。

「俺？」

頷いた彼女は、俺に紙を差し出した。

「……これ、渡してほしいって」

「? 誰に?」

「……ネーベ、って……言っていました……」

ネーベ?……“neve”? ネーヴェ!!!

慌てて受け取った俺は、「ありがとうございます!」と言って、それを持って図書館を出た。

早く家に帰って、ゆっくりと読みたい。いつもの場所になかったということは、いつもと内容が違うということだ。

もしかすれば、重大なこともかもしれない。そう思ったら、走らずにはいられなかった。

でも。

「蓮!」

叫んだ声に、俺は思わず足を止めた。そして、呼んだ人を見て、ため息をついた。

「……なんスか、佐々木先輩」

「あれ? なんだか不機嫌」

そう言って笑った先輩は、最近、よく俺のところに来る。彼女と別れたという噂は、半日で学校中に広がったらしい。

何が楽しいんだよ。

そう思って苛つきはしたが、今はそれどころじゃない。

「今急いでるんです。用事がないなら――」

「……来てほしいところがあるの」

妙に真剣な表情に、俺は口を閉ざした。

「明日、4時にグラウンドに来て。……待ってるから」

それだけ言った先輩は、背を向けて階段を下りていく。流れる髪を見ながら、俺はまた、彼女の瞳が気になっていた。

どこか切なげに揺れた、悲しい瞳。……そこに、俺はいない。

「……………」

彼女もまた、俺に誰かを重ねているのだろうか。

いい迷惑だ、とは……流石に思えなかった。ただ、彼女がそれに気づいて、ちゃんと思いを伝えられたらと、そう思った。

4、過去の欠片？

『蓮さんへ。』

こんにちは。今回は、あなたに全ての過去を打ち明けようと思い、手紙を書きました。

長くなると思いますので、できれば時間のあるときに、ゆっくり読んでください。

私の両親は、私が小学3年生の時に、交通事故で亡くなりました。とても仲のいい両親で、結婚記念日と言って、2人でドライブに出かけたんです。

その日に、トラックに正面衝突し、亡くなりました。

その後、私は祖母に預けられました。そして、お父さんたちがやっていた喫茶店を、お父さんのお友達さんが代わりに経営してくれました。

最近になって、私の兄が、その跡を正式に継ぎ始めました。私ともう1人の兄は、喫茶店を1番上の兄に任せ、違う進路を進もうと思っています。

これが、私が人に隠していた過去の、3つのうちの1つです。
2つ目は、恋愛です。

私は、真山榛馬（ハルマと読みます）という人が、好きでした。

彼は小学6年生の時から入退院を繰り返し、卒業式に参加できないまま、亡くなりました。そんな彼は、私の親友の彼氏でした。

最近、彼の彼女であった、私の親友から、真山君からの手紙をもらいました。

彼からの、最後の手紙です。今までずっと、それを読めませんでした。読んだら、何かが揺らいでしまう気がしたから。

私には、彼氏がいます。とても優しく、意地悪で少し口が悪いけど、カッコよくて、素敵な彼氏です。私を見て、私の全てを受け止めようとしてくれる人です。

そんな彼への思いを、全て否定してしまいそうな気がして。彼氏ではなく、彼氏に真山君を重ねて見ているのだと、そう思い知らされる気がして、ずっと、読めませんでした。

でも、彼と別れて、初めてその手紙を読んで、読んでよかったと、本当に思いました。

真山君と彼氏は、全く違いました。

確かに、表情や仕草は似ていました。でも、よく見れば、そこになんか違って違いがあった。それに、顔だって、彼のほうがずっと大人っぽかった。

考え方も、気持ちも全て違う。彼は彼で、真山君じゃない。そして私は、真山君よりも、彼氏のほうがずっとずっと好きだと、そう思えました。

真山君のことは、本当に好きでした。でも今では、彼氏のほうがずっとずっと好きだって思える。

だから、会いたいと、そう素直に思えた。

近いうちに、会おうと思います。これはもう、決意しました。

最後に、今まで誰にも話したことの無い過去を、あなたにだけ、話します。

私は過去に、人を見殺しにしたことがあります。

名前は、“りさ”といいます。その時の私の遊び相手で、1番仲の良かった女の子です。

ある日私は、彼女と一緒に遊びに出かけました。確かこの時、真

山君のお見舞いに行っただんです。病院に行った記憶があるから、確かそのはずです。

そして帰りに、私たちは近くの森に入りました。森、だったのか、山だったのか。分からないけど、木々が多いしげるところに入りました。

そこで私は、光る何かをガケの下に見つけたんです。その何かを知りたくて、私は恐る恐るのぞき込んでいたと思います。その時に、りさちゃんが来て、私はあれをとりに行こうと言いました。

彼女は慎重な子で、危ないと言いました。その頃の私は短気で、一緒に来てくれないりさちゃんに怒りを覚え、彼女を突き飛ばしました。

彼女の後ろには、ガケがありました。

スローモーションのように見えました。

彼女が、ガケの下に落ちていくのを、黙って見ていました。彼女は手を伸ばして、その口で、たすけて、と言ったのに。

私は、手を伸ばしませんでした。

落ちていくのを黙って見て、落ちた彼女から血が出るのを、やっぱり黙って見ていました。

私は、血が嫌いです。それは、こんなトラウマがあるから、と言えば聞こえはいいですが、血を見るとその時のことを思い出すからです。

罪悪感を覚えるから。だから、血が嫌いです。

その後どうしたのかを、覚えていません。助けを呼んだのか、それとも黙って見ていたのか。

覚えているのは、彼女の遺体を見て、泣き叫ぶ彼女の両親。その両親に、土下座をする兄2人と、祖母の姿。

それ以来私は、心に決めていました。

このことは誰にも話さない。そして、絶対に、兄と祖母に迷惑をかけない。心配をかけない。

もう2度と、泣かないと。

でも、私は泣きました。

彼氏の涙を見て、つられるように泣きました。泣くことを許していなかったのに、泣けました。

その人の涙が、まるで宝石のように見えたから。

彼が他の人のことを思って流す涙が、とても綺麗だったから。

だから私は、その涙から目が離せなかった。そして、その後に見た微笑に、胸が苦しくなった。

その人を、好きになっていました。

私はその涙を見て、微笑を見て、真山君を思い出してはいなかった。だから本当に、私が好きなのは彼なのだと、そう思えた。

そして同時に、好きでいいのかと思います。

私は、人を殺しています。

周りの人は事故だと言ってくれました。でも、私は事故だなんて思えませんでした。

私が殺したと、そう思う以外できませんでした。

こんな私が、あんなにも素敵な人を、好きでいていいのかと。

こんな私が、幸せになることを許されるのかと。

でももし、許されるのなら、私は、彼と幸せになりたいと思う。

これが、私の過去と、私の今の想いです。

前に書いたことを、覚えていますか？あなたは、私が会いたいと

言ったら、会いに行かせてくれると、そう書いてくれました。そして、自分の悩みを聞いて欲しいと、そう言ってくれました。

私は、あなたに会いたい。

そしてできるなら、あなたの悩みを聞きたい。過去を知りたい。力になってもらって分、私も、あなたの力になりたい。

あなたに会える日を、お待ちしております。 中山 千沙より』



彼女の手紙を読んで、最初に思ったのは、喜びだった。

彼女が自分に過去を打ち明けてくれたことに。

彼女が自分を、好きだと思ってくれたことに。

彼女が自分と、幸せになりたいと願ってくれたことに。

だから俺は、彼女に会おうと思った。

『千沙へ

来週の金曜、5時にいつもの公園で待ってる。ちゃんと厚着をして、寒くない格好をするように。

蓮より』

俺はこの手紙を、明日図書室に行って挟めようと思った。佐々木先輩に呼び出されているから、土曜だけど学校に行くことになったし。

「……………」

そう言えばと、思い出す。

『なあ、蓮』

『おん?』

『佐々木美嘉って先輩、知ってるだろ?』

『知らねー……って、言いてえ……』

『そう言うなよ。……あの先輩、どう思う?』

『あーあー、美人だよなー。……千沙のほうが数百倍可愛いけど』

『惚気んな。じゃあさ、陸上部の中村海って知ってるか?』

『かい……？ 知らん。そいつが、どうしたんだよ？』

『それが――』

「……………」

もし、直人の言うことが本当なら。

「……明日、ちゃんと話さないとな」

とりあえず今は、健康の為に寝よう。

そう言い聞かせ、俺はベッドに入り込んだのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6801x/>

君からのメッセージ

2011年11月18日04時13分発行